異世界ヒーロー

氷雨蒼空

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今年もクリスマスの季節がやって来た。第３７機動整備大隊所属の馬鹿二人は、クリスマスコスに身をつつみ、今宵もド派手に暴れ捲ろうとした矢先、気がつけばクウェンサーは見知らぬ街で目を覚ました。
そこに現れたのは日本刀構えるジャパニーズボーイと、モードレッドと名乗るこれまた刺激的な少女。
一体全体意味不明な展開を迎えるクウェンサー。
もう片割れはアラスカとは違う極寒地で謎の邂逅を目撃する。
汚れた鉄兜に革鎧の人物。明らかに時代錯誤と言わんばかりの格好の男に対し、これ

また女騎士のコスプレした女が現れる。
「問おう。貴方が私のマスターか?」
「俺はゴブリンスレイヤーだ」
誰得の超展開なのか理解不能のイベントの中で、ラッキースケベラブロマンスを求めるヘイヴィアの元へ集うのは、残念ポンコツ系の女性陣。
一体オブジェクトはいつ現れるの?
そんなゴリ押しの展開の中で進む世界の破滅に、異界から飛ばされた面子達はどう立ち向かうのか?

目次

第一章　邂逅編
プロローグ ―――― 1
第一話　この素晴らしいくそったれの戦場へようこそ ―――― 10
第二話　レベルに囚われない者達と英雄達 ―――― 26
第三話　冒険を始めよう。 ― 45
第四話　決め手はやっぱり ― 65
第五話　オラリオ ―――― 84
第六話　オブジェクト阻止作戦クエスト ―――― 103
第七話　オラリオ防衛戦 ―― 120
第八話　誰が為に鐘を鳴らす 136
第九話　それぞれの思惑 ―― 148
第一章　幕間 ―――― 164
第二章　迷宮編
第十話　新たな動きと、ときどき大騒動 ―――― 180
第十一話　冒険者 ―――― 196
第十二話　強襲 ―――― 209
第十三話　少年は冒険する ― 221

第一章　邂逅編

プロローグ

「え～とここは何処だ。なんで俺はここにいるんだ？」

けたたましいサイレンがデフォルトのＢＧＭの如く耳を刺激する高度な文明社会の風景。先程までクリスマスイヤーを、トナカイコスのもう1人の馬鹿と、ミニスカ巨乳サンタとミニスカ美乳と馬鹿騒ぎ宜しくの如く盛り上がっていたクウェンサー＝バーボタージュ、目の前の光景に困惑していた。

これは夢か現実か？

これでもかと言わんばかりに握っていたフライドチキンの感触は本物だ。だが、どさくさに紛れた爆乳上司のおっぱいの感触だけはうろ覚え。

くそ！　なんて毒づいたところで空いた左手に残るは空虚な胸の感触の残滓。

どんな状況に置いてもお馬鹿の脳内はブレないらしい。それ故に気づくのが遅れた。

雪の降る寒い季節の中で、街頭テレビに表示されている映像でカウントダウンが始まっていることに。

既にこの場では〝西暦２０２５年のクリスマスは終わっている〟と言うにも関わ

らず、〝1人空気を読めないサンタコスのお馬鹿が注目されていることに〟、クウェンサーは気付かなかった。

それ故に、この国が、オブジェクトを発明し、資本主義同盟となる日本と言う国であるなどこの場に置いて知るよしもなかった。

が、それも周囲が日本語を流暢に話しているのを聞いてしまえば自ずとわかる。

だが、わからないこともある。

「一体ここはどこなんだ・・・・」

真冬の気温にも関わらず額に汗を浮かべながら焦るクウェンサーに、それを教えてくれるものはどこにもいない。

1

クリスマスコスで一人注目を浴びている金髪少年を眺めながら、嵯峨楓は静かに嘆息する。

「また一人送られてきたか」

遠目でも分かる映えるような銀髪に鮮血食の瞳の少年は、白い息を吐きながら、ゆっくりと歩く。

まるで自分だけ世界から弾かれているように、周囲の誰もが視線を彼に向けることは

ない。

　はじめの頃は本当にそこに存在してないかのような錯覚を覚えてしまいそうだったが、それがある種の自分の特殊な能力なのだろうと思うようになっていた。

　すれ違い様に大胆に財布を抜いても気付かれず、すれ違い様に足をかけたところで自分が勝手に足をもつれさせたのだと思われる。

　一見便利な特殊能力であるが、やはり寂しさを感じてしまうものだ。

　今となっては至極どうでもいい悩みだったように思える。

　そうして金髪の少年まで十数メートルまで近づいた時、楓は腰の左側に差していた日本刀を抜き放った。

　漆黒の柄に漆黒の刀身に、蒼色に輝く刃と言う奇妙な日本刀を。

　その一瞬の抜き放ちによる残撃が、衝撃と共に波を放ち空気を切り裂きクウェンサーに迫る。

「てやあああああああああ！」

　ハスキーボイスと共に突如上空から現れた騎士甲冑の存在が、コンクリート地面を陥没させる勢いで着地すると、未だに状況を読めないお馬鹿の首根っこを掴んで自分の背後へ引っ張った。

まるで潰れたヒキガエルのような、情けない声を絞り出したクウェンサーのすぐ後ろでは、一本の剣で残撃の波を切り裂く甲冑騎士の姿があった。

これは何の冗談だ？　これは俗に言う映画撮影とか言うやつか？

まさか幼なじみがテレビ局を巻き込んだドッキリでも仕掛けて来たのではなかろうか？

「それでも今の致死間違いないリアルじゃないか！　嫌だ死にたくない！　おっぱいまだ揉んでない！　いや揉んでないけど感触をこの手に刻むまではカウントされないんだ！　夢なら誰か揉ませてくれおっぱい！」

「ガタガタ卑猥な言葉並べてんじゃねえ！」

騎士甲冑から気前のいい拳骨を食らったクリスマスバージョンのクウェンサーは、涙目を浮かべつつ、落ち着きを取り戻すためにフライドチキンをかじる。

「うぅ。やっぱりこの冷めても美味しいフライドチキンの味は本物だ」

「ったく。変な奴を助けちまったぜ」

呆れる騎士甲冑の人物の兜が、突如メカニカルな変形をして素顔が露になると、クウェンサーは驚きの声を上げた。

「す、凄い！　何そのヘルメット！　どういう仕組み!?　オブジェクト研究者を目指

す俺のエンジニア魂くすぐる一品じゃないか！」
「こら放せ、触るなってどさくさに紛れてどこ触ろうとしてんだよ！」
　鎧の隙間に手をねじ込もうと頑張ったクウェンサーだが、あっさりと手首をネジ切れんばかりに曲げられ組伏せられる。
　奇しくも助けに入った恩人に組伏せられると言う奇妙な光景を前に、目の前で刀を構えていた楓は興が削がれたように、刃を鞘に収めてしまった。

「・・・・無害か」
「俺としてはコイツの頭の中身は有害だけどな！　てか先走りすぎたマスター」
「ほんの、ほんのたまにだがモードレッドの勘も当たるんだな。覚えておこう」

「おいてめえ。危うく貴重な渡来人（アルヴァトロス）殺しかけたのを防いでやったんだぞ。感謝くらいしろよな」
　あきれ混じりにそう告げたモードレッドは、霊装を解除し組伏せていたクウェンサーの拘束を解いた。
　無害認定されて本来喜ばしい筈なのに、お目当ての胸が触れずにがっかり感を醸し出していたが、すぐにモードレッドに首根っこを掴まれそれどころではなくなった。

「どうやら今ので騒ぎになったらしい。お前の格好が格好だけに余計に酷い。ケイサツが来る前に逃げるぜ。いいか楓、合流地点まで先走って暴れんじゃねえぞ！」
「煩いサーヴァントだな。これではどっちがマスター何だかわかりゃしない」

「そう思うなら自重しろよ。本来暴れる役目は俺なんだからな」
言いたいことが山ほどあったが、これ以上長居ができないこともあり、モードレッドはクウェンサーを担ぎ上げ、驚異的な跳躍力でその場を立ち去っていく。
それを見届けた楓は、モードレッド達とは正反対に慌てることなく歩き出す。

誰もが楓の存在に気付かず、先程までモードレッド達がたっていた場所に残るクレーターにばかり注目をしている。
これも見慣れた光景である。
意識しなければ誰も自分の存在に気づかない、まるで空虚な存在。
「本当に俺も・・・・この世界も何なんだろうな」
そっと呟きながら、空から舞い降りる雪を眺めながら、静かにその場を立ち去るのだった。

※

雪が舞い降りる季節に邂逅を果たしたのは、何もサンタコスのお馬鹿達だけではなかった。まるでこの世界の神がパワーバランスでも量ったかのように、まるで運命的な悪戯を行ったかのように、異界からの来訪者を集わせた。

真っ白な雪原に佇むその姿は、薄汚れた兜と革鎧、鎖帷子を纏い、まるで雪原に浮かぶ黒い染みのよう。

そんな人物を前に透明な何かを握り構える女性は、鋭い眼光を向け整った唇で尋ねた。

「問おう。貴方は私のマスターか?」

緊張を僅かに孕み警戒心の強さを滲ませる声音に、その人物は吹き始める強い風のなか、独特の重たい声音で返す。

「俺は・・・・・小鬼殺(ゴブリンスレイヤー)しだ」

吹きすさぶ雪の中で響いた重厚な声音の後に訪れる沈黙。

まるで時が止まったかのような長さにも思える時間であったが、

「へーっくしょい！」

　間の抜けたくしゃみが静寂をぶち壊した。

「う～さみぃ。なんなの？　このやりとりなんなの？　あんた達誰？　超シリアスな空気を勝手に醸し出してるところ悪いんだけど、トナカイコスのわたくしめに分かるように状況説明してくれませんかね！　俺はヘイヴィア＝ウィンチェル上等兵ね！　そこの剣士コスの美人さんから自己紹介お願いします！」

　自分の姿がこの中で一番場違いであることをよく理解している馬鹿二人組の片割れは、下心丸出しの視線を女性剣士に向けながら尋ねると、

「問おう。貴方は私のマスターか？」

「今時そんなセリフを向けられるとは思ってもいなかったぜ。本国ではご主人様～なんて」

「違うようですね」

「ちょっと何でそこ話を最後まで聞いてくれないんですかね～！」

「ならゴブリンか？」

「俺の全身みてどこにその要素があるんだよ！　今さっき名乗ったじゃねえか！」

「そうか」

「そうだよ！」
「そうか」
　まるで不毛なやりとりが極寒の中でのこの状況を前に、ヘイヴィアは己の不運を嘆きつつ叫んだ。
「アラスカよりひでぇぇぇぇぇぇぇ」

第一話　この素晴らしいくそったれの戦場へようこそ

見慣れない都市を一歩出たらそこは広大な平原だった。
まるでどこかを境目にした見えないトンネルを潜ったかのような、そんな一瞬の感覚に戸惑うクウェンサーは、突如地面に放り投げられて地面に顔を強打する。
「も、もう少し丁寧に扱ってくれないかな！　一応軍に所属する派遣留学生だけど、ハンドアックス投げるしか出来ない戦闘力ゼロの一般人なんだから！」
「ハンドアックス投げれるなら一般人にしちゃ上出来じゃないか。つうか軍人なのか一般人なのかはっきりしろよ面倒くせぇ」

「綺麗なお姉さんなのに口調が怖すぎる！　でもそのギャップがまたいい！　っていい加減ここがどこだか教えてくれませんかね？　俺の見立てじゃ資本企業軍に所属する極東の島国だと思うんですけど」
早口で捲し立てるクウェンサーに、流石のモードレッドも困ったように肩をすくめて見せた。
「お前の言う資本なんちゃらなんて単語は俺は知らねぇよ。本来ならこの時代に召還さ

れた時点で情報は入って来るんだけどな。楓（マスター）、もう到着してんだろ。何か知ってるか？」

　モードレッドが突如岩場に向けて言葉を投げ掛けると、先程までそこにいなかった筈の楓が、まるでずっといたかのように片膝を立てて座って空を眺めていた。

「ここはお前のいた世界じゃない」

　しばし訪れる沈黙の後に、モードレッドと楓の間で視線を往復させたクウェンサーは、困惑した顔を浮かべる。

「それだけ？　他にないの？　美少女ハーレムが待ってるとかお前が主人公だとかヒャッハーとか」

「お前が主人公だ。少なくともお前の物語ではなヒャッハー」

「おいマスター。何もコイツのノリに合わせる必要ねえだろ。なんだよヒャッハーって。何でもいいがそれだけ分かれば十分だろ。不満なのか？」

「不満しかないよ！　むしろ不満以外何があるんだ！　俺の癒しはお姫様と爆乳上司の

おっぱいと未だ見ぬラッキースケベ展開なのに！　それに俺はオブジェクトの設計士を目指してるのにこんなところで寄り道してる暇なんかないんだよ」

「ったくギャーギャー喚くなよ。そんな事を心配していられるだけ幸せなこった。時期にそんな余裕もなくなるぞ」

呆れるモードレッドの言葉に首を傾げた時だった。

波打つような地面の隆起と、大気を揺るがすような轟音が三人へ迫ると、モードレッドは即座にクウェンサーの首根っこを掴んでその場から跳躍後退する。

次の瞬間には二人がいた場所の地面が陥没し、中から奇妙な触手にも似た手が地面から生えていた。

見るからにおぞましいシルエットのそれを、平然とした顔でみやる楓に、流石のクウェンサーもコイツは精神がぶっ飛んでいるのではと、疑ってしまった。

「おいマスター！　俺に暴れさせろよな」

「やれるのか？」

「え？　戦うの？」

楓の問いに対してモードレッドは得意気な笑みを浮かべてクウェンサーを投げ渡すと、空中から器用にも触手へ突貫する。

「マジかよ！　エリートも真っ青な身体能力じゃないか」

「アイツはサーヴァントだ。マスターの俺から魔力を供給され活動できる、お前の知識にあわせて説明するなら、人間型に凝縮した小型オブジェクトだ。もっとも様々な状況と個人差から、個体能力はサーヴァント毎に異なる」

「凄い分かりやすいけど想像しづらいな！　オブジェクトを最小限まで小型化したって、あんな動き出来るか特にね！」

楓の横で守られながら戦いを見守るクウェンサーは、そこで自分の異変に気付いた。

「あれ？　サンタコスから軍服にハンドアックス装備までいつの間にか揃ってる」

「恐らくこの世界でのお前の最適化が完了したんだろう」

淡々と説明してくる楓だが、クウェンサーには今一要領えない内容であるも、それでもはっきりと分かることもあった。

それは自分がいつも通り戦えると言うことだ。

「モードレッドの攻撃が通じてない。じり貧だぞ」

クウェンサーならではの冷静な分析の言葉を耳にした楓は、顎に手をあてる。
「あの触手との遭遇は二回目だ。前回は決定打が与えられず撤退した。今回はどうにか弱点を探りたいところなんだが難しいだろうな」
「おいマスター！　余裕かましてないで魔力寄越せ！」
楓は令呪が刻まれた右腕を掲げ魔力を発動すると、大容量の魔力がモードレッドへと流れこむ。
「一日三回の令呪だとしても貴重だ。これ以上無理だと判断したら撤退する」
「了解だマスター！」

俊敏な動きで触手の攻撃をかわしつつ、見た目によらない豪快な剣技を見せつけるモードレッドの動きに、クウェンサーは素人なりにも感動していた。
「凄い動きだ。ん？　待てよ。最適化されている？」

クウェンサーは自分の腰にタブレット端末が下げられていることに気付き、それを起動させるとクウェンサーの予想通り、現在の戦闘から得られた情報を表示させることに成功する。
「まさかオブジェクト以外の戦闘データが見れるとは。モードレッド耐えてくれ！　今

そいつの弱点を見つける」

「あ？　　お前そんなことが出来るのかよ！　っち！　しょうがねぇ」

　籠手だけ顕現させていた霊装から、全身へと広げたモードレッドは、霊装武器の剣で反撃の隙を与えないほどの連撃を叩き込み始める。

「アイツの今の消耗した状態で抑えられるのは残り三分だ。この場で撤退すれば、再度の襲撃に備えながらの移動となる。そうのれば」

「わかってる！　これを逃したら俺達が危険ってことだろ！　そんなこと今まで何度も経験してる！　でもどんなに人間の常識を越えた存在であろうと、この地球上という同じ土俵に上がってるんだ。物理法則とかいろんな法則の影響を受けているのは確かだ。なら絶対に倒せないことはない。存在があるなら消滅だってある」

　クウェンサーは、モードレッドが叩き込んだ攻撃箇所データを羅列していき、そこから細分化された数値の違いから、更に未だに攻撃が通ってない場所を割り出した所で走り出す。

「見つけたぞ！　伊達にオブジェクト相手に生身で戦ってきたわけじゃない！」

「な！　お前何を！」

戦闘力皆無の少年が突如前に出たことで驚くモードレッドだったが、すぐに少年が何かを掴んだのだとさっした。

「このグラム単位がプラチナより高いハンドアックスの火力は伊達じゃない！　どんなに化け物染みた存在の一撃でもこの火力の一点突破の威力を出せてないことがわかった。こいつは相手の動きを見た瞬間に体表の被弾部分を瞬時に硬化させ、内側の弾力を利用して衝撃を逃がしてる！　ならそれを出来なくしてやればいい！」

モードレッドを盾に死角から飛び出したクウェンサーは、触手の体表部分に拳をぶつけると、まるでゼラチン質の如く柔らかい肉質の感触を感じる。

だが同時にそれは待ち構えていた捕食体勢でもあった。

突っ込んだ腕が、まるで締め付けられるような感触に見舞われたクウェンサー。

だがその瞳には恐れがなかった。まるで戦場を渡り歩いてきた者が浮かべる確信にも似た瞳に、モードレッドはニヤリと笑みを浮かべた。

「モードレッド！　引っこ抜いてくれ」

「世話が焼けるぜ全く！」

触手への剣撃を止めたモードレッドが、クウェンサーを引き剥がして後方へ跳躍した時だった。

「人間が造ったものなら必ず壊せるのと同じだ。お前は俺達と同じ土俵にいるんだ！思いしれえええええええ」

スイッチが押されると同時に触手の内側から盛大な爆発が起こり、触手の血肉が周囲へ飛び散るように霧散する。

が、爆発の瞬間に察知したのだろう。

触手へ体内にあったコアらしきものを守るために、その周囲に魔力を張り巡らせたのか、触手の一部とコアだけを残して未だ残存していた。

「くそ！　今のでも決定打にならなかったのか！」

「いや上出来だクウェンサー」

そう告げた楓が既に動き出していた。

「くそが。ったく美味しいところだけ持ってくかよフツー。まあいいけどな」

魔力をほとんど使っていたモードレッドも、半ば悔しそうにしながら、霊装維持を

解いて怪物と己のマスターの戦いを見守る。

「砕け散れ」

嵯峨飛燕流刀技・砕破（さいは）――――

足音も立たない高速機動からの直進で、眼前に迫るコアを勢いを活かし、ブレることのない太刀を叩きつけることにより、まるでバターを切るかのようになます決まりにする芸当。

それが高速の中で一太刀のみならず二度三度行われると言う神業に、流石のサーヴァントであるモードレッドも驚きを禁じえなかった。

「・・・魔術使いの魔法ならいくらでも見てきた。でも魔法を凌駕する剣技なんて使うマスターは今までなかった。全く今回のマスターは何者なんだってんだ」

「知らないのか？」

地面に下ろされたクウェンサーは、土埃を払いながら尋ねるも、モードレッドから返ってきたのは気のない返事だった。

「知らねぇ。アイツは自分のことを話さないからな。こっちのことも聞いてこなねぇし。どうせアイツにとって俺は駒だろうし、俺もそう考えて自分の為に行動したほうが

楽だしな。つうか、お前やるじゃねえか見直したぜ」
　サーヴァントなりに加減しているつもりなのだろうが、クウェンサーの背中を力強く叩いたモードレッド。
　お陰でクウェンサーは勝利した戦いで唯一の負傷者となったのだった。

※

　一方。片割れが大平原で活躍を見せた頃、馬鹿もう一人はとても頼り甲斐のある同行者と共に、雪原の中を歩いていた。
「何この組み合わせ。俺史上初の会話の少なさなんですけど。あらやだ、こういう時って普通クウェンサーが何かしらとんでもないお約束ごとをしでかして賑やかにしてくれる筈なんですけど！　俺賑やかしじゃないからね！」
「ヘイヴィア。少し落ち着いた方がいい。雪原での歩行は体力を普段以上に消耗する」
　セイバーからの忠告に、涙が溢れそうになるヘイヴィア。
　決してセイバーからの助言や優しさに感動した訳でもなく、今の状況を嘆いているからに他ならない。

ましてやトナカイコスから突如軍服へ変換された状況の困惑すら解けていない中、セイバーが霊装か何かかなんて問い詰めてくるものだから、それはもう精神のすり減りは半端ではなかった。

わからないものは答えようがない。

答えようがないものだから察して欲しい。

そんなジレンマを抱えながら歩くヘイヴィアの前では、これまた寡黙な人物が斥候役として前を歩いていた。

こんなくそ寒い冬の雪原を、まさに威風堂々とした乱れのない歩行で歩き続けるゴブリンスレイヤーに、ヘイヴィアは思わず中身がターミネーターなのではと疑ったものだが、本人の自己申告で人間であると聞かされ、一応は納得することにしていた。

「足跡がありますね」

「ゴブリンではないな」

「ねえ、いちいちあんたはゴブリンと比較しないと物を例えられない病気なの？」

「そのような病気は聞いたことがない」

皮肉を真面目な返答で返されたヘイヴィアは、口をへの字に曲げて、一応はスマートバレットが仕込まれたライフルのスコープで周囲を探る。

「反応は見当たらねえな。集音器を使ってみるか」
　差し込み口にプラグを差し込み、イヤホンを耳に差し込みながら、マイクを様々の方角へと構えてみると、僅かに何かが聞こえた気がした。
「何かの呻き声だ。方角からしてこっちだな」
　ヘイヴィアが煽動する形で前を歩き続けると、そこには巨大なカエルが鎮座していた。
　その大きな口を天を仰ぐように向け、今まさにその口から人間の足を生やしているのである。
　正確には呑み困れている最中なのだと理解した時、
「ゴブリンではないな」
「みてわかるだろ！　てか助けないと駄目だろ！　俺のスマートブレットじゃ巻きこんじまう！」
「俺が右の側面から回り込む」
「なら私が左から回り込みましょう」
　即席メンバーとしては中々に連携がとれた行動力に感動しつつ、出番がなくなった

ヘイヴィアは大人しく待とうとした。

ズシン！

背後から聞こえた大振動と、地面を染める大きな影を見るまでは。

「いやあああああああああ！　俺美味しくないから！　どっちか片方助けに来てくれよ！」

「持ちこたえろ」

「貴方なら大丈夫ですヘイヴィア」

すっかりライフルを持っていること忘れ、雪原の中で逃走劇を繰り広げるなか、二人は無事に手際よくカエルの餌になりかけてた水色の髪の女性を助け終えていた。

これならまたアラスカの方がましだったのではないか？　こう言う時には機転の利く相棒がハンドアックスなりなんなりで対処するだろうが！

俺の役回りじゃねえ！

なんて叫び散らしながら逃げ続けたところで、雪の中から犬神家よろしく張りに、雪原から足をにょっきり生やす生き物を発見する。

「つうかおい！　俺達やけに発見物が多いな！　せめてダイヤとかなら喜べるのに！」

「ゴブリンか？」

「ちげーよ！　　つうかいい加減しつけーよ！」

「そうか」

　明らかに興味なさそうな態度のゴブリンスレイヤーは、救出した人物をセイバーに預け、まるで手慣れたように雪原を滑走してカエルに迫ると、棍棒でその頭部を殴打し撲殺して見せた。

　まさに一撃必殺と言わんばかりの芸当を、離れたところから見ていたセイバーは感嘆の感想を漏らす。

「お見事ですゴブリンスレイヤー」

「ゴブリンよりは楽だ」

「・・・・・助けられておいて言うのもなんだけど、あんた本当にゴブリン討伐専門にし

てるのか？」
「無論だ。俺はゴブリンスレイヤーだからな」
　そうですかとため息混じりにいいつつ、ヘイヴィアは雪原の中からニョッキリ生えた足を引っ張ると、黒髪の少年が凍死寸前の状態で発見される。
「うあああ。ありがどね。どこの誰だかわがらないげどだすげでぐれでありがどねえええええ」
「わ、わかりましたから抱きつかないで、・・・―・その・・・生臭い・・・・・」
　普段は冷静沈着なセイバーであっても、カエルの唾液の臭いだけは我慢できなかったようだが、ゴブリンスレイヤーはカエルの死体に歩みよって、突如唾液を撥水性のある革袋に詰め始めた。
「な、何してるんだゴブリンスレイヤー」
　若干嫌な予感を覚えたヘイヴィアの予測は正しかった。
「愚問だ。この唾液は人間の体臭などを誤魔化すのに使える。特に女の匂いに敏感なゴブリンは相手にな。ゴブリン討伐に行く時はこいつを使う」

そう言って視線を向けられたセイバーは、何とも言えない表情を浮かべた後、

「私はサーヴァントですので」

「サーヴァントが何かは知らん。女であれば例外はない。使ってもらう」

ヘイヴィアはこの時セイバーに心の底から同情すると共に、ゴブリン討伐に行くことがないように内心でそっと祈るのだった。

第二話　レベルに囚われない者達と英雄達

「いやぁ本当に助かったよ。どこの誰か知らないけど本当にありがとう。俺は佐藤和真。カズマって呼んでくれ。こいつは仲間のアクア」

「ふふん。この水の女神たる私をいだい！」

「空気読め。助けてもらったのにそんな態度とってどうするんだよ！」

ヘイヴィアとセイバーとゴブリンスレイヤーは、雪原の先にあるアクセルと言う街にやって来ていた。

助けたカズマとアクアはこの街を拠点とし、冒険者として活動していると言う。

そして助けられたお礼として、三人はこの街のギルドの酒場で食事をご馳走になることとなったのだ。

最初冒険者というものが何か分からないヘイヴィアとセイバーだったが、同行者のゴブリンスレイヤーが、冒険者と言うこともあり、そのあたりのかいつまんだ説明のお陰で、二人は何とか理解することができた。

最も理解しきれなかったのは、アクアが女神を自称していることだけであったが。
「へぇ、それじゃあそこの人はゴブリンスレイヤーって呼ばれてるのか。しかもそっちのギルドでは一番上って凄いなあ。ま、かくいう俺も数々の魔王軍幹部を倒しまくって有名だけどな！」
「あらやだカズマさん。そこかしこでクズマたのカスマだの言われて有名の間違いじゃなくて？ぷーくすくす」
「おいこらやめろ！　初対面の人になんてこと言うんだ！　しかも美人のセイバーさんいる前でやめろよな！　お前こそ万年カエルに食われるのと宴会芸が得意なだけの駄女神じゃねえか！」
「あーまたカズマさんが言っちゃいけないこと言った！　取り消して！早く取り消して！」
何とも騒がしい二人を前に、ヘイヴィアは目の前のカエル肉を摘まみながら嘆息する。
「これがあのカエルの肉ですか。生きていた頃の姿から想像できない美味しさです」
セイバーの感想に激しく同意するヘイヴィアだが、来るまでの間に目撃した異様な数々の光景に、若干疲れはてた様子で、早く宿に戻り休みたい気分に駆られていた。
飛び回るキャベツとか意味わからん。本当にここはどこなんだ。

いくら考えたところで見つからない答えに悶々としていると、二人の人物がやって来る。

「帰ってきたと思えば随分と賑やかだな。此方の方々は？」

「ようダクネス。この人達は俺達を助けてくれた人達だ。紹介するよ。うちの前衛役を担っているダクネスと」

「我は紅魔族随一の魔法の使い手！　我が名はめぐみん！」

カズマの紹介を遮り、独特のパフォーマンスを交えたこれまた独特の自己紹介を始める少女を前に、流石のヘイヴィアも顔をひきつらせる他なかった。

（また濃い奴が出てきたよ。流石の俺もキャパオーバーだよ。どうすんの？　こう言うの俺じゃなくクウェンサーの役でしょうが！　誰か早くツッコミ役現れてくれよ！）

そんなヘイヴィアの悩みとは裏腹に、自己紹介は進んでいく。

「私はセイバー。一応サーヴァントですがマスターは不在です」

サーヴァントが何かこの場で知っている者はおらず、その結果、

「へぇセイバーさんって公務員（サーバント）なんだ～」

　サトウカズマの中で、彼女はこの世界でいうお役所勤めをしている人なのだと勝手に勘違いをする。

「へぇ、セイバーさんは見るからに騎士の格好をしているようだが、その、う、腕前の方は」

「自分ではそれなりにあると自負しております」

「どっかのクルセイダーとは大違いだな。誰かさんは防御力だけが取り柄の攻撃が当たらないポンコツクルセイダーだからな」

「にゃは！　こ、こんな時に容赦ない口撃・・・・・さすがたな」

　顔を高揚させ息を弾ませるダクネスの様子に首を傾げるセイバーだが、ヘイヴィアの危機感知センサーは盛大に反応していた。

（え？　何この人、こんなまともそうな見た目して今の言葉を喜んでるの？　俺も蔑まれると高まるタイプだが明らかにヤバいだろ！　いや、俺の予想が間違ってるだけかもしれないな）

「俺はゴブリンスレイヤーだ。主にゴブリン討伐を請け負っている」

「ゴブリン！　その話を詳しく！」

　ダクネスが興奮のあまりにゴブリンスレイヤーの手を握り、これでもかと言わんばかりに鼻息を荒くして身を乗り出してくる。
　この時既にヘイヴィアの中で判決は決していた。
（この人あれだ。駄目な奴だ）
「ゴブリンの習性を逆手にとった戦術を使うことがメインだ。時には水攻めに火攻め。高価な魔法道具の使用も躊躇わん」

「み、水攻めに火攻めだけでなく、高価な魔法道具によるプレイ・・・なんてレベルが高いんだ」
　一人悶え転がり回るダクネスに、ゴブリンスレイヤーはただ一言。

「そうか」
常に冷静さをブレさせない鋼のメンタルを見せつけていた。

※

一方、ヘイヴィアがキャラの濃い女性陣達にゲンナリしている頃。

平原にて触手からの襲撃をやり過ごしたものの、クウェンサー含めた三人は、自分達が文無しの状態であることと、着の身着のままであることに困り果てていた。
「どうしよあモーちゃん！　このままじゃ俺達ひからびちゃうんじゃないのか！　こんな時に消ゴムみたいなレーションすらないなんて０，５世代のオブジェクトと生身で戦うより危機的状況過ぎる！　チキンが食べたいチキンが！」
「うっせーモーちゃん言うんじゃねぇ。どうするんだ？　モヤシが喚き始めたぞ」
「バジリスクか」
「いや、バジリスクはチキンじゃねえだろ。てか本気で狩りに行くとか考えるなよ？

てかバジリスクって架空の生き物だよな？」

　モードレッドはこの場でまともに正常な思考が働いているのが自分だけかと思い、果たしてどうすべき悩んでいると、視界の先に街らしきものを捉える。

「おい。向こうに街らしきものが見えるぞ」

「本当！　マジ！　モーちゃんお手柄だぜヒャッハー」

「ああうぜー。なぁマスター、アイツやっぱり斬るか？」

「行くぞモー。いくら空腹で腹と背中がくっつきそうでも、背に腹は変えられないという言葉がある」

「お前までモー言うんじゃねえ。てかマスター、お前かなり腹減ってんのかよ」

「・・・・・・今ならラーメン１０杯は余裕だ」

「どんだけだよ！」

　空腹二人組を引き連れる形で街にやって来たモードレッドの視界には、中世ヨーロッパを彷彿させる街がの風景が広がっていた。

「近代都市の次は中世か。明らかに世界の状況がおかしくなってるじゃねえか。つか防壁デカいな！」

「はぁはぁ。ここどこだよ。もう歩きたくないんだけど」

「ったく本当にモヤシだなぁ。とりあえずなんなく入り込めたはいいがどうするんだよマスター」
「この街がどんな街か知る必要がある」
　楓は行き交う人々を眺めながらフラフラと歩き始めると、どこかの店の制服らしき服をまとった少女にぶつかる。
「きゃ！　すみません」
「すまない」
　手を差し伸べた楓の手をとり、少女は立ち上がると楓をジーっと見つめて、どこか面白そうな者を見る目を浮かべた。
「もしかして他の街から来た方々ですか？」
「・・・まぁそんなところか」
「そうなんですか！　私、シル＝フローヴァと言います。良かったらこの先の豊穣の女主人っていう店で働いてるんですけど、寄って行きませんか？」
「俺達は一文無しだ。食事はしたいが、稼げる手段を探してる」
「ふむふむ。それではギルドへ行くことをお勧めしますよ。そこで冒険者登録を行えば冒険者になれますが、その後はどこかのファミリアに所属することをお勧めしますよ」

シルの丁寧な説明に耳を傾ける楓の後ろでは、クウェンサーがいよいよ空腹に耐えかねてフラフラと露店へ行こうとしていた。
「おいマスター。クウェンサーの空腹が限界らしいぞ。取り敢えず虫でも野性動物でもてっとり早く狩った方がいいんじゃねえのか？」
「空腹なんですね！　それじゃあ私の弁当お裾分けしますよ」
満面の笑みで弁当箱を差し出してくるシルの好意に甘え、楓はそれを受け取ると、
「それじゃ私お店の支度があるので行きますね。今夜お待ちしております」
実にしたたかなものであったが、彼女の優しさに対して仇するわけには行くまい。
そう考えた楓は弁当箱を開けてすぐさま閉じる。

「・・・・カラフル」

パッと見の感想を口から漏らした後、楓の行動は早かった。
もはや行き倒れそうになったクウェンサーをみやるなり、
「モードレッド、クウェンサーを羽交い締めに」
「なぁ、マスター、俺もちょっと見えたんだが」

「何も言うな。全ての罪は俺が被る」
「え？　ちょ、なに？　その箱の中って凄くカラフルだけど、ある意味人間の胃袋に入れちゃ駄目な奴じゃないの？　ちょ」

ちーん。

一口ほど口の中にシル手製の弁当を突っ込まれたクウェンサーのショクリポが開始される。
「じゃりじゃりした新食感のサンドイッチの中身が、異次元な香ばしさを口の中で放ち、これはもう不味いか旨いかで語る次元じゃない・・・・・うぅ。この味に慣れそうな自分が怖い」
「おいマスター。クウェンサーの精神が崩壊仕掛けてるぞ」
「問題ない。食べて死なないのであればな。確かに新食感だ」
「ある意味逞しいマスターで助かったよ。じゃあそろそろ」
そこで自分の体が楓に押さえつけられたことに気付くモードレッド。
「おい。ふざけんな。マジで何しようとしてんのかわかってんのか？」
まるで幽鬼の如くゆらりと立ち上がったクウェンサーは、シル手製の弁当箱からサン

ドイッチを一つ掴み、ゆっくりとモードレッドに迫り来る。
サーヴァントに負けず劣らずのパワーを誇る楓に、流石の危機感を感じてフルパワーで逃れようとするも、

「令呪を持って命ずる。されるがままに受け入れろ」
「てめえ下らねえことに令呪使ってんじゃねえ！」
令呪を駆使した命令を前に、口を閉じることも拘束を解く力も発揮できず、盛大に口の中へと未知の物質が詰め込まれた。
その時モードレッドは見た。
視界いっぱいに広がる虹の中で、天使の姿をしたアルトリアが手招きをしている光景を。

「父上・・・・・今そちらに・・・・・・・がく」

ちーん。

※

「よ、ようこそ。は、初めての方でしょうか?」
「冒険者登録したいんだが」
　道行く人々に奇異の視線を向けられながらも、何とかギルドへの道を尋ねてようやく訪れた楓達。
「え、えと、登録の前に・・・・・・治療された方が」
　奇異の視線の原因は、楓達のパンパンに腫れ上がった顔にあった。
　原因と言えばシル手製のサンドイッチが始まりだったのだが、その後にどさくさに紛れ、クウェンサーがモードレッドの胸を触ったのが止めと言えた。
　お陰でそのとばっちりが楓にも及び今に至るわけだが。
「取り敢えず・・・・登録を頼む」
「わ、わかりました」
　これ以上モードレッドを不機嫌にさせてはならないと、スマートに手続きを済ませた楓達は、早速ダンジョンへと向かおうとした時、受付の女性に呼び止められる。
「ちょっと待ってください。どこかファミリアへの所属はありませんか?」
「そう言えばそんなものがあったらしいな。ファミリアに入らないと不味いのか?」

「え？　知らないのですか？　この街には多くの神様がおられるのですが、その何れかの神のファミリアに所属して恩恵を授からないと、ダンジョン攻略はまず不可能とまで言われております」

そう言われても宛が全くない楓達にとって、ファミリア探しを行っている暇はない。

「んなもん問題ねえだろ。なぁマスター。さっさと行こうぜ。路銀稼がないと日が暮れちまう」

モードレッドに急かされる中、楓は受付嬢に黙礼だけしてその場を立ち去って行くのだった。

※▪

「エイナ？　どうしたの？」

同僚のギルド職員が心配そうに訪ねてくると、エイナ＝チュールは先程登録したばかりの新米冒険者のことを思い出す。

「えっとね。さっき冒険者登録した人達がいたんだけど、どこのファミリアにも所属してないみたいだったの。それなのにダンジョン攻略に挑むみたいで、止める暇もなく行かれちゃってさ」

「たまにいるよね。でもまぁ、ダンジョンに入ればわかるんじゃない？　命の危険を知れば引き返してくるって」

呑気な笑みを浮かべる同僚に、エイナは不安を隠しきれずに顔をうつ向かせる。

「ごめん。ちょっと出てくる」

あの冒険者達をそのままにして置けない。一ギルド職員がすべきことじゃないかも知れないけど、それでもやっぱり〝あの時〟と同じ思いも、泣く羽目になるのも嫌だから。

走り出した先にて、白髪でルベライトの瞳を持つ少年が、エイナの姿を偶然にも見かけ声をかけてくる。

「エイナさーん！　どうしたんですかぁ？」

「ベル君！　良かった！」

息を整えながらベルの前に歩み寄ったエイナは、今にも倒れそうな勢いでベル＝クラネルの肩を掴む。

「お願いがあるのベル君！」

※

ダンジョン。この迷宮都市にて重要な場所とされるこの地は、冒険者にとっての生活の糧を得るための場所。

魔物を倒しその魔石を集め、時にはドロップ品を回収して売ることで冒険者は生活している。

時には大物の魔物を倒して名声を得ることで名を上げるものもいるだろう。

時にはラブロマンスもあるかもしれない。

一攫千金の夢だけでなく、様々な出会いが訪れる場所でベル＝クラネルは出会ってしまった。

ファミリアの加護が当たり前と言うこの街の常識、ひいてはこの世界の常識が定着している中で、登録したての冒険者が、そんな枠組みから外れた常識外の実力で戦っている姿を。

「マスター、こっちの牛頭は俺がやる！　クウェンサー、下手なところでハンドアックス使うんじゃねぇぞ」

「ったくオブジェクト相手ならいざ知らず、こんな化け物相手にするなんて俺ってついてないよなぁ」

「どうでもいいが俺から離れるな」

　ベルの仲間である命と同じ刀と呼ばれる武器を構えた少年が、いとも容易くミノタウロスを真っ二つにせしめたばかりか、明らかにレベル4、いやそれ以上の力を感じさせる。

　似たような特徴的な銀色の髪に鮮血食の瞳を持つだけに、どこか親近感が沸いてくるが、それ以上に目を離せなかったのが、戦いの中でモードレッドと呼ばれた少女だった。

　全身を白銀の甲冑に突如身を包んだかと思えば、小柄な体躯に見合わない豪快な腕力で、軽々とミノタウロスの一撃を片手で受け止めて見せた。

「おいおい。見かけ倒しかよ」

　しまいには掴んだミノタウロスの大剣を握り潰し、そのまま拳だけでのしてしまった。

　明らかにミノタウロスのパワー負けに見える戦いだが、ベルの目からみてもクウェンサー以外は全く本気を出しているようには見えなかった。

（す、凄すぎる！）

　エイナに頼まれてこっそり助けにやって来たはいいが、レベル4に上がった自分以上

の実力を前にして、出番がないと悟ったベルは、このまま帰ろうと振り替える。
「よう。覗き見は終わりか?」
「ひ、ご、ごめんなさいいいいいいい」
ジャンピング土下座をスタイリッシュに決めたベルを前に、モードレッドは眉を吊り上げ楓をみやる。
どうするんだと暗に尋ねたのだが、ベルの悪意のなさを早々に感じていた楓は、肩をすくめるだけであった。
「えーと、俺達の戦いを覗いてたのは、ギルドの人に言われてたってこと?」
自分がこの場にいた理由を懇切丁寧に説明したベルに、クウェンサーが代わりに応対することとなった。
他の二人はと言うと、
「おいマスター、こっちは魔石と角が回収出来たぜ。つうか楽勝過ぎて退屈だ」
魔物からのドロップ品回収に勤しんでいる最中である。
「でも凄いですよね。加護もないのにミノタウロスをあっさり倒せちゃうなんて。僕なんかミノタウロス倒すのに結構死にかけたんですよ。あははは」
「おいおい、あの二人と一緒にしないでくれよ。あの二人は別格で俺は一般人。機転の良さと手先の器用さだけが取り柄の一般人さ」

自嘲気味に笑うクウェンサーだが、そんな物腰の柔らかいクウェンサーにどこか親近感を覚えたベルは、思わずクウェンサーの手を握っていた。
「そうなんですか！　てかクウェンサーさんの話が色々聞きたいです！　良かったら今晩僕のホームに皆さんで来ませんか！」
突然の誘いにクウェンサーは嬉しそうに頭を掻くも、唐突にサンドイッチのことを思い出す。
「お誘いは嬉しいんだけど、豊穣の女主人ってお店？　そこで勤めてる女の子に半ば強引に貸しを作らされたと言うか、取り敢えず行かなきゃいけないんだよねははは」
「あー・・・シルさんですね。わかります。悪気はないんですけどね。それじゃあ僕も一種行きますよ。僕の仲間や神様も紹介したいんで」
「いいのか？　見ず知らずの俺達なんか一緒にいて」
「大丈夫です！　クウェンサーさん達いい人だって僕わかりますから！　それじゃあ僕先に戻って仲間に知らせてくるのとお店の席予約してきますね！」
善は急げとばかりに走り出すベルに、クウェンサーはどこか面白そうなものをみるような笑みを浮かべていた。
「ったく。いきなりオドオドしたかと思えば忙しなく走っていって。まるでウサギみたいな奴だな」

「確かに。でも、ゴリラみたいな馬鹿力の女性よりは可愛げあ」

途中でモードレッドに顔面をわしづかみされたクウェンサーは、直後に視界いっぱいの虹の川を目撃し、その先で上半身裸のヘイヴィア＝ウィンチェルに手招きされる夢を見るのだった。

第三話　冒険を始めよう。

クウェンサー達がオラリオの街でベル＝クラネルとの邂逅を果たした頃、もう片割れのヘイヴィアは、数十キロ離れた先のアクセルの街に滞在していた。

元々は南大西洋方面での作戦が終了し、ちょっとしたバカンスの最中の出来事であったせいか、対して焦りはしていなかったけれども、それでも今頃クウェンサーが、姫様や爆乳上司相手にラッキースケベを発動しているんじゃないかと考えたら、今の自分の恵まれない環境を前にヤキモキするのも同然であった。

「くそ。女性比率が物凄く高いのに、全く心が踊らないってどうなってやがんだよ！　バランスおかしいだろ！　なあカズマさんよぉ！」

「うんうんわかるよヘイヴィア君。女性がこんなにいるのにまともなのはセイバーさんだけだ」

「何でそんな悟った顔が出来るのかわからねぇが、俺は決めた！　元の世界に何がなんでも帰るぜ！　相棒だけに美味しい思いさせてられるか！　何で俺ばっかりネタ枠が集中するんだよ！　やっぱ許せねぇ」

「落ち着きたまえヘイヴィア君。君にとてもいい店を紹介しようじゃないか。君は俺の

命の恩人だ。残念なことにあそこのゴブリンスレイヤーは興味を示さないようなので、ここは男二人だけの秘密としてだね」

「お、それってもしかして」

「ゴブリンか」

「「ちげーよ！」」

「そうか」

てっきり自分の名前が聞こえたのでゴブリンの話と勘違いをしたゴブリンスレイヤーは、ゴブリン絡みでないと知ると、店を開いて道具の手入れの続きを再開した。

現在この場はカズマの屋敷のリビングなのだが、相変わらずアクアは暖炉の前を陣取り、ダクネスとめぐみんが仕切りにクエストに行こうと迫っている。

ここまでは日常の光景なのだが、これからヘイヴィアと〝例の店〟へ行くことを考えているカズマにとって、あの三人と言う障害はどうしても排除したかった。

が、まるで典型の如くカズマの頭の中に妙案が思い浮かぶ。

「そう言えばギルドにゴブリン絡みの依頼があった気がするなぁ」
「あるのか？」
　即座に食いついたゴブリンスレイヤーの様子に、カズマはしめたと考えつつ、ダクネス達をちらりとみやる、
「どうせならゴブリンスレイヤーさんと一緒に行ってきたらどうだ？　俺達はウイズの店とかに買い出しの用があって行けないが、たまには違う人とパーティーを組んで行ってみるのも悪くないと思うぞ。ほら、お前達の凄さってのも見てもらう絶好のいい機会じゃないか」
「なるほど！　確かにカズマの言うとおりだな！」
「そうですね！　この私の真の実力を見せつけてやるとしましょう！」
　ポンコツ二人が釣れたところでカズマは残ったポンコツを見やると、流石に付き合いが長いせいか、残り一人はテコでも動かないと言わんばかりにソファーにしがみつきカズマを睨んでいた。
「私は行かないわよ」
「いいのかアクア」
「何よ」
「今ここで自分の凄さを見せつけて置かないと、お前ただのソファーにしがみつくだけ

しか取り柄がない自称女神で定着するぞ。俺は別にそれでも構わないが、人知れず町中に噂が広まってるかもな」

「しょ、しょうがないわねぇ！　今回ばかりは偉大なるアークプリーストの実力を見せてあげようじゃないの！」

どんなに能力がカンストしている女神でも、知力と幸運は平均以下のポンコツ駄女神。

カズマの策略を前に見事はまった最後の砦たる女神は、早速二人を引き連れて先にギルドへと向かってしまった。

「それでは私も貴女方について行くとしましょうか」

「「へ？」」

ポンコツ三人を見事出し抜いたことで、カズマとヘイヴィアは安心仕切っていただけに、まさかの伏兵の登場に言葉を失いかけた。

「え、えと、セイバーさんはゴブリン退治に行かないんですか？」

声を強張らせるカズマのセリフに、セイバーはちらりとゴブリンスレイヤーの〝ある

持ち物〟を一瞥し、そっと目を反らした。
「今日は体の調子が優れないので」
（（ちくしょー！　あれか！　あれのせいか！））
　ゴブリンスレイヤーが手際よく小瓶に移し代えている液体を見て、二人は血の涙を流すのだった。
※
「ゴブリン退治ですか？　確かにありますね。依然サトウカズマさん達に探索してもらったキールのダンジョンなのですが」
「「またそこ!?」」
　かつてキールのダンジョンにて苦い思い出のある、置いてけぼりを食らった女神と、悪魔に体を乗っ取られたクルセイダーは、何とも言えない複雑な顔を浮かべるのだが、

「かまわん。そこにゴブリンがいるなら殲滅するまでだ」

なんとも頼もしい言葉を口にするゴブリンスレイヤーに、今までに見たことない笑みを浮かべる受付嬢のルナ。

「本当ですか！　冬の時期ってどの冒険者さんも活動してくれなくて困ってたんですよ！　それじゃあお願いしますねゴブリンスレイヤーさん」

「えーと、マジで行くの？　私的には明日からでもいいんじゃないかと思うんですけど」

「そ、そうだな。あのダンジョンに潜るならそれなりの準備は必要かと思うぞ」

「えーと、私的には爆裂魔法は中で使えませんし」

各々に言い訳を並べ始める三人を前に、ゴブリンスレイヤーはただひとこと。

「行くのか行かないのか？　俺は行く」

そう告げて兜越しに三人をじっと見つめてくるのだった。

結局、ゴブリンスレイヤー一人で行かせることに、良心の呵責に耐えかねたダクネス

が、半ば二人を無理やり引きずって行く形で同行することとなった。

「ねえ、このダンジョンは既に探索済みだから、私的にはめぐみんの魔法で吹き飛ばしていいと思うの！」

「そうですね！　私の魔法なら」

「それは駄目だ。入り口から高威力の魔法を放ったところで、ゴブリンが奥に拡張していれば何れどうにかして外に出てくるだろう」

　問答無用で却下するゴブリンスレイヤーを前に、アクアがいよいよ二人に耳打ちを始める。

「ちょっとこの人マジでヤバいんですけど！　ゴブリンに如きに警戒しすぎじゃないかしら」

「いや待てアクア。私達はさほどゴブリンの生態に詳しくない。きっとゴブリンスレイヤーは私達以上にゴブリンを知っているからこそ警戒しているのだろう。く！　ゴブリン！　想像するだけで武者震いが」

　顔を赤くし身もだえするダクネスを放置し、アクアはめぐみんへ耳打ちを始めた。

「ちょっとめぐみん！　もういっそのことヤラカしキャラを活かして、ド派手にぶっぱ

なしちゃいなさいよ。ほら早く」

「誰がヤラカシですか誰が！　そう言うアクアこそヤラカシじゃないですか！　アンデットに集られたり要らないところで結界張って大惨事引き起こしたりと、私以上ですよ」

「ひどいわめぐみん！　私の場合は良かれと思ってのことじゃない！　めぐみんはただの中毒症状でしょ！」

「言いましたねアクア！　この際ですからはっきりさせようじゃありませんか」

二人が取っ組み合いを始めようとしたところで、ダクネスが二人の肩を叩きダンジョンを指差した。

「どうでもいいが行ってしまったぞ」

※

かつてバニルによって一時的に灯されていたダンジョン内の灯りは、仮の主がいなくなった後はすっかり元の薄暗さを取り戻していた。

最も以前の様子など知らないゴブリンスレイヤーにとって、その情報はさほど重要で

はなかった。
その証拠に、なんの奇跡を使用しなくても暗闇の中を平然と前に進んでいた。
ぐしゃり！
「ひ！」
まるで空を切るような音共に、前方から聞こえた音を耳にしたアクアが小さな悲鳴をあげる。
「一つ。ただの雑魚か。斥候ではない。恐らくこのダンジョンに住み着いて間もないのだろう」
「そんなことまでわかるのか？」
「大抵の渡りは住みかを定めると、最初は好き勝手に探索をしたりするが、そう長くない期間で命令系統の流れが出来上がり、組織だった行動をするようになる」
そう話ながら、ゴブリンスレイヤーは雑嚢を下ろして袋から小瓶を取り出すと同時に、持っていたナイフを使ってゴブリンの腸を引きずり出した。
「い、ひいいいい」
そして三人に過酷な選択を迫る。
「選べ。どっちを体に塗るのか」
この時、アクアとダクネスに新たなトラウマが生まれ、めぐみんもまた、ゴブリン

退治に対して別の意味での恐怖を覚えることとなった。

「臭いよぉ。ひぐ生臭いよぉ」
「さ、流石にこの臭いはキツいな。プレイとしては頂けない・・・・・」
「カエルの唾液がまだましだってことを初めて知りました・・・・」
「ゴブリンはメスに対する嗅覚が優れている。臭い消しにはゴブリンの生き血や糞尿が一番効果的だ。連中絶えず不衛生で自分の臭いに関しては違和感を感じないが、それ以外の臭いはすぐにわかる」
　淡々と説明するゴブリンスレイヤーは、通路の曲がり角に差し掛かり、ゴブリンの気配を察知して立ち止まる。
「この奥はどうなっている」
「えーと、確かそのままであれば隠し通路があったわね。てかグレムリンとかが少ないわね」

「グレムリン？　ゴブリンの亜種か？」
「違うわよ。下級悪魔の一種よ」
「なるほど。魔神の眷属か。ゴブリンでないのなら無理して相手する必要はないが、こ

の建物の造りでは、襲撃された場合には迎撃するしかあるまい」
「やけに冷静過ぎるんですけど。普通ここは怖がるところでしょ！」
「そうなのか？」
「そうよ」
「そうか」
「・・・・・ねぇダクネス。私、この人カズマ以上に偏屈な人とみたわ」
「おいアクア！　本人を前にしてそう言うことを言うのはどうかと思うぞ」
そんなやりとりが繰り広げられる中、ゴブリンスレイヤーは持っていた筒状の何かを通路の先へと投げ込んだ。
乾いた音が地面を通して反響する中、何かが吹き出す音の直後に醜悪な悲鳴が響き渡る。
「ＧＲＯＯＯＯＢＡＡＡＡＡ」
「え、何よ今の！　てか怖いんですけど！」
「催涙筒だ。今のうちに畳み掛ける」
言うが早いか飛び出したゴブリンスレイヤーは、持っていたこん棒で真っ先に近づいたゴブリンの頭を叩き潰す。
飛び散る脳漿で床が滑りを帯びる中、ゴブリンの手から引ったくった歯こぼれしたナ

イフを奪い取ると、それをそのまま投擲する。
アクアに迫ろうとしたゴブリンは、その時点で喉から刃を生やして前のめりに倒れると、ゴブリンスレイヤーは念を入れるように、その頭部を流れるような作業の如くこん棒で叩き潰した。
「三つ。門番を中継地点に設け始めている。恐らくだが数は十以上はいるだろ」
「十って多いんですか？」
恐る恐る尋ねるめぐみんに、ゴブリンスレイヤーは静かに地面を見下ろした。
床のすり減り具合や、ゴブリンの足跡らしきものや埃の散り具合をたしかめているのだ。
もっとも鉱人導士であれば、床のすり減り具合の目利きを正確に出来るだろうが、この場にいない者のことを考えてもしょうがない。
「依然は百の大群と戦った。だが、そのときは多くの冒険者達に助けられた。敵の数が多いか少ないかの基準で言えば、ゴブリン相手に戦い慣れている者が少ないこの状況では多いと言える。そして」
ゴブリンスレイヤーはゆっくりと立ち上がり、松明に火をつけて通路を照らして見

せた。
　素人にはわからないが、ゴブリンスレイヤーにははっきりとわかる事実がそこにあった。
「隠し通路があると言ったな。連中はそれを早々に見つけ、更に奥へ拡張しているようだ」
　依然は閉じていた筈の隠し通路は、荒々しい口火が開けられ、更にその地下へと続くような広大な闇が広がっていた。
「えーと、このメンツだけで行くんですか？　うちのカズマさんなら行かないと思うの」
「好きにしろ。止めはしない。だが、ここにいるゴブリンを駆逐しなければ、恐らく明日にでも付近の集落はゴブリンに襲撃を受けるだろう。先程は十と言ったが、拡張された状況からしてシャーマン以上の個体がいるだろう。となれば組織としての群れが形成されていると考えた方がいい。アクセルの街が襲われるのも時間の問題だ」
「そ、それなら尚更援軍を」
「一匹でも逃がせばゴブリンは新たな群れを組織する。仲間を呼びに行くのなら好きにしろ。俺はここに残りゴブリンを殲滅する」
　頑なに意見を変えないゴブリンスレイヤー。

不安そうな顔を浮かべるめぐみんを前に、ダクネスがゆっくりと前に出る。
「行ってくれめぐみん。ここは私とゴブリンスレイヤーで食い止める」
「ちょっとダクネス！」
「アクアも行ってくれ。状況が状況だ。一刻を争う。道中で魔物に襲われでもしたら、爆裂魔法一発しか撃てないめぐみんだけでは危ないからな。それに」
ダクネスは二人へ振り返り、

「このシチュエーション・・・・凄く燃える展開過ぎておかしくなりそうだ！　はぁはぁ！　二人へ行けと命じて自分が残り、ゴブリンにる数の暴力に晒されなす統べなく組伏せられはぁはぁ！　もう辛抱たまらんヒャッハー」
興奮した様子で奥へと走って行くのだった。
「・・・・あれは何か恐怖心を打ち消す魔法(きせき)でも使ったのか？」
実にいつもと変わらぬ抑揚の無い声で尋ねるゴブリンスレイヤーに、二人は揃って、

「「いいえ、あれが平常運転です」」

ダクネスのポンコツぶりを隠すこともしなかった。

「そうか」

そしてそれを聞いても驚きもしないゴブリンスレイヤーもまた、平常運転であったことは言うまでもない。

※

ゴブリンスレイヤー達がキールのダンジョンに潜っている頃、カズマとヘイヴィアは、セイバー連れてアクセルの街でも有名な、働けば働くほど貧乏になる不思議な店主のいるウィズ魔法具店へと足を運んでいた。

本来であれば今頃サキュバスサービスのお店に予約へしに行ってる頃合いなのだが、流石にセイバーに付きまとわれている状況では行くにも行けず、結局ウィズの店に来てしまった次第。

「へい！　いらっしゃい！　これはこれは日々悶々と沸き上がる欲を堪えきれずに色々ともて余している客人よ。お？　今日は世にも奇妙なお連れ様がいるではないか？　どれどれ・・・・・・」

店に入って早々に舐めるように見つめられたセイバーは、驚きのあまりに後ずさると、慌ててカズマが割って入る。
「おいバニル。セイバーさんはこの街の人じゃないんだ。止してやれよ」
「ふーむ。なるほど道理で。喜べ客人。今ならそこの成金客人の将来性からサービスで占ってやろう。貴様の血縁者が早々遠くない街で、鬼の力を宿した者と共にいる」
「血縁者・・・・・？　バニル殿と言ったな。それは本当ですか？」
「私はどこぞの女神と違って曖昧な甘言で人々を惑わすことはせんよ。どこぞの女神と違ってな！ふはははは」
ここぞとばかりにこの場にいない女神を罵る大悪魔に、ヘイヴィアが胡散臭そうな視線を向けていると、今度はバニルの視線がヘイヴィアに突き刺さる。
「普段から相方に美味しいところばかり持っていかれる不幸で哀れな客人よ。貴様の相方もこの場に客人の血縁者と共にいるのが見えた」
「マジかよ！　クウェンサーがこの世界に来てるのか！」
期待と喜びに満ちた声を上げるなか、バニルはカズマを見てニヤリと笑みを浮かべる。
「して、世界の存亡に関わる情報があるのだが、我がウィズ魔法具店の上得意様よ。この

魔道具をお一つ買わないか？」
「相変わらずだなバニルは。で、なんだよそれ」
「聞いてくれるか上得意様よ！　これはだな、旅の灯り事情を解決してくれる便利なカンテラでな。スイッチ一つで内蔵魔力の循環で輝くエコなカンテラだ」
「デメリットは？」
「放熱機構がイカれてな。一度スイッチをつけると止まらず、高熱を発して持ち手が火傷してしまことと、最後には大爆発を起こすという難点がある」
「「要らんわあああああ」」
　カズマとヘイヴィアが声を揃えると、バニルは残念そうにいつもの決まり文句を口にし始める。
「我がポンコツ店主はどういうわけかガラクタを買い集めることに関しては異常なまでの才能を発揮してしまってな。今も返品の為に箱詰めの最中なのだ」
「それでウイズガラクタいつも通り焦げてるわけか」
　カウンターの中の床で、黒焦げになって横たわるウイズの姿に、ヘイヴィアが何と

も言えなさそうな複雑な表情を浮かべた。
「本当、この街って不思議な連中が多いのな」
「して情報代代わりに買って行かぬか？」
「しょうがない。いくつか買っていくよ。武器として使えそうだしな」
「へい毎度！　それではその気前に応じてサービスしてやろう」
「何で上から目線なんだよ」
「許してやってくれヘイヴィア。バニルはこういう奴だが悪い奴ではない」
「ぬははは。そう言うことだ。女子に蔑まれることで興奮する妙な性癖を持つ客人よ」
「絶対こいつ悪い奴だろ！」
　性癖を暴露されあわてふためくヘイヴィアを余所に、バニルはマイペースに話を始める。
「まずここより先のダンジョン。以前私が利用しようとしたダンジョンで災厄が目覚めようとしている。急がなければ尊い命が二つ失われるだろう。そしてそこの女騎士。心して聞くがよい。この世界に呼ばれたのは偶然ではなく必然。人間の魔導師達が産み出した産物がこの世界に汝らを巻き込んだ邪神が呼応しておるわ。その産物は貴様がよくしっているものに相違ない。急がなくては貴様の血縁者は遠からず死ぬ運命にあるだろう」

「・・・・・・そうですか」
「悲観することはない。それは遠い未来の話。そして異界の邪神が動くと同時にこうして抑止力が集まっているのが証拠。まだまだ抑止力としては足りぬが、数が揃えば強力な力となろう」
「つまりは同じ仲間を探せってことだな」
「ふむ。普段煩悩まみれな客人にしては察しが良いな」
「なぁ、さっきからあんた俺にだけ言葉がきつくないか!?」
「おっとすまぬ、汝の悪感情が我輩好みであった故にちいな。そう怒るな客人よ。貴様達に教えておこう。最大の選択肢は生かすか殺すかだ。何れ選ばなければならない。それだけは努々(ゆめゆめ)忘れぬようにな！　それでは我輩は忙しいので用が済んだら帰るがよい！」

　まるで捲し立てられるような速さであったのだが、バニルの予言めいた言葉を前に、店を出てから暫くセイバーは押し黙っていた。

「つうかどうするんだよカズマ。カズマ達が以前行ったダンジョンでとんでも無いことが起きそうなんだろ?」

心配気な顔を浮かべるヘイヴィアに、カズマは困り果てたように頭を掻く。
「それについては皆が戻ってきてから話し合おう。何せセイバーさんの身内の話だってあるんだ。最もアイツらまさかキールのダンジョン行っててりしないよな」
「ゴブリン討伐だろ？　ゴブリンって言ったらそこら辺にあそうな感じがするけどな」
そんな益体もない話をする中、前方から慌てた様子の見慣れた二人の姿を確認する。

「見つけましたよカズマ！」
「カズマさん大変なの！　危険が危ないの！」
「落ち着け二人とも！　あとアクア、毎度のことながらその言葉間違ってるからな。恥ずかしいから他の人がいる前で使わないように！　って他の二人は？」
アクアとめぐみんしかいない様子に、嫌な予感を覚えたカズマ。

そして、案の定、この後バニルの予言が当たっていたことを確信する三人であった。

第四話　決め手はやっぱり

薄暗いダンジョンの闇に目が慣れきった頃、まるでそれが悪夢の始まりだったかのように、ダクネスの瞳には無数のゴブリンの姿が見えていた。
「く、そんなものかぁ！　私はまだまだ行けるぞ！　もっと来て見せろおおおお！」
「ＧＯＯＢ・・・ＧＯＡＹＥＥＥＥ・・・―（なんだこのメス。凄い硬いぞ）」
「ＧＯＢＧＯＢ（しかも人間のメスの癖に、殴られて喜んでる・・・―怖いぞ）」
幾度となくゴブリン達はダクネスへ向けて攻撃を仕掛けりも、その攻撃がやたらと弾かれるばかりか、持ち出したこん棒が折れてしまう始末。
更に驚きや当惑で止まってしまった隙をつき、ゴブリンスレイヤーが容赦なく殺しに掛かってくるせいで、たった二人相手に勢いよく数を減らしていた。
これには味方のゴブリンスレイヤーも、今までにないケースだったせいか、初めての戸惑いを見せていた。
「問題ないのか？」
「むしろ問題しかない！　全然歯応えが無さすぎる！　私が期待していたゴブリンのセクハラがこんなに温いものなのか！」

そんな斜め上の質問を前に、ゴブリンスレイヤーは少しばかり考え込み、
「いや、多分、お前がゴブリンにとってのゴブリンかもしれん」
端的に違うとだけ伝える。正確にはそれしか言えなかった。
何せ例外とはいついかなるときでもつきもので、ゴブリンスレイヤーも今回のゴブリンの反応は初めてだった。
メスを前にして躊躇う姿に、思わずゴブリンスレイヤーは尋ねる。
「むしろお前は男か？」
「し、失礼な！　これでも乙女の端くれだ！」
「そうか」
そんな間の抜けたやりとりの後、再度のゴブリンの襲撃で戦闘は再開されるが、ゴブリンのの攻撃に対して、アダマンタイト級の硬さを誇るダクネスの防御力は突破されることなく、結局隠し通路先の地下へ通じる穴を降りてすぐの場所で、群がるゴブリン達を殲滅し、二人はそのまま休憩を挟むことにした。
「そう言えば敢えて聞かなかったが、ゴブリンに執着する理由を聞いても？」
崩れた瓦礫の腰かけるダクネスに、ゴブリンスレイヤーはゴブリンの死体を一体一

体確認しながら、息のまだあるゴブリンに止めを差していく。
「故郷を滅ぼされた。一部の女は孕み袋にされ、男や子供は惨い殺され方をし、血肉は連中の餌さとなり、俺はそれを見ていることしか出来なかった。たった一人の姉が殺される中、俺はそれを見続けた」

「済まない・・・・・」

「構わん。よくある話の一つだ」
　そっと目を伏せるダクネスに、特に言葉を続けることはなく、淡々と作業をこなすよあにゴブリンスレイヤーは、瀕死のゴブリン達を片付けていく。
　そうして返り血を浴びた姿のまま、ゴブリンスレイヤーは雑嚢から水筒を取り出すと、ダクネスへと投げ渡す。
「いいのか？」

「この先どうなるかわからない。飲んでおけ」
「ゴブリンスレイヤーは強いんだな」
「わからない。俺はこういう生き方しか知らない。これが強いのか弱いかなど知るすべ

を知らない」

「強いさ。一つの信念を曲げずに生き続けるなど、並大抵のことじゃない。でも少しだけ寂しいと思う」

そんなダクネスの気遣いに対して、ゴブリンスレイヤーは少しばかり天井を見上げると、ポツリと呟く。

「そうかもしれないな」

「そうさ。だから見つかるといいな。それ以外の道が」

そう告げるダクネスの言葉に小さく頷いたゴブリンスレイヤーは、ゆっくりと立ち上がると、通路の奥に広がる暗闇を兜越しに睨み付けた。

「ああ。だがその前に連中（ゴブリン）をを皆殺し（スレイ）にしてからだ」

「そうだな」

暗闇に広がる無数の気配の中から、一匹の巨大なゴブリンが重厚な足音を立てて姿を現した。

《愚かで矮小な存在の人間どもよ。我の住みかに土足で入り込んできおって！　ゴブリンだけと思ったか！》

「どうやら大鬼（オーガ）がいたらしい」
「どうするゴブリンスレイヤー？　ゴブリンじゃないぞ？」
「決まっている。こいつがゴブリンを率いているなら〝ついで〟に始末すればいい」
　剣を引き抜き盾を構えるゴブリンスレイヤーは、猛々しく走りだし、周囲のゴブリン達を切り払いながら遊撃を開始する。
《我をついで扱いか！　真っ先に叩き潰してくれるわ》
　全長七メートルは越えるであろう巨体が振り上げる身の丈ほどの大剣が、床を走り回るゴブリンスレイヤー目掛けて振り下ろされると、周囲にいたゴブリンもろとも巻き込み地面を破壊する。
「ゴブリンもろともとは容赦ないな！」
　ゴブリン達の壁を持ち前の耐久力を活かして体当たりで抜けると、ダクネスは勢いよく剣を振り抜いて、二度三度仕掛けた。
《？　一体何をした？　何かの呪いか？》
　勢いよく荒れだけ振り回した剣撃が、一つとして当たらない状況に、オーガは思わず何が起こったのか理解できずに硬直する。

「くぅう、こんな時に当たらない・・・・・でもゴブリン達からの蔑む目がたまらん！」

こんなシリアスな場面でもお嬢様は平常運転だった。

「余所見しているとは余裕だなデカブツ」

だが、そんな状況を冷静に見ていたゴブリンスレイヤーが、このチャンスを見逃すわけがなかった。

こんな状況を冷静に見れるゴブリンスレイヤーもまた平常運転。

悲しいかな。ツッコミ役はどこにもいない。

数少ない火炎魔法のスクロールを片手に、オーガの腕をよじ登ったゴブリンスレイヤーは、その顔面へとスクロールの魔法を　叩きつける。

《ぐあああああ！　おのれえええええ小癪なぁあああ》

知り合いの魔導師に頼み用意してもらった貴重な品で、この先この世界では入手が難しい。

それでもこの場で出し惜しみする訳にはいかないことは、ゴブリンスレイヤーの中で

確かに予感めいたものを感じていた。
言ってしまえばただの勘に過ぎないのだが、長年の経験で培われたものから来る勘は、どうしても無視できない。

スクロールの魔法攻撃では決定打にならず、オーガは火傷した顔を自己再生させながら右腕を天井向けて掲げた。
《魔法なら我も使えるぞ。貴様達の言う奇跡と呼ばれるものだ。食らうがいい》
それは以前、ゴブリンスレイヤーが退治したオーガも使用していた巨大な火球魔法であった。

直撃すれば一溜まりもない威力のそれを前に、ゴブリンスレイヤーはダクネスへ注意を促そうとした時だった。

オーガが魔法を放つと同時に、ゴブリンスレイヤーの前に仁王立ちしたダクネスは、ゴブリンスレイヤーの体を持ち上げ、通路の後方にある天井への穴へとぶん投げた。

「ダクネス！」

まるで時の流れがゆっくりと流れる中で、ダクネスは小さく呟く。

――お前も私の大事な仲間だ――

かつて魔導師キールの寝室があったであろう部屋の穴から、ゴブリンスレイヤーはダクネスが炎に呑まれる姿を見つめることしか出来なかった。

熱波と衝撃を直接浴びなかったとは言え、穴を通して受けたダメージはゴブリンスレイヤーにとって、決して小さいものではない。

それでもゴブリンスレイヤーは、熱を帯びた革鎧や兜の中で、それが己へ貸した業であると強く拳を握りしめる。

穴を通して見上げて来るオーガのにやけ面を前に、ゴブリンスレイヤーは、弱り果てた体で剣を拾い上げ、その切っ先をオーガへと向けた。

「喜べ。今からお前を真っ先に駆逐してやる」

※

「おいおい。何だか振動が地上まで伝わってんだけど大丈夫か？」

　不気味なダンジョンを前にしり込みするヘイヴィアに、カズマも逃げ出したい気持ちに駆られていた。
「えーと、ダクネスなら多分大丈夫だよな？　ほらめぐみんの爆裂魔法受けても平気だったし」
「駄目よカズマさん！　そう言うのって明らかにフラグじゃない！」
　普段からフラグ立てまくりのアクアにこの時とばかりに説教されるカズマであったが、ただ一人勇気ある一歩を踏み出す者がいた。
「私はここで立ち止まっているわけにはいきません。仲間を助け・・・・・モードレッドに会いに行く。先陣を切ります」
　そう言って走り出すセイバーの背中を見て、ヘイヴィアは困ったようにアサルトライフルの弾を確認する。
「だな。ここで仲間を見殺しにしたら相棒に顔向け出来ねえ。俺は俺で格好いい土産話を用意しねえとな。そう言うわけで続くぜ」
「あ、おいヘイヴィア・・・・はぁ。ダクネスは俺達の仲間だ。ゴブリンスレイヤーも

な。今さらここまで来て逃げるなんて出来ないよなあ」

「ですね。なんだかんだ言って仲間思いなところがカズマの良いところです！　いざというときは私の爆裂魔法が火を吹きますから安心してください」

「おいそれはやめろ。俺達が死ぬ」

先陣を切ったセイバーのオカゲカト思われた光景は、セイバーによると既に戦闘の後だったらしい。

通路に転がる無数のゴブリンの死体を数えるのも馬鹿らしくなるのだが、まさかあの二人だけでここまでやれたとなれば、それはそれで凄いことである。

なんて感想を抱きつつ、カズマは暗視スキルを活用してヘイヴィア達の後ろをついていくと、驚きの光景が広がっていた。

かつてキールの寝室があった部屋は隠し通路ごと破壊され、地下への大穴が空いていた。

そして穴の真下に広がるゴブリン達の死体は、まるで強力な炎で燃やされたかの如く炭化していた。

「一体ここで何があったのでしょう」

「奥で戦っている音が聞こえます！」
　セイバーが飛び降りて先へと向かうなか、カズマは暗視スキルで仲間の変わり果てた姿を目にする。
　暗視スキルでは本来正確な姿形は捉えにくいが、幸か不幸か普段から舐めるようにダクネスの体を見ていただけに、それがダクネスであることがすぐにわかった。

「だ、ダクネス！」
　慌てて駆け寄るカズマに合わせ、アクアとめぐみんも何とか飛び降りる。
「カ・・・・・ズ・・・・・マ」
「アクア！ヒールだ」
「任せてカズマ！　」

　カズマに促されるよりも既に準備を整えていたアクアは、ダクネスに向けてヒールを掛けると、たちまちその傷は癒えていった。
「ったく。無駄に感状なだけが取り柄で助かった」
　アクアのヒールを目の当たりにして驚くヘイヴィアは、軍人らしく周囲を警戒し始める。

「何でもいいがセイバー達が心配だ。俺は先に行くが大丈夫か？」
「ああ、すぐに俺達もいくよ。無理すんなよ！」
　互いに拳を軽くぶつけ合うと、ヘイヴィアは通路の奥へと走って行くのだった。
「相変わらず容赦ないな。それよりゴブリンスレイヤーだ！　ゴブリンスレイヤーはどうした！　急いで助けに行かないと」
　意識を完全に取り戻したダクネスが僅かに起き上がろうとすると、その体をめぐみんが支える。

「不思議ですね。いつもは背負われる側の私ですが、こうしてダクネスの体を支えるのも・・・重いですね」
「重いって言うな！　それはあれだ！　私の鎧が」
「ダクネス？　今の貴方の鎧が半壊状態なんですけど」
　アクアの悪意のない止めに、ダクネスは顔を真っ赤にしてうつむいてしまう。
「わかってるよダクネス。人よりちょっぴり筋肉があるだけなんだよ。お前は一先ずここで休んでた方がいい。めぐみんダクネスを頼む。アクアもう一仕事だ」
「ちょっと待ってくれ！　私に弁明の機会を与えずに行ってしまうのか！　それはそれで酷い放置ぷ」

「OKカズマ。ゴブリンスレイヤーを助けて皆で帰りましょう！」

　アクアとカズマがダクネスの言葉を無視して走りだし、勢いよく通路の奥へと駆けつけると、そこには剣を杖がわりに立っているのが限界のゴブリンスレイヤーと、壁へと押し付けられるセイバーの姿があった。

「え？　なにこれ。無理ゲー？」
「おい！　アイツなんなんだよ！　スマートブレッドが全く通じねえぞ！」
　流石のヘイヴィアのライフルでも、怪物にダメージを与えることが困難であることは、その場にいたもの達の目にも明らかだった。
　カズマの目算からして、全長八メートルはあろうか巨大な鬼は、ジロリとカズマ達を見下ろすとニヤリと笑った。
《矮小な存在が増えた所で結果は変わらん。邪神の力によって強化さるたこのわしを倒せるもの等おるわけない。ひねり潰してくれよう》
　セイバーは後でも殺せるとふんでか、オーガがカズマ達に向けてゆっくり一歩踏み出す。
「ひいいいいい！　ふざけんなよ！　いきなりラスボス級とかゲームバランス崩れす

ぎ」

「セイクリッドエクソシズム！」

《ふはははー　そんな神聖魔法ごときで！》

　間髪おかずに放たれたアクアの必殺魔法であったが、オーガは余裕の笑みで片腕でそれを受け止めた。

　かに見えた。

　ズドーーーーーーン！

　盛大な爆発と共にオーガの構えた右腕が、いとも容易く吹き飛んでいた。

《ひあああああああああ》

　どこかで聞き覚えのありそうな悲鳴と共に、オーガが腕を抱えて転げ回る。

「ねえねえカズマさんヘイヴィアさん！　大変よ！　私の神聖魔法受けても片腕一本しか消し飛ばせないわ！」

　片腕一本消し飛ばしただけでも十分な威力なのだが、そこは知力が足りてない女神には判断がつかなかったらしい。

「いや、十分激痛で転げ回っているから効いていると思うんだが」

「俺もそう思う。つうかあれ明らかに痛がってるようにしかみえねえ」
　二人の見解を聞いても尚不安そうにするアクア。
《くそ！　なんなんだ今の攻撃は！　我は邪神の力を》
「セイクリッドハイレゾエクソシズム！」
　今度はアクアのとっておき魔法を土手っ腹に直撃してもがき苦しむオーガ。
「大変よカズマさんヘイヴィアさん！」
「はいカズマです」
「はいヘイヴィアです」
「私のとーってもとっておきの神聖魔法をぶつけたのに、アイツ消滅しないわ！」
「いや、十分土手っ腹に穴空いてるから効いてると思うぞ」
「最早あれだな。もう一押しだろう。もう俺達の出番無しでいいんじゃねえのか？」
　最早死に体のオーガを前に、ゴブリンスレイヤーがゆっくりと立ち上がり。
「アクア、魔法はまだ使えるか？」
「おいおい！　その体でまだ何かしようっていうのか。よしとけ。後は俺達に任せろ」
　ヘイヴィアがゴブリンスレイヤーの肩を軽く叩くも、その手をそっと下ろすものがいた。

「ヘイヴィア。彼は信念の男です。きっと曲げられないものがあるのでしょう」
セイバーの優しい声音に、ヘイヴィアは静かにため息をつく。
「わかったよ。ゴブリンスレイヤー。援護は任せろ。何があってもお前をバックアップする」
「背中を任せた」
ゴブリンスレイヤーとヘイヴィアの拳が軽くぶつかり合うなか、アクアは既に準備を整えていた。
「ＯＫゴブリンスレイヤー！　行くわよ！　ヒール！　ブレッシング？　パワード！」
一気に回復と補助を受けたゴブリンスレイヤーは、未だ残る疲労を余所に最後の気力を振り絞る。
「思えば・・・・・一人だけだと思っていた」
ゆっくりとした足取りでオーガへ向かうゴブリンスレイヤー。

ここに来るまでにいくつものものを失い、取りこぼしてきたなかで、仲間とも離ればなれになった。

「だが、出会いがあった」

自分を命懸けで守り、付き合いの浅いこんな自分を仲間だと言ってくれた者がいた。

こうして駆けつけてくれるもの達がいた。

「今だけはこの運命に感謝しよう」

《矮小な存在が我にたてつきおってえええええ》

「足下に気を付けろよなデカブツ！」

ヘイヴィアのライフルアタッチメントのグレネードが、オーガの足へと直撃すると、ゴブリンスレイヤーとヘイヴィアの視線が交錯した。

「感謝する」

残った腕を振り下ろすオーガに対して、アクアによって強化された腕力が、これを軽々と受け流し、その頭部を眼前に捉えた。

「言っておくが俺にとって貴様は、口が聞けるだけでゴブリンより矮小だ」
　ゴブリンスレイヤーの一撃前に、仲間達の声援が一つとなった。
「「「いけえええええええええええ」」」
　ステップと組み合わせた体の捻りからなる遠心の力を用い、その太い首へと刃を叩き込む。
《ばかな・・・・・・・》
　盛大に宙を舞う首に対し、
「奴は自己再生が可能だ。頭部を破壊しろアクア」
　満身創痍のゴブリンスレイヤーの信頼を受け取ったアクアは、ステッキを華麗に振って目標を定めた。
「任せて頂戴！」
《や、やめろおおおおおおおお》
「セイクリッドオオオオオオ」
　だがこの時カズマは失念していた。この危機的状況がようやくひっくり返された場面において盛大にどんでん返しの可能性があるということを。
　日本と言う娯楽メディアの発達した文化の中で育ったカズマは、創作物とはいえ可能

性を目にして来たばかりか、自身でも数多く体験してきたばかりだった。
それだけに、ヘイヴィアのすぐ脇をすり抜け、高らかにマントを翻し、眼帯を外して高らかに宣言する小娘が、弱りきりながらも必死でそれを止めようと足にすがり付くクルセイダー（わざと引き摺られることに快感を覚えている）が役立たずであることも、
そして、今まさに敵を盛大に屠るという、格好いい役目を明け渡された駄女神が、実に幸運が滅茶苦茶低いと言うことを。
その結果が今まさに目の前で起こった。

「エクスプロージョン！」

この日、アクセルの街から数十キロ離れたオラリオの街でも、盛大なキノコ雲が観測されたのだった。

第五話　オラリオ

巨大なキノコ雲。それはこの世界に長く存在していたヘルメスにとって、初めてみるものだったかもしれない。

オラリオの街の高台から見渡していたヘルメスは、微少を浮かべながら沸き起こる高鳴りに微少を高笑いに変えた。

「いいぞ！　この世界の異変に我々オラリオの神さえ巻き込んだか異界の鬼神。だが俺はそれすらも利用する」

「クックック。神が神を利用ねぇ。まさか俺が巻き込まれるとは」

ヘルメスの背後に控える数人の人物達。

その中の一人である人物が、白衣をはためかせて含み笑いを浮かべた。

「頼むよスラッダー＝ハニーサックル。ヘルメスファミリアの私財を分け与えたんだ。有用な結果を残してくれたまえ」

「勿論だ。この世界でまさか未知のオブジェクトを開発出来るとはな。そしてクウェンサー＝バーボタージュがいる」

「そう。そしてベル＝クラネルもいる。ただ二人の怪物殺し（ジャイアントキリング）の英雄だけで世界は動かな

い。だが間違いなくこの二人はキーマンだ。君は二人にとってうってつけの相手と言うわけだが、この世界を動かすために大量の渡り鳥（アルヴァトロス）の力が必要だ」
「いいのう。この世界という大舞台で余の華々しい活躍を見せつけてくれよう」
「ふふふ。異界でかつて暴君と呼ばれたセイバー。君には〝あの少年〟を見定めて欲しい。後は約束通り好きにしていい」
「ふ。それも余の好き勝手に含まれる内容じゃの。それでは行くとするでな」
　気配なくその場から姿を消す深紅のドレスの少女。その姿を見送ることなくヘルメスは帽子を目深に被り直す。
（ベル君。この変容した世界の中では様々な悲劇が怒るだろう。だが君は英雄の一人として立ち向かわなくてはならない。〝あの少年〟が運命をどう受け入れるか君にもかかっている・・・・・・アルテミスの時と同様に過酷なことを任せることになってしまったな）

※

「「「かんぱーーーーーい！」」」
　多くの冒険者達で賑わう酒場〝豊穣の女主人〟

手慣れた様子で客達の間を縫うように給仕していくウェイトレスや、喧嘩一秒笑い十秒という格言は誰の言葉か、それだけ笑い声の絶えない陽気な酒場と言えた。

時に冒険譚や自慢話が飛び交い、男達の腕自慢が時折間を挟み、飽きればどこぞの女の魅力が語られる。

それが酒場であり、冒険者の憩いの場所だ。

「圧倒されるなぁ。でも料理が旨い！　チキンだけじゃなくカエル肉がこんなに旨いならフローレイティアさんにも食べさせて見たかったなぁ。お姫様は食べるかわからないけど」

「食いながら話すんじゃねえよ。誰もとらねえから落ち着いて食えってんだ」

ウェイトレスが運んできた酒を呑みながら、モードレッドがクウェンサーの頭をわしゃわしゃ撫で付ける中、それを見ていたベルは楽しそうに笑みを浮かべた。

「あははは仲が良いんですね」

「良かねえ。だが短い間でも背中預けあった仲だ。少しは信頼してるさ。まぁあの粘土みたいな爆弾、ハンドアックスだっけ？　あれ使うだけしか取り柄がねぇモヤシだけどな」

「酷い！　俺だって冷静に状況分析して戦ってるじゃないか！　あのウネウネした黒いものだって！」

「はいはいわーったよ。クウェンサーちゃんよく出来ました」

結局クウェンサーは力でも言葉でもモードレッドに勝てなかったが、客観的に見ればベルにとって二人は生きぴったりに見えた。

ただ不思議なのは、この場においてまるで取り残されたように、静かな雰囲気を纏っている楓だった。

時折冒険者達は物珍しい格好のモードレッドやクウェンサーに話しかけても、楓だけは決して話しかけられない。

まるで誰も存在に気づいてないかのように。

ウェイトレスも楓に注文の為に話しかけられなければ言葉を交わさないくらい、どこか風景に違和感を感じさせるほどだった。

本人が意識しなければ誰も気づかない存在。

それはまるで自分から望まない限り、極力避けているかのような節がある。

「あ、あのぅ・・・お食事どうですか?」

思い切って話しかけたベルに、楓は僅かに首を上げ、目の前に置かれた皿を見つめる。

「ここの料理は旨いな」
「ですよね！　ミア母さんの料理は美味しいんですよ！」
「あれぇ？　ミア母さんの料理〝も〟ですよね？　ベルさん」
ひょっこりベルの背後から顔を覗かせるシルに、ベルは滝のような汗を流してこくこく頷く。
「そうです！　シルさんの料理も美味しいんですよ！」
「うふふふ。ベルさんからのリクエストが入ったので、今から腕によりをかけて作って来ちゃいますね♪」
自ら地雷を踏んだ哀れなウサギに対し、
「頑張れよ」
「ドンマイベル」
「まぁ、誰かが向こう側で手招きしても川は渡るな」
モードレッドにクウェンサーと楓。
三人とも他人事のようにベルを哀れむが、地雷とは盛大に周囲を巻き込んで爆発するもの。
「それじゃあ皆さんの分も用意するので待っててくださいね」

他三名の殉職予定者が決定したのだった。

「お！　既に始まってたか。わりぃわりぃ遅くなって」
「ベル様～！　お待たせしました」
「ベル殿遅くなって申し訳ございません」
「遅くなりました」

ベルと同じヘスティアファミリアの面々であるヴェルフ、リリルカ、命、春姫の四人が姿を表すと、空いている席へと促されて着席する。

「べーるーくーん！」

そして満を持して黒髪ツインテールの少女が着飾った姿で皆の前に登場し、早々にベルへと抱きついた。

「わぁ神様！　ちょ、皆さん見てる前で」
「そうですよヘスティア様！　はしたないです」
「うるさい！　サポーター君！　主神が子供に抱きついて何が悪いのさ！　そう言うわけで、〝僕のベル君〟と仲良くなってくれてありがとね」
「おい。なんか俺ガン見されてんだけど」
「ヘスティア様がすみません。ヘスティア様はベル様に近づく女性に手当たり次第警戒

する方なんです」

モードレッドの隣に座ったリリルカが、申し訳なさそうに耳打ちをすると、種が割れて納得したのかモードレッドはつまらなそうに嘆息する。

「安心しろよ。俺はそう言う色恋に興味ねぇ。特に俺は俺より弱いやつにきょうみはねぇよ」

「なぬぅ！　うちのベル君だって強いんだぞ！」

「おいマジで面倒くせぇぞ。どうすんだよ」

「大丈夫ですよ。ヘスティア様はお酒に弱いので、暫く放っておけば」

そんな助言にもならなそうな助言をするリリルカ。

「お！　今日も繁盛しとんなぁ。ミア母さんきたでー！・・・ドちびがいる！　何しにきてんねん！　ここはお子様が来るところやないで」

丁度ロキがファミリアの子供達を連れて店に入ってくるなり、めざとく見つけたヘスティアに喧嘩をふっかけ始める。

「これはこれは、貧相な胸のロキじゃないか。知ってるかい？　胸は母性の象徴なんだよ。いくら身長あっても胸がないんじゃあ母性もへったくれもないよね」

「この胸だけしか取り柄がないドちびがぁぁぁ」

「なにぉ！　ふん。いい加減その貧相な胸を張ふのはよひへふへほひは」
　ロキにほっぺたを掴まれながらもこれでもかと言わんばかりに言葉で応酬するヘスティア。
　もはや名物なのか冒険者達はふたりのやり取りで賭けを始め、互いのファミリアの子供達は関わることもなく互いのテーブル席でさっさと料理を注文していく。
　そんなファミリアの中で、ベルはロキファミリアのテーブル席へと視線を向けていた。
　アイズ＝ヴァレンシュタイン。
　ベルにとって憧れの存在である少女もまた、ベルに僅かに視線を向けると、ベルはそれに気づいて赤面しうつ向いた。
「ベル、もしかしてあの子のこと好きになの？」
　クウェンサーがベルの脇腹を小突くと、意外にもふにゃりとした態度で照れ笑いを浮かべる。
「あははは。一方的に憧れてるだけなんですけどね」
「うんうん。わかるよ。憧れるっていいよねぇ。俺もさ、所属してる大体に美人はいるけど俺なんかが相手してもらえるような存在じゃないから」
　きっとヘイヴィアが聞いたら、迷わず裏へ引っ張って行く事案発生レベルの発言であ

るのだが、本人は全く気付いていない。
最も無自覚な点について、クウェンサーとベルは似ているのだろう。
周囲を眺めていた楓たがらこそ、親切心と言う訳ではないが、この場の〝一部の女性〟の空気がおかしくなっていることと、その〝台風の目〟が何であるのかわかったということから、当事者へ告げることができたのかもしれない。
「どうでもいいが・・・・・・」
楓はベルにわかるように視線で周囲を指すと、ヘスティアを始め命以外のパーティーメンバーの女性陣が不機嫌な顔でベルを見ていた。
「べーるーくーんー」
「ベル様～」
「ベル様・・・・」
「え、えと、何で皆怒ってるのかな～」
ベル＝クラネル。例えレベル4になっても女心に対するスキルは全く備わっていなかった。
※
オラリオの街から南東に十数キロほど離れた〝歪な地〟。
本来であればこの地がどういった地形でどのような場所であったかなど、オラリオの

地の住民でさえ知らないことだろう。
　いや、知っていたのかもしれないが、その様な些末なことは恐らくこの世界に関わる元凶にとってどうとでもなるのかもしれない。
　だからこそ、自分達がここで何をしようが誰も気づくこともないのかもしれない。
「細かいことは何にしても、ヘルメスからの遣いがやっていいってさ」
　赤が印象的なタートルネックの衣服を纏ったツインテールの黒髪の少女は、声高らかに叫ぶ。
「了解だ。こいつを起動させれば盛大な狼煙になるわけだ」
　深紅の衣装に身を包み、夜風に銀色の髪を靡かせた男は背後の巨大な建造物を見上げると、微少を浮かべ呟く。
「醜悪だな。こんなものを使って〝正義のヒーロー〟か。これでは〝あの男に〟笑われるな」
「どうしたのよ？」
「何でもない。それよりいいのか？」
「なにがよ」
「神ヘルメスとやらの策謀は、正直君のやり方に反しているように思えるのだが」
　そんな問いかけに、少女はくすりと笑う。

「珍しいわねアンタが私の心配？　でも大丈夫。確かに気にくわないわ。街の住民を捲き込むやり方はいただけないけど、私達がそうならないように軌道修正すればいいだけのことよ。目標はただ一つ」

いつの時もブレない自分のマスターの言葉に、吹っ切れたような笑みを浮かべ、男は〝白〟と〝黒〟の刀剣を顕現する。

「嵯峨楓の討滅」

静かな声音でそう呟いた男は、少女と共にオラリオの街へ向けて駆け出す。

月明かりが浮かぶ宵闇に、揺れる草花をモニターごしに無機質な瞳で眺めていた少女は、出撃を果たす二人を見送った人物のことなど気にも止めず、ただシートにもたれ掛かったまま、小さな声音でそっと呟く。

「待っててねクウェンサー。今助けるよ」

※

酒場の賑やかな空気もいよいよ終息へと向かおうとしていた頃だった。
少し離れたヘスティア達の席では、楓達が初めてダンジョンに潜った話で盛り上がるなか、ロキ達のテーブルでは次の遠征についてのちょっとした話題が出始めていた。
「ベート」
ただ一人話を上の空のように聞いていた男に、団長のフィン＝ディムナが声をかける。
「ち」
何やら落ち着かない様子のベートは立ち上がり、一度ヘスティアファミリアへ視線を向けると何も言わずに店を出ていっていしまった。
「ありゃお隣さんに刺激されたね」
「だね」
ティオナとティオネが揃ってそう告げると、フィン小さく嘆息する。
「ダンジョンかな」
「だろうな」
「若いのう」
フィンに相槌を向けるリベリアとガレスの隣で、アイズはふとテーブル席にいるベルとは違う雰囲気の、同じ銀髪の少年へと私選を向けていた。

（あの人・・・・・・・・強い）

オラリオの酒場の喧騒が街に響き渡る時刻もとうに過ぎ、満月の光が雲間から覗き始めたころ、小さな塊がとてとてと街中をうろついていた。

冷え込む空気に耐えきれず、道で拾った布を羽織っただけの薄手のワンピース姿の小さな子供は、街を行き交う中でとある人物を目にすると、まるで反射神経の如くその人物へと真っ直ぐ走っていく。

「くそが。加護なしでダンジョンだぁ。ふざけやがって」

ポケットに手を突っ込んで歩くベートは、どこかやさぐれた様に見えるせいか、知っているものでも話しかけるのは難しい。

にも関わらず、そんなベートのズボンを掴む勇者がいた。

「あん？」

イラついた様子で見下ろすと、そこにはアホ毛をひょこひょこさせた小さな子供が立っていた。

「似ている人を発見！　ってミサカはミサカはナンパのみたいに勇気を出して声をかけてみたり！　ちょっとした上目遣いに見上げてみたりして」

（なんだこのガキ）

どこかの迷子かと周囲を見渡してみるが、どこにも保護者らしき者の姿はない。

面倒ごとに関わるのは御免だとばかりに無視しして歩き始めると、少女はとてとてとついてきてやたらと話しかけてくる。

「こんなに可愛い女の子が話しかけてるのに無視するなんて最低！　ってミサカはミサカは口を尖らせて起こってみたり！」

「うっせぇな。消えろって」

瞬間、少女の足元に不穏な気配を感じ、とっさにベートは少女を抱き抱えて跳躍する。

すると、先程まで少女がいた場所に漆黒色の触手のような無数の手が現れていた。

「なんなんだ？」

「間一髪のところ助けてくれてありがとう。ってミサカはミサカはこれまた色気のある声でお礼を言ってみたり！」

「うるせぇガキだ。少し黙ってろ。舌噛むぞ」

驚異的な跳躍力で屋根伝いに走っていくと、触手もまて地面を伝いベート達をしつこく追尾してくる。

（狙いはこのガキかよ。このガキはいったいなんだってんだ）

「ちなみにあれが何かはわからないって、ミサカはミサカは首を傾げてみたり」

「ああそうかよ。くそ！　厄介なことに巻き込みやがって。面倒くせぇからぶっ倒す！」

少女を抱えたままのベートは、自分の足に装着された二等級装備、フロスヴィルトによる蹴りを叩き込む。

「な！　くそが！」

まるで弾かれるような衝撃の反射に、とっさの判断でベートはその勢いを利用して後方へと飛び退いた。

このまま連続攻撃をしようものなら、間違いなくあの無数の手に掴まっていたことだろう。

レベル6へ到達したベートの攻撃を楽々と弾いた謎の存在に、流石のベートも内心で心が踊りそうになっていた。

「直感的に感じてはいたが、まさかここまで面倒とはよぅ。だが」

ベートは先の店でのことを思い出す。世の中には加護なしでダンジョンに挑み難な

く生きて帰ってきた奴もいる。
　自分の力の高みが一体どこにあるかなんてわかりゃしねぇ。
　だが、それでもまだまだ未知の領域が存在することだけは確かだと、ベートはこの時確信し、傍らにいる少女へと視線を落とす。
「感謝するぜガキ。邪魔だから離れてろ」
　そう言ってベートは一歩前に出る。
【月下咆哮（ウールヴヘジン）】
　満月の夜だからこそ発揮できるベートのスキルが、ベートを戦闘超特化型のスタイルへと変貌させる。
　獣人特有の固有スキルのそれは満月の夜にだけ発揮できる。
　亜音速を越える速度で迫ったベートの一撃に、漆黒の触手は反射的に防御体勢をとるも、硬化のタイミングがズレたせいか、攻撃を弾くことが出来ずにあっさりと吹き飛ばされていた。
「おせぇよ！　はっはっは！　こいつは相手の動きに合わせて体表を硬化させてんのか！　かてぇまんまじゃ柔軟に動け寝ぇ門な！」
　あっさりとからくりを看破してしまえば、ベートにとってどうと言うこともなかっ

た。

状況を覆された触手は防戦一方を強いられ、このまま決着が着くかと思われた。

「成る程。ウールヴヘジン。確かに厄介な能力であるが」

「あん？」

突如民家の屋根の上から聞こえた声に振り替えると、そこには見知らぬ白衣の男が立っていた。

「誰だお前」

「スラッダー＝ハニーサックル。そう身構えなくても俺は君にとって雑魚だ。何せ設計士が専門でね。荒事は全部人任せなのさ」

「気に食わねぇなぁ。それでガキ相手にこんな怪物けしかけんのか」

「なんとでも捉えてくれ。その打ち止め（ラストオーダー）は我々に必要な素材でね。ミサカネットワークは今でも活きているからな。ちなみにその〝鬼の手〟のなり損ないで戦闘データをとるついでだったんだ。まさに一石二鳥だな」

「なら黒幕潰せばいいだけだろ。死んどけ」

石畳の地面を陥没させ、盛大な跳躍力を見せたベート。

「言ったろ？　〝荒事は他人に任せている〟とな」

　直後、ベートの背中に鈍痛にも似た強力な衝撃が叩き付けれる。

「ぐは！」

　そのままの勢いで地面へと叩き落とされたベートに、ラストオーダーが走りよってくる。

「大丈夫！　しっかりしてとミサカはミサカは泣きそうになって心配してみたり」

「うっせぇな・・・・そんなことしてる暇があったら逃げやがれ。時間は稼いでやる」

　レベル6。

　思えばオラリオにはかつてレベル9まで存在していたが、その最強のファミリアが消滅して以来、その高みの力を知るものはほとんど皆無と言ってよかった。

　それ故にレベル6という数少ないこの街の高みのランクに上がってから、強さのなんたるかを見失っていたことを、ベートは忘れていた気がした。

　フレイアファミリアのレベル7でさえ強いと頭でわかっていても、自分が心のどこかでレベル6の強者という自負が抜けなかった。

　それ故にこのざまだ。

「紹介しようオラリオの冒険者。こいつがオラリオの神々の加護システムをある程度解析して造り上げた疑似眷属（デミ・ファミリア）、いや、システム的にはサーヴァントに近いかな。ライダー対を成す者（ヴェルサス）」

両目を眼帯で覆った長い髪の女性は、幾つもの鎖を解き放ちベートへと襲いかかる。

が、それは途中で猛烈な空中爆発によって阻まれる。

その様子にスラッダー＝ハニーサックルは、まるで待ちかねたような笑みを浮かべ、今まさにハンドアックスが飛んできた方向へと顔を向けた。

「待ちかねたよ。クウェンサー＝バーボタージュ」

「こっちは会いたくなかったけどな。スラッダー＝ハニーサックル」

第六話　オブジェクト阻止作戦クエスト

ベートが店を出て行ってからすぐのことだった。モードレッドがふと立ち上がり外に視線を向けると同時に、楓も立ち上がった。
「マスター。感じたな？」
「恐らくこっちに向かってくる」
「それは正確ではないな奏者。現にこうして余はここにおる」
いつの間にかカウンターに座りワイングラスを傾けていた少女を前に、モードレッドがクラレントを顕現して構えると、少女は気品ある動きで椅子から降り、モードレッドを真っ直ぐに見やる。
「〝本物の王〟を相手になり損ないが相手を務まるかのぅ」
「おいマスター。本気で戦わせろ」
「許可する」
楓から膨大な魔力供給を受けた瞬間、モードレッドは白銀の霊装に身を包み、ベートはクラレントの切っ先を少女に向けた。
「構えろ。てめぇもセイバーだろ」

「ほう。馬鹿ではないらしいな。だが良いのか？　この場で戦えば捲き込むことになるぞ。あぁ、そういえばいい忘れていたが」

まるでわざとらしく、演技を帯びた口調で少女はクウェンサーに視線を向けた。

「お主に恋い焦がれている男からの伝言じゃ。〝アマゾンシティでの借を返す〟だそうじゃ」

「な！　スラッダー＝ハニーサックルがいるのか！」

慌てて立ち上がるクウェンサーに、悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべる少女。

「なるほど。奴は奴でお主に因縁があったというわけか。奴ならこの通りを街の外に向けて走っていけば会えるだろ。もっとも早くせねば、今現在襲われている狼も死ぬじゃりうな。最もそれ以上に、この街が滅ぶやもしれん」

「どう言うことだ？」

楓はどこからともなく黒い刀を顕現する。

「奏者よ。お主の質問に応えても良いが、それでは余興としてつまらぬ。舞台とは拍手喝采を得るために観客を湧かせなくてはならんからのう」

「戯れ言はいいんだよ！」

　襲い掛かるモードレッドのクラレントを、少女は燃えるような炎にもにた形の剣で受け止め、そのまま外へと誘導するように店の外に飛び出す。
「流石フェイカーじゃな。周りもみずに暴れまわるか」
「その口今すぐ黙らせてやるぜ」
　一挙手一投足の動きに力強さと速さが伴うモードレッドの動きに対し、少女の動きはまるで風に靡く花の揺れを描くような、ふわりとした軽やかな動きであった。
　さながら舞踏者さながらの軽やかなステップは、悉くモードレッドの剛を柔で受け流す。
「しゃらくせー！」
「まだまだじゃな。力はあっても単調じゃな。美しさの欠片もない。力業で押しとおるのは圧倒的強者が時間短縮する為の手段であり、中途半端な技量と力では子供の駄々か、三流役者のつまらぬアドリブにしか見えぬのう」
「いちいち意味わからねぇ例えしやがって！」
　ぶん回す、振り下ろす、横にぶん殴る。
　低レベル冒険者からしてみればモードレッドのそれは、破壊的なまでの暴力と恐ろ

しさに見えるのだが、目の前の少女にはさした脅威には見えなかった。
それを察してか益々モードレッドは苛立ちが募るも、同時にそのスピードが増していく。
直情型の傾向には必ずしもデメリットしかないわけではない。
その感情を時に力に替えることが出来るものだ。
(なるほど。かつてのマスターとの出会いがこやつを成長させたか。もっとも本人は覚えておらぬだろうが)
そして少女は奏者と呼んだ少年を一瞥した。
「良いのか加勢せず。サーヴァント一人では余を倒すのは難しいぞ?」
そう言葉を投げ掛けたが、楓はモードレッドを見やる。

「今加勢したらモードレッドが怒るだろ」
「あったりめーだ!」
「そう言うわけだ。それに」
楓は少女達に背を向ける。
「モードレッドは相棒だ。相棒ってのは最後まで信じるもんだろ」

そう告げると、モードレッドは小さく口許を弛めた。
「・・・・・ったく。いってくれるじゃねえか」
それまでの熱さを感じさせたものの中で、モードレッドの頭の中がクリアになっていく。
「マスター！　街の外から何か来やがる！　こっちは任せろ」
「最初からそのつもりだ」

そう言い残して走り去る楓のを背中に視線をむけた少女は、どこか寂しそうな瞳を一瞬浮かべる。
「妬けるのぅ」
「あん!?」
刃と刃を交差させる中、少女はモードレッドを睨み付けた。
「気が変わった。やはり奏者の隣に立つのは余が相応しい」
「アイツは俺の相棒だ。何処の馬の骨かもわからねぇサーヴァントに渡せるか！」
「それは余のセリフじゃポッと出ヒロイン（カー）！」

※

「くそ～あんなのチートだろ！　まじ滅茶苦茶じゃないか！」
「おいてめぇ！　颯爽と現れて潔かったの最初だけじゃねえか！」
　スラッダー相手に物語の主人公宜しくとばかりに登場してものの、ライダー・ヴェルサスに二発目のハンドアックスが通じなかったクウェンサーは、ベートに担がれ街中を逃げ回っていた。
　そして反対側に担がれている少女が、
「ぶー。ピンチが全く好転していないとミサカはミサカは不満を述べてみたり！」
「そんなダメ出しされた所で、俺の専門はオブジェクトなんだからしょうがないでしょ！　クウェンサー君だって化け物相手には無力なんです！　って同情誘うように言ってみてり！」
「ミサカの口癖真似しないで欲しいってミサカはミサカは本気で怒ってみたり！」
「お前らうるせぇーーーー！　黙るか放り投げられるか選ばせるぞ！」
　そう言いつつも、見捨てることができずに、追いかけてくるライダー・ヴェルサスから逃げ続けるベート。
　するとクウェンサーの持っていた端末にノイズが走る。

《いいのか？　そのまま逃げ回って。君は知らないようだが、この世界に実は招待されたエリートがいる》

（無線が使える？　それにエリートってまさか）

《懐かしいことを思い出させてやろう。〝真実の鏡〟って言えば思い出すかな？》

「スラッダー！　まさか」

《お察しの通りだよ。今現在この世界の〝一部の技術〟を用いて建造した魔導技術応用型オブジェクトがこの街に向かっている。そのエリートの名前は》

「おいてめぇ！」

クウェンサーはベートの手から無理やり抜け出て地面へと転がりながら着地すると、その手の無線機を握りしめる。

《ミリンダ＝ブランティーニ。君のお姫様だよナイト君》

わなわなと震えるクウェンサーは、思わず通信機を地面に叩きつけそうになりながらも、そっと口許に近づけた。

「スラッダー。俺はお前を絶対に許さない！　今すぐお前をぶっ殺してやりたいがお姫様を助け出してからだ」

《出来るとでも？　それじゃあまず障害物を突破しないとな。せいぜいタイムリミット

まで足掻いてみるといい。今回は前回と違って難易度は上がってるぞ》

くそ！　拳を足元の屋根へと叩きつけるクウェンサー。

「話は聞こえたぜモヤシ野郎。助けたい奴がいるなら手ぇ貸してやる。でも勘違いすんじゃねぇ。馴れ合いは御免だ」

「あぁ。今だけでもいい、ここを突破して街の外に行き、この街を破壊しようとしてる兵器を止めたい！」

「ち！　クエストだったら金を貰う案件だが、街の危機となればそうも言ってらんねぇ」

「何ごとかと思えば随分面白そうじゃんベート」

「団長が見てこいって言うから来てあげたけど退屈しなさそうね」

ティオナとティオネが軽快な足取りで屋根の上に着地すると、ベートの横に並び立つ。

「バカゾネスが何しに来やがった」

拳をうちならしながらベートは歯噛みすると、足元にいたラストオーダーが不思議そうに二人を見やる。

「あなたのお仲間？　っとミサカはミサカは尋ねてみたり」

「わぁ可愛い！　なにこの子超天使みたいで可愛いんだけど」

　ティオナがラストオーダーに抱き付きそうになったところ、ベートは反射的にラストオーダーをつまみ上げてそれを防ぐ。
「こいつはわけありのガキだ。どういうわけか狙われてんだよ」
「そうなのです！　なのでミサカはこの狼さんに保護者代理を求めていると、ミサカはミサカは愛くるしく本人に懇願してみたり」
「あははは。ベートがこもり！　超似合わないんだけど」
「だね。ファミリアのみんな教えなくちゃ」
「おいふざけんな！」
　顔を真っ赤にして憤慨するベートだが、そんなベートを無視してティオナとティオネは武器を構えてライダー・ヴェルサスと対峙する。
「はいはい。しっかり守ってあげなさいよベート。ここは私達に任せてその子を安全な場所に連れていく。はき違えないでよね」
　普段は団長べったりのティオネに対して、ベートは複雑そうな顔を浮かべつつ頭を掻くと、ラストオーダーを小脇に抱え、反対側にクウェンサーを抱える。
「礼は言わねぇ。俺はコイツらを送り届けてから戻る」
「はいはい。さっさと行きなさいよ」

「アイズなら酒場で待機してる。多分その子を預けるなら酒場が一番安全なんじゃない？」
「ち」
二人にその場を任せたベートは、夜の闇の街へと消えて行くのだった。
「さーて。いっちょ一暴れしますか」
「そうね。団長との憩いの時間を邪魔してくれた礼をしなきゃ」

※

オラリオで騒動が起こる少しほど前に遡る。
アクセルの街のギルドの酒場では、この後オラリオの酒場で起こるであろうドンチャン騒ぎとは正反対の光景が広がっていた。
有り体に言えばお通夜ムード、正確に言えば反省会。
アクセルの街では有名なカズマのパーティーが、大抵こういう時は、ほとんどの冒険者が察して声を掛けてこないのだが、実のところ、パーティーメンバーがメンバーだけに誰もトラブルに巻き込まれたくないので、腫れ物を扱うように触れないでいるだけで

ある。

「ねえねえカズマさん。私思うの。今回の件は私頑張ったと思うの。ほら、めぐみんがやらかしたのは仕方がないとして」

「仕方がない話ですむかぁ！　なんなの！　あの場でなんでエクスプロージョンを撃てるわけ！　ダンジョンとは言え王国では有形文化財に指定する話があったって話じゃん！　そうじゃなくてもダンジョンとし機能すれば、経済的な効果が生まれるから保存の方向で動いてたって話だろ！　その結果がこれだ」

ばん！　と、テーブルに置かれたのは請求金額の書かれた一枚の羊皮紙である。

桁にして八億エリス。

改めてその数字を目にした一同は、そっと目を伏せるも、

「大変だな。まぁ俺達は部外者だから」

「そうなのか？」

「お馬鹿～！　そこは空気読んでいつものように〝そうか〟とか〝そうだな〟って言えばいいんだよ！」

ヘイヴィアがゴブリンスレイヤーの肩をガクガク揺らすなか、ダクネスはゴブリン

スレイヤーの元へ歩みより、そっとその手を握る。

「ゴブリンスレイヤー。一時とは言え背中を預けあった仲だろ私達」

ここぞとばかりに道連れを増やそうとするダクネスに、ゴブリンスレイヤーは鉄兜越しに首を傾げてから、

「背中を預ける前に突っ込まれていたな」

正直な感想でダクネスの企みをぶち壊すばかりか、ドMの性癖を刺激。

「にゃは！　や、やるな。まさかそんな切り返しで」

「変態は放置するとしてだ。めぐみんがやらけしたツケをヘイヴィア達にも負担させるのはどうかと思う」

「どうしてカズマさん！　なんでこういう時だけ常識人ぶるのよ！　普段はクズマとかゲスマの名前に相応しい行動ばかりとるのに」

「よーしアクア！　今すぐ表でろゃ！　今日という今日は容赦しねぇからなぁ」

アクアのほっぺたを両手で摘まんで取っ組み合いを始める中、突如ギルドの職員達が慌ただしくなった。

「た、大変です！　冒険者の皆さんは集合してください！」

受付嬢のルナが、魔道具で街全体に召集を掛ける中、カズマ達はいの一番に集まる。
そしてギルドから集まった冒険者に対し、水晶を通した映像が見せられた。

「なにこれ！　デストロイヤーマークＩＩかなんなわけ？」
「嘘だろ！　オブジェクトじゃねぇか！」

思い付きで口にするカズマの横でヘイヴィアが水晶を食い入るように見つめて叫んだ。
「オブジェクト？」
「核にも耐える積層型（オニオン）装甲を持ち、あらゆるセンサーを備えて、戦闘機の接近すら許さず、主砲の下位安定式プラズマ砲は、街の防壁なんてあっという間に蒸発させちまう。戦闘機相手のキルレシオは１対５００だ」
「前回のデストロイヤー以上じゃねえか！　しかも核が通じないんじゃめぐみんの爆裂魔法だって通じねえ！」
「それだけじゃねえ！　プラズマ式推進装置使ってるから逃げようにもあっという間に追い付かれて対人兵器で秒札される」

二人のやり取りを聞いていた冒険者達だが、あまりの専門用語の多さに話についていけなくても、カズマの言う爆裂魔法が聞かないという言葉は理解出来たらしい。

不穏な空気が広がる中、さらに残念な話が飛び込んでくる。

「先程偵察隊が魔法を放ったところ、魔法による結界が張られていたそうです」

「終わった」

項垂れるカズマの横で、ヘイヴィアは過去の経験を必死に思い出し、レーダー分析官として対抗策を必死に考える。

そんな時だった。

この世界に来て今までお飾りにしか過ぎなかった通信機に、突如ノイズが走り出す。

《いいのか？　そのまま逃げ回って。君は知らないようだが、この世界に実は招待されたエリートがいる》

《懐かしいことを思い出させてやろう。〝真実の鏡〟って言えば思い出すかな？》

《スラッダー！　まさか》

《お察しの通りだよ。今現在この世界の〝一部の技術〟を用いて建造した魔導技術応用

型オブジェクトがこの街に向かっている。そのエリートの名前はミリンダ＝ブランティーニ。君のお姫様だよナイト君》

《スラッダー。俺はお前を絶対に許さない！　今すぐお前をぶっ殺してやりたいがお姫様を助け出してからだ》

《出来るとでも？　それじゃあまず障害物を突破しないとな。せいぜいタイムリミットまで足掻いてみるといい。今回は前回と違って難易度は上がってるぞ》

　一連のやり取りを聞いていたヘイヴィアは、黒幕がスラッダー＝ハニーサックルであることを知り、さらにクウェンサーがこの世界にいることを知った。

「くそぅ！　ちゃんと来てるじゃねえ相棒！」

「なんだかよくわからないが、その相棒な連絡取らなくていいのか？」

　カズマの指摘に思わず通信機を見やるヘイヴィアだが、スイッチに掛けた指を外した。

「今は駄目だ。オブジェクトはこの通信回線を傍受する。恐らくだがスラッダーはわざと通信回線を使いクウェンサーに連絡をとった。そうすることでクウェンサーと同じ大隊もしくはそれに近い軍の人間がいないか確認するためだ。恐らく俺だ。これまでにオブジェクトを生身で破壊してきたのは、俺と相棒だけ。スラッダーが警戒しているのは俺と相棒。ここで喜んで連絡とったら喜んでアクセルの街を襲いに来るだろうぜ」

「それじゃあこのままアイツを野放しにすると？」
　セイバーが怪訝そうな顔を向けてくるが、ヘイヴィアはライフルを背負い直して皆を見渡す。
「んなわけねえ。お姫様が操られてる。ナイトが助けに向かうってんなら、俺はそれを手助けしに行く。もとよりあの怪物と戦いなれてるのは俺だけだ。ここで手伝いを頼んで死なれたら寝覚めが悪い。そんじゃちょっくら行ってくる。短い間だったが世話になったぜ。悪いが馬車を借りていくぜ」
　ヘイヴィアは通り過ぎ際にカズマの肩を軽く叩くと、入り口の前でゴブリンスレイヤーが立ちふさがった。
「なんだよ。今回の敵はゴブリンじゃないぞ」
「そうだな」
「そう言うわけだ。あんたが無事に元の世界に帰ることを祈ってるぜ」
　その脇を通りすぎようとした時。
「俺の仲間が行っていた。・・・・選択肢があってないようなものは選択肢とは呼べない

と」
「で？」
「何がなんでも援護する。だからバックアップは任せろ」
　鉄兜で隠された表情は読み取れないものの、ゴブリンスレイヤーの気持ちを察しないほどヘイヴィアは鈍感ではなかった。
「死んでも知らねぇぞ」
「覚悟の上だ」
「おいおい。ちょっと待ってくれよヘイヴィア。まさか自分達だけで格好つけようなんてしないよな」
　呼び止めるカズマにヘイヴィアは真剣な瞳で見やるも、彼らが皆覚悟を決めた冒険者の目をしていることに、照る臭く頭を掻いた。
「やれやれ。どいつもこいつも馬鹿野郎だぜ。わかった。その命、俺に預けてくれ。作戦をこれから説明する」
　こうしてアクセルの街の冒険者ギルドにて、オブジェクト反抗作戦が静かに行われるのだった。

第七話　オラリオ防衛戦

「ったく。ここでいいのか？」
　街の外にあたる防壁から遠く離れた場所。ベートはクウェンサーを送り届けて下ろす。
「あぁ。恐らくここから先で食い止めないと、動力炉の自爆に街が吹き飛んでしまう」
「お前一人でできる話じゃねえだろう」
「心配してくれるのか？」
「寝言を言うんじゃねぇ。街が吹き飛べば寝床に困るんだよ」
　そう告げると、ベートはそうそうに話を打ち切って立ち去っていった。
　それを見送ることなくクウェンサーは、内心で再度ベートに礼を告げ、ここに来るまでに調達した双眼鏡を構える。
（考えろ。スラッダーはただオブジェクトを動かしたわけじゃない筈だ。アイツのこれまでのパターンから他に狙いがある筈。でなければ〝あんな分かりやすい挑発〟を仕掛けてこない）

頭の中でできる限りスラッダーの思考を投影してみせるが、それでもクウェンサーにそれらしい答えを導き出す為の情報が足りない。
「クウェンサーさーん！」
思考を張り巡らせているなか、ベルがパーティーメンバーと共にクウェンサーの元へと駆けつける。
「ベル。どうしてここへ？」
「ロキファミリアのベートさんにここを教えて貰ったんです」
「あの人って本当ツンデレだなぁ。でも助かったよ。俺としては手持ちの札が一つしかなくてね。そこでだ。君達に何が出きるのか詳しく教えて欲しい」
クウェンサーは、ベル達の戦闘能力やスキル等の詳細を確認し、端末にデータを打ち込んでいく。
「クラネルさん。バーボタージュさん。ミア母さんに言われ助っ人に参りました」
「ミャー達も助っ人に来たにゃー。何か出きることあるかにゃ？」
「アーニャだけじゃ不安出しにゃ。クロエもお手伝いするにゃ」
「はいはい。あんた達だけじゃ不安だからって寄越された私の身にもなって欲しいわ」
リューに続き、アーニャとクロエとルノアの三人も駆けつける。

（リューさん以外は近接戦闘か。困ったな。敵はセンサーに反応した瞬間に対人兵器の雨を降らしてくる。もうすぐで敵の射程圏内どうする？）

「お困りのようだな相棒」

突如現れたヘイヴィアに、クウェンサーは思わず自分の目を疑った。

「ヘイヴィア！　この世界に来てたのか！」

「ったく。心配させやがって。それより時間はねえ。俺がどうやってここに来たかは後だ。援軍を連れてきた。詳細を説明するから俺とお前で作戦を立てるぞ」

「ＯＫ相棒」

普段の調子を取り戻したクウェンサーとヘイヴィアは、互いの端末を通して情報を共有する。

オブジェクトの推定された戦闘能力は、魔法による障壁と核にも耐えるオニオン装甲。

そして武装は下位安定式プラズマ砲の主砲が１０門で、コイルガンに対人レーザー、センサー各種を備えている。

「おかしい。これだけの装備を備え、最初の発見地点からするに既に射程圏内に入ってるのに攻撃してこない。奴の目的は街を破壊することじゃないのか？」

「装備がブラフという可能性は?」
「低いだろう。条件付きで撃てない可能性もある。この魔法障壁というバリアだ。どうして核にも耐える装甲なのに障壁を張る必要がある?」
　クウェンサーの疑問に、リューが口を挟んだ。
「破壊されたら困るのでは?」
「例えば何かの魔法道具を運んでいて、それを街に届ける配達屋なのにゃ～」
「アーニャの馬鹿な意見に耳を傾けなくていいバーボタージュさん」
（何かの装置。確かＪＰｌｅｖｅｌＭＨＤ動力炉以外に・・・・・まさか!）
「くそ!　だがわからない!　アイツが街を破壊する理由はなんだ!」
「おいクウェンサー何かわかったのか?」
「落ち着け俺・・・・・待てよ」
　クウェンサーはヘイヴィア含めた一同をみた後、スラッダーの行動を思い出してみる。
「ここにいる戦力は?」
「あの巨大兵器がとてつもないものであると神ヘルメスからの情報があったので、各ファミリアの最高戦力が時期に集まる筈です」

そこでクウェンサーはスラッダーの真の狙いを知り、地面へと拳を叩きつける。
「奴の狙いは街から戦力を誘導しここに足止めすることが目的だ！　そして奴のもう一つの目的は街にあるんだ！」

「じゃあ今からでも」
「駄目だ！　恐らくあの主砲は生きてる！　撃てるんだよ！　だが連中の企みに気づいて戦力を戻してみろ。スラッダーは容赦なく街へと下位安定式プラズマ砲を撃ち込む。俺達に残されて方法は、オブジェクトを足止めし、自爆の有効射程圏内に街を収めさせないことと、主砲を撃たせないことだ。そして中にいる認識介入を受けているミリンダ＝ブランティーニを何としてでも助けですこと。・・・・・・出来るのか？」

ふとそんなことを呟いた時。

「やりましょう！　クウェンサーさん。敵が何を企んでいるのかなんて関係ありません！　もうやるべきことはわかっているじゃないですか！」

ベルが、クウェンサーの肩を優しく叩くなか、その場に集まったアクセルの街の冒険

者やオラリオの街の冒険者達が一斉に頷く。
「やってやろうぜ相棒。スラッダーの野郎にこれ以上好きにさせてたまるかよ」
　相棒の言葉にクウェンサーはふと笑みを溢す。
「だな。お姫様を助け出す。そして街も守る。考えてみれば今まで俺達がやって来た当たり前のことだったな」

　立ち上がったクウェンサーは、久方ぶりの相棒の拳に、己の拳へぶつけ、オブジェクトがいる方向へと視線を向ける。
　本当の意味で戻ってきた戦場。
「「ただいま。くそったれの戦場さん」」

※

「もう、コイツ硬すぎ！」
「おまけに空中を飛び回ったり、かと思えばあの鎖も厄介すぎる！
　アイツ一体レベルいくつよ！」
　鬼兜を装着したライダー・ヴェルサスを前に、ティオナとティオネは決定打の一つも与えられず苦戦する。

ティオナの扱うオラリオ一の重量と評されるウルガの一撃が、ライダー・ヴェルサスの霊装に軽々と弾かれ、とっておきとばかりにティオネが持ち出してきたハルバートも、ライダー・ヴェルサスの体術であっけなく受け流される。

敵の防戦一方に見える戦いも、実のところ二人の疲労を誘う戦いにみえる。

「くっくっく。さしずめオラリオの上級冒険者もヴェルサスを前には手も足も出ないらしいな」

離れた場所で戦闘を眺めていたスラッダーも、ライダー・ヴェルサスの見当ぶりに笑みをこぼす。

思い通りに街がかき乱されていく様に満足していたが、それに水を差すものが現れた。

目の前に突如現れたその人物に、スラッダーは演技がかった口調で相対する。

「会いたかったよ嵯峨楓」

「俺はお前を知らない」

「こっちはお前を十分すぎるほど知っている」

拳銃をすかさず構えて楓目掛けて発砲すると、楓は屋根の上にある煙突を盾に隠れる。

「どうした？　お前なら弾丸など斬ることが容易だろうに。それとも出来ない事情でも

あるのかな?」

　知っていながら敢えて尋ねてくるスラッダーの人を食った態度に、苛立ちながらも楓は深呼吸して気分を落ち着ける。

「性格が悪いな」

「褒め言葉だよ。さて、俺はこのまま退散させてもらう。出来れば君を貴重なサンプルとして捕獲し持ち帰りたいので、大人しく捕まってくれないかね?」

「お断りだ!」

　煙突の影から飛び出した瞬間に弾丸が目の前に迫るも、楓はこれを難なく避けて見せる。

「流石だな。余力を残していたわけだ。でも想定済みだよ」

　突如背後から衝撃を受けて前に押し倒された楓は、そのまま民家の屋根ごと押し潰される形で下へと落ちた。

「君の戦闘時間に制限があることは知っている。でなければ、たった一人で驚異的な戦闘能力でオラリオの上位冒険者を圧倒できる君が、わざわざサーヴァントなんて己にとって下等な存在を従える必要はないもんなあ」

「・・・・アイツら下等なんか」

「下等だろ?　かつてお前のいた世界は滅んだ。その元凶は他ならぬサーヴァントだろ

？　何故憎んでいないフリをする？　側に置いているのは憎いアイツらを無理矢理従わせることで鬱憤を晴らしてるんだろ？」

「黙れ・・・・・殺す！」

起き上がった瞬間に上方から落ちてきたそれに蹴り飛ばされ、楓は民家の壁を突き破って通りに転がった。

「マスター！」

モードレッドと少女が戦闘しながら移動繰り返し、奇しくもその場に偶然居合わせてしまう。

「どういうことじゃスラッダー！　奏者に関しては余の好きにしていいことになってる筈じゃ！」

「あっはっは。ヘルメスとだろ？　俺はお前と取引なんか一切しておらんよ。バーサーカー・ヴェルサス。やれ！」

鬼面を装着したバーサーカー・ヴェルサスが驚異的な突進力で地面を破壊し、楓へと迫るなか、少女がアエストゥス・エストゥスを構えてこれを阻止にかかる。

「立て奏者！　このままでは死ぬぞ！」

「お前は・・・・・」

「どうせ覚えておらぬじゃろ。雪が降る季節に出会ったことも、一緒にジンジャとやらでオマイリしたことも・・・・奏者の世界が滅んだのは余の力不足じゃった。・・・・そんな余が聖杯に望んだのは、奏者が余とのことを忘れることを引き換えに、新たな新天地で生きることじゃった」

「もっともその世界は邪神によって歪に歪められ、そいつは新たなサーヴァントと出逢い、結局運命から逃れることは出来なかったわけだ。滑稽だな」

　楓を嘲笑い見下ろすスラッダー。

「黙れよ・・・・・」

「ん？　なんだ？　サーヴァント如きが何か言ったかな？」

「黙れって言ってんだよ」

「くっくっく。わかってないなぁ。オブジェクトもエリートも、それ一つだけど戦争のあり方を変えた。サーヴァントも同様に、それ単体で戦争を起こせるわけだ。クリーンな戦争とはよく言ったが、そんな戦争の代名詞が感情を持つなど愚かなことだと思わないか？　だから俺はこうして凶悪な兵器を管理下における術を生み出し、こうして御披露目しているわけだ。そしてそれがなかった為に」

　スラッダーは楓を指差し口角を歪めた。

「そいつの世界は滅んだ。その元凶は他ならぬお前達だよ」

これまで楓がモードレッドに語らなかった過去。

その理由がスラッダーの話の中にあると知り、モードレッドは顔をうつむかせ楓に尋ねる。

「俺はマスターの過去なんて知らねぇ。恨まれてるならそれでもいい。俺はそれでもマスターのサーヴァントである以上従うまでだ」

そう告げるモードレッドに、楓はゆっくり立ち上がり、その背中にそっと優しくふれる。

「俺に従うな・・・・・お前は、お前は己の心に従え。そしてお前はマスターのサーヴァントじゃない。・・・・・・俺の相棒だ」

その一言が何よりもモードレッドの心を突き動かし、俯いていた顔が真っ直ぐ前をみた時、その顔は兵器でも眷属でもない、ただ一人の少年の友人の顔へと変わっていた。

「当たり前だ楓（あいぼう）。派手に暴れるぜ。〝アレ〟使っていいよな？」
「許可する」
楓から魔力を受け取ったモードレッドの霊装が変化していく。
白銀の甲冑が変化し、白と黒の燕を模した燕尾のように裾が背中越しに広がり、鉤爪のような手甲と龍の顔面を彷彿させるような流線型の胴部、そして顔はヴェルサスとは全く違う二本角が生えた鬼面へと覆われる。

「な！　まさか鬼の力を逆にサーヴァントへ転嫁させているだと！」
「スラッダー、お主は奏者が成すすべなく鬼に呑まれるものと思ったのじゃろう。確かに奏者一人では呑まれるだけだった。だが、サーヴァントと固い絆で結ばれた時、一人では抑え込めなかった力は、絆の力へ転嫁される。奏者！」
「ネロ！」
かつて契約を結んだ絆の線が脈打つように甦り繋がると、楓の左腕に新たな令呪が浮かび上がる。
そしてネロの霊装に深紅の衣装を上書きするように、モードレッドとは別種の新たな強化霊装が顕現された。
「くっくっく。いいねえ。良い戦闘データが得られそうだよ。バーサーカー・ヴェルサ

スとアサシン・ヴェルサス。嵯峨楓は生きてさえいればいい、他のサーヴァントは始末しろ」

スラッダーの命を受けてアサシン・ヴェルサスが影から這い出ると、モードレッドへと襲いかかる。

「余と舞踏したいのならそれなりに踊れるようになってから出直せぃ」

二本の白と黒のアエストゥス・エストゥスを器用に操り、アサシン・ヴェルサスの死角を利用した攻撃を、まるでダンスでもするように弾く。

ドーン！

まるで神の鉄槌の如く一撃が振り下ろされ、その衝撃波が通りの石畳を盛大に破壊し、周囲の民家まで巻き込むほどのクレーターを生み出す。

そのクレーターの中心にいた筈のモードレッド。

「そんなもんかよ。全然だ。全然心踊らねぇよ」

バーサーカー・ヴェルサスの大剣を二本の指で挟み、瞬間的に手のひらで塚見直したモードレッドは、そのまま奪いとって横薙ぎに払うと柄部分をバーサーカー・ヴェルサスの側頭部へ叩きつける。

バーサーカー・ヴェルサスの巨体を容易に吹き飛ばす力に、流石のスラッダーも一筋の汗を頬に流し始める。

「このオラリオのレベル6を圧倒する力だぞ！　それを容易に越えるとかありえん！」
「随分と勉強熱心だが、だからどうした」
　ズルズルとライダー・ヴェルサスを引きずって屋根づたいに姿を表したのは、狼姿へと変身してベートだった。
「な！　ライダー・ヴェルサスが敗れただと！」

「花鳥風月！　どうぞどうぞ！　アクシズ教をよろしくねみんなぁ！」
　転移魔法の事故により、オラリオの街中に飛ばされた〝魔法だけ〟が優れたアクアは、偶然にも通りかかった先でベートや数々の冒険者に出逢い、片っ端から支援魔法を掛けまくっていた。
　幸運値と知性以外はカンストしてるアークプリーストの支援魔法は、基礎ステータスからしてカズマと比べ物にならない冒険者には効果は絶大で、その結果、一人では苦戦するヴェルサス系サーヴァントも、アクアの支援魔法で強化されたレベル6冒険者複数人の前では形無しであった。
「なんなんだ！　あんな冒険者オラリオにいなかったぞ！」
「くそ、こうなったらこの場を逃げてオブジェクトに支援砲撃を」
「スティール！」

胸元から取り出した筈の端末は、スラッダーの手元からいつの間にか無くなっていた。

このオラリオの街に飛ばされたのは何もアクアだけではなかった。その証拠に、パンツを剥ぎ取るしかいつもは発揮されない奇妙なスキル使いの少年が、得意気な顔で通りに立っていた。

「観念しろスラッダー＝ハニーサックル！　このカズマ様がきゃあああああああ」

決め台詞を決める前に、バーサーカー・ヴェルサスに襲いかかられ絶叫するカズマだが、済んでのところでダクネスがバーサーカー・ヴェルサスの攻撃を受け止めた。

「魔王軍の幹部でもなければ戦闘能力もないと油断したんだろ。まったくこれだからカズマは。・・・・・だか、この巨人、中々やるぞカズマ！」

「はいカズマです」

「この重い一撃は私好みだ！　家に連れ帰っていいだろうか！」

「駄目に決まってんだろ!!」

スラッダーとカズマの双方からダメ出しされ、オラリオの冒険者たちから変な者を見る視線に晒されるダクネスは、一度身震いし、

「・・・・・興奮してないからな」

平常運転の姿を見せるのだった。

「何はともあれ逃げ場もなければ切り札を失ったなスラッダー。どうするのじゃ？」
ネロがアサシン・ヴェルサスに止めを差し、スラッダーの前に迫って見せる。
「逃げ場がない？　それは俺じゃなくお前達のほうさ」
そう告げた時、街の防壁が突如破壊され、巨大な建造物ことオブジェクトがその姿を現したのだった。

第八話　誰が為に鐘を鳴らす

オブジェクトが目と鼻の先に迫った時、ベル＝クラネルは走り出していた。
《大きくなれ　其の力に其の器。数多の財に数多の願い。鐘の音が告げるその時まで、どうか栄華と幻想を　大きくなれ　神を食らいしこの体。神に賜いしこの金光。槌へと至り土へと還り、どうか貴方へ祝福を　大きくなぁれ》
春姫の階位昇華（レベルブースト）による恩恵を受け、向上した敏捷が更に加速させる。
それでもこの早さはあの人の域じゃない。
援軍として駆けつけたアイズ＝ヴァレンシュタインの背中を見つめながら、迫りくる対人レーザーをギリギリで避ける。
ほぼ神業的な回避技術を前に、この対人レーザーを放ってくる操縦者（エリート）の苛立ちを感じるようだった。
「クラネルさん！コイルガンが上空から来ます！」
伝令役として戦場を飛び回っていたのはアスフィ＝アンドロメダであった。
この場にいるものは殆ど知らないが、この事態を引き起こした発端はヘルメスである。無論ヘルメスはスラッダーが何かしら企んでいることは察していたが、まさかここ

までのことを仕出かすとは考えていなかったのである。
　アスフィ後はお願いねテヘペロと言わんばかりに、アスフィを生け贄に差し出してしまったわけである。
（あの主審後でフルボッコにしてやる）
　オブジェクトの主砲の一つが上空を差し、ほぼ真上に向いた瞬間、コイルガンが打ち出され、衛生軌道上から落下して地表へと降ってくる。
　だがこれはクウェンサーも読んでいた。だからこそベル＝クラネルは対人レーザーが未だ降り注ぐ戦場のど真ん中でありながらも、仲間を信じて立ち止まっていた。
　少し前から鐘の音が戦場へと響き渡り始めた時、オブジェクトは電子機器やコンピューターの演算では導き出されない脅威を肌で感じていた。
　ベル＝クラネルを中心に防御陣形が固められる。
《大丈夫。クウェンサー。必ず助けるよ》
　それは認識介入によってねじ曲げられた願いであった。
　そして誰もがそれを知っているだけに、彼女の行動に悲しみを抱く。
　ごーん！　ごーん！

響き渡る鐘のリミットオフを告げる音が、ベルの右手を上空に掲げさせたとき、オブジェクトもまで残りの主砲をベルへと向ける。

《まずい！　直線上に街が！》

ヘイヴィアから預かった通信機に叫ぶアスフィに、障壁を張れる者誰もが息を呑みながら魔法術式を展開した。

縦に重なり幾つもの障壁が主砲の射線上に展開されるとほぼ同時に、下位安定式プラズマ砲の光が大平原を明るく照らし、熱波が大地を溶かし焼き尽くしながら障壁へと激突。

魔法と科学のガチンコ対決は、圧倒的なエネルギー量を誇る下位安定式プラズマ姫砲と、歪んだ方向へとねじ曲げられた少女（エリート）の願いの力が魔法の力を押し潰し始めた。

「くそ！　ミリンダあああああ」

最後の障壁が破られベルもろとも光が飲み込むと思われた時。

「世話が焼けるな」

ベルの前に突如降り立った一人の男が、その手に構えた螺旋状の剣を弓で放つと、

その膨大なエネルギーを相殺しながら直進していく。
だが殺しきれなくなった余波エネルギーが飲み込もうと、男もろともベルを呑み込もうと迫るなか、男は右手を前面に構えた。
「小僧。呆けてる場合じゃないぞ。ロー・アイアス！」
「ファイアボルトーーーーーーー」
前面に展開された七つの障壁がプラズマ砲の残滓を防ぐなか、上空から迫るコイルガンをファイアボルトが迎撃に出る。
一人の人間の悪意によって想いをねじ曲げられた少女の願いを、ベルは真正面から受け止め、それを見事に打ち砕いてみせた。

上空で飛散するコイルガンの残骸の雨を避けながら、冒険者達はオブジェクトの障壁を破壊するために再び走り出す。
一人の騎士（ナイト）が迎えに行くための道へと繋げる為に。
そんな冒険者達を、今度はゴリ押しで突破しようとオブジェクトが動き出そうとした時、
《掛けまくも畏きいかなるものを打ち破る我が武神（かみ）よ、尊き天よりの導きよ。卑小のこの身に巍然たる御身の神力を　救え浄化の光、破邪の刃　払え平定の太刀、征伐

の霊剣（れいおう）　今ここに、我が命（な）において招来する　天より降り、地を統べよ　神武闘征！》

「フツノミタマ！」

命のフツノミタマが発動し、その巨体を大地へ縫い付ける。

「クウェンサーどのおおおおおおおおお」

少年は走り出す。

「行け相棒！」

相棒に背中を押され、クウェンサーはお姫様がいる巨大な囚われの牢獄へ駆け出す。

《今は遠き森の空。無窮の夜天に鏤む無限の星々　愚かな我が声に応じ、今一度星火の加護を。汝を見捨てし者に光の慈悲を　来れ、さすらう風、流浪の旅人。空を渡り　荒野を駆け、物事よりも疾く走れ。星屑の光を宿し敵を討て》

「剥がれろ邪悪なる壁よ。ルミノスウィンド！」

魔法障壁へ叩き付けられる光の魔法により、障壁の強度が下がり続けるなか、ベルクラネルはヘスティアナイフを構えて走り出す。

ベルに続いてアイズも走り出す。

「強度がまだ保たれている！」

アスフィが悔しそうに顔を歪めるなか、一人の男が不敵な笑みを浮かべた。

「要は一点に亀裂を入れれば良いのだろう。さして難しいことではない。俺にはな」

カラドボルグをつがえた男は、オブジェクトの真正面に放つと、もう一本のフルンディングを放った。

カラドボルグが障壁に着弾した瞬間、カラドボルグの柄へフルンディングの先端がぶつかると、障壁へ一点の穴を空けて大爆発を起こして消滅した。

その隙を見逃すことなくベルとアイズが跳躍する。

「ベル」

空中でアイズが両手を組んで構えると、意図を理解したベルはそれを踏み台に更なる跳躍して、その亀裂へヘスティアナイフを突き立てた。

持ち主の成長と共に成長するナイフは、持ち主の思いを汲み取るようにヒエログリフを発光させ、その真価を発揮した。

盛大に、まるで巨大な強化硝子が砕けるが如く割れていく障壁に、誰もが歓声を上げるなか、クウェンサーはオブジェクトへ目掛けて走り続けた。

「今行くぞミリンダ＝ブランティーニ」
「お連れします！」
アスフィがクウェンサーの手を取り肩を貸すと、オブジェクトのコックピットへ繋がる場所へとやってくる。
「お姫様。聞こえるな！　〝敵の罠だから絶対にコックピットハッチを開けるなよ〟」
「あなたは一体何を！」
驚くアスフィにクウェンサーは口許に人差し指を充てて通信機の返答を待つ。
《うん。わかったよクウェンサー。コックピットハッチを開ければいいんだね》
「これは！」
「これが認識介入だ。あらゆる防御系システムコマンドを攻撃系のベクトルへ変換し、味方の命令を無視させる介入操作なんだ」
コックピットハッチへの扉が開くと、クウェンサーはようやくの対面を果たすために中へと降りていく。
互いに待ちわびた再会であったかもしれない。
ヘイヴィア等の親しい友人すら、クウェンサー達が中の良いことも知っていた。
そして戦場に出れば行動パターンからお姫様がクウェンサーを特別視していること

も、また逆もあることなど、戦術に卓越したものが解析すれば容易に想像がつく。

だからこそ、クウェンサーは見落としていた。

目の前に座していたのが、ミリンダの言葉を繰り返すだけの〝中身のない人形〟で、スラッダーがクウェンサーへ用意した悪意に満ちたプレゼントできるあったことを。

「うわあああああああああ」

『クウェンサー、今助けてあげるね』

『クウェンサー、今助けてあげるね』

『うんクウェンサー。わかった。クウェンサー、何をすればいい?』

まるで壊れたロボットの如く、上の空で呟き、光を失った瞳を天井へ向けるミリンダに。

《どうかな、クウェンサー＝バーボタージュ。俺からのプレゼントは受け取って貰えたかな》

モニターに写し出される悪意ある笑みに、クウェンサーはひたすら血走った目で睨み付ける。

「ミリンダに何をしたあスラッダー!」

《さあ。知りたければ俺を捕まえて見せろ。ここからが本当の〝アマゾンシティ〟の続きだ》

「絶対に殺してやる！」

《その前に自分とお仲間達の心配をしたあ方がいい。そいつはジュリエッタをモデルに造られたＡＩで動かしているが、此方が予め指定した作戦に沿って動いている。君がミリンダ＝ブランティーニと再会したのをきっかけに、作戦が最終段階へ移行する》

突如前進し始め、更には街へ向けて加速するオブジェクト。

足元にいた多くの冒険者達は突然のことに対応できず、プラズマ式推進装置の余波に巻き込まれていった。

「くそ！　止まらないのか！　ぐは！」

オブジェクトは本来エリート向けの設計であり、強化されていない一般人が稼働中のコックピット内にいることは危険であった。

Ｇの負担に押し付けられ動けないクウェンサーは、力を振り絞ってミリンダを抱き締める。

「くそおおおおおおおおおお」

《相棒！　どうなってやがる！　お姫様はどうなってんだよ！》
「ミリンダはスラッダーの奴に廃人にされてた・・・コイツを操作してるのは改良されたジュリエッタモデルのＡＩだ」
《アンジェリナリストでどうにかできねぇのかよ！》
　以前クウェンサーが行った、ＡＩにバグを発生させるための手段であったが、クウェンサーはスラッダーが対策してない訳がないと考えていた。　唯一自爆回避で止める方法はミリンダがＡＩのコマンドをＡＩ以上の早さで上書きする方法しかない。
　スラッダーの言う作戦の最終段階は、オブジェクトを街に突っ込ませ、わざと内部から重要部位に仕掛けた爆弾を起爆させ、わざと行動不能に陥れることだった。
　そうすれば、行動不能に陥ったオブジェクトは、機密保護が働き鹵獲を防ぐための自爆機能が作動する。
　そしてコックピットに閉じ込めたクウェンサーもろとも街の冒険者を抹殺できると言う作戦であった。
　実に用意周到に練られた作戦だけに、クウェンサーは悔しさしか込み上げてこない。
「くそ！　俺はミリンダを助けられないのか！　冒険者みたいな力がどうして俺には」
『大丈夫。必ず助けるよクウェンサー』

「ミリンダ。お願いだ目を覚ましてくれ。こんなところで死ぬなんておかしいじゃないか！」

『大丈夫クウェンサー。私が守ってあげるから』

「ミリンダ！　ミリンダ＝ブランティーニ！」

世界と隔絶され鋼鉄の牢獄にたった二人取り残された中、クウェンサーの叫びが反響する。

《最後まで手を握り続けろクウェンサー。お前は俺と違いまだ間に合う》

モニターに繋がれた回線にノイズ混じりの声が聞こえた時、一羽の輝く白と黒の燕が何処からともなく二人の側へと舞い降りる。

《互いに寄り添い絆を深めた分だけ、どんなに離れても気持ちは無意識下で繋がっている。自分の為ではなく誰かの為に祈り続けろクウェンサー。その想いはお前だけじゃなくお前をの周囲へ光をもたらす。諦めるな。その手を握れ》

聞き覚えのある声が途切れると同時に、燕の放つ光はミリンダとクウェンサーの両

手に宿っていた。
そしてクウェンサーはその手を迷わず握ったとき、
「ク・・・ウェン・・・サー？」
深き眠りについていたお姫様は覚醒した。
「おはようミリンダ。助けにきたよ」

第九話　それぞれの思惑

「くっくっく！　作戦は既に最終段階に達した。さぁどうする嵯峨楓に冒険者ども。俺を殺したところでオブジェクトは止まらないぞ？」
「あん。だからっててめぇをぶっ殺さねぇ理由はねぇ」
　クラレントを構え直し、スラッダーのいる屋根の上へと跳躍するモードレッド。
「ち！　なんてな」
　スラッダーが指を慣らした瞬間、スラッダーの背後から現れる複数の触手群。
「コイツ！　以前の奴より強化されてやがる！」
「奇怪なものを！　悪趣味な奴じゃの！」
　モードレッドの背後に迫った触手を、ネロがアエストゥス・エストゥスで切り払い背中を守るなか、
「く！　コイツ、なんて、くは」
「ダクネスーーーーーーー・・・・？」
　カズマが思わずダクネスの悲劇に叫ぶも、その声は徐々にしりすぼみになっていく。

カズマの様子の変化に、ダクネスの危機的状況に集中しているせいか誰もが気づいていない。
「くそ！　世話がやける！」
ベートが、触手に向けて蹴りを入れ、
「待ってなよクルセイダーちゃん！」
ティオナもウルガで触手を次々と弾いて行く。
「おかまいなく」
このクルセイダーの言葉が仲間を気遣ってのものだと誰もが思い、さらに必死に助けに集まるオラリオの冒険者達。
アクセルの冒険者の大半はダクネスの様子に見飽きて見放すものだが、ここはオラリオ。
「あの冒険者すげーぞ！　自らの危険に巻き込むまいとしていやがる！」
（違います。そんな高尚な考えなんてあのポンコツクルセイダーはもっていません！）
口許を押さえて、頬を涙で濡らすカズマを見た冒険者の一人、ロキファミリアの副団長のリヴェリアがそっと優しく肩を叩く。
「安心しろ。君の仲間は我々が何としてでも救出する」
（この人達の優しさが余計に痛い！）

「本当！　うちの仲間がすみませーーーーーん」

良心の呵責に耐えかねたカズマは、それはもう見事なジャンピング土下座を行っていたのだった。

そしてオラリオの冒険者達の健闘によりダクネスは無事に救出され、再びスラッダーとの戦いは膠着状態に陥る。

「さて、こちらの鬼の手をどうにも出来ないようだな。俺は今度こそ失礼させて貰う」

そう告げてその場から鬼の手に支えられて逃げ出すスラッダーに、援軍として到着したセイバーが追いすがる。

「逃がすものか！」

見えざる剣による攻撃を見えているかのように受け止める鬼の手。

「父上！」

加勢に飛び込むモードレッドに、横目でアイコンタクトをとると、即席ながらも息のあった連携で攻撃を仕掛ける。

そんな二人を前に鬼の手に守られていたスラッダーは、困った様子を浮かべながらも、未だ余裕を崩すことなく笑い続ける。

「いいねぇ。肉体は別でも魂は親子として繋がっているか。だが兵器にはそんなもの必要ないだろ」

「まだ言うかよ！」
「言うさ。だから貴様達の弱点をこの天才様がご教授してやろう」
　スラッダーはそう告げ指を慣らした瞬間、予め仕掛けられていたアルトリアの側の爆弾を起爆させた。
　サーヴァントを殺傷するに至らないまでも、指向性の威力はサーヴァントの隙を造るに十分であった。
　その証拠にアルトリアの体に触手が絡み付くと、あっという間に飲み込んでしまう。
「ちちうえええええ！」
「悲観するのはまだだぞモードレッド。お楽しみはこれからだ」
　漆黒の紫電を纏いながら、アルトリアを呑み込んだ鬼の手はアルトリアの霊装の如く変化し、その頭部を鬼の面で覆い尽くす。
「セイバー・ヴェルサスの完成だ。やれ」
「父上！　待てよ！　俺だ！　モードレッドだ！」
「・・・・・・・・」
　突如襲いかかってく鬼面のアルトリアに対して必死に呼び掛けるモードレッド。
「そう！　それこそが弱点だ。兵器のくせに人間の真似事をするという。それ故にいざ操られたら手も足も出なくなる」

「てめえええええ」

元凶であるスラッダーを追うにも、アルトリアによって阻まれ、どんどんその姿は遠ざかっていく。

他の者達はその場に残された鬼の手の群衆が、一般市民を襲い始めるのを止めるのに手がかかり、スラッダーへ迎えないでいた。

そうしてスラッダーを完全に取り逃がしてしまったところで、オブジェクトもいよいよ動きを見せ始めた時だった。

「まだだ。まだ終わらない。そうだろクウェンサー」

通信機もないのに、オブジェクトへ向けてそう呟く楓に、ネロが横に立ち並ぶ。

「奏者よ。もはやスラッダーは取り逃がした。鬼の手の討伐に人を割かれ、あのデカブツを止める手立てはないぞ?」

「いざというときに備える。ネロ、お前の固有結界を使う」

「その場合、余と奏者は無事では済まぬぞ?」

そう忠告するネロであったが、楓の瞳を見たとき、小さく首を横に降った。

「そうじゃったな。奏者はそういう人間じゃったのう」

「・・・・・だが、そうならない。信じるさ」

「あの少年をか?」

楓はそっとオブジェクトに背中を向けて歩き出す。
自爆機能が作動
「クウェンサーとお姫様。そしてそれを信じる仲間達をさ」

そして時は訪れる。この夜の闇に包まれた戦いに終止符を打つかのように、いや、打たれた終止符を受け入れるかのような、朝日が街を照らし出した瞬間、オブジェクトから聞こえた声。

《ヤッホー。オブジェクトの操縦機能を取り戻したよー》
《ヒャッハーーーーーー！　姫様は取り戻したぜえ！　待たせてな皆！》
「ち！　浮かれやがって」
「ナイト君頑張ったみたいだねぇ」
「ったく。ここまで私達が協力したんだから当たり前じゃない」
まんざらでもない顔を浮かべるベートの側で、ティオナとティオネも嬉しそうに笑みを浮かべ、リヴェリアが駆けつけたフィンのアイコンタクトを受け頷くと、周囲を見渡して号令をかける。
「全員武器を構え！　鬼の手を殲滅せよ！」

「「「おおおおおおおおお!!!!!」」」

※

冒険者達が最後の追い込みでようやく鬼の手を殲滅したのは、日の出から三時間ほどたった頃だった。

もっとも最後の一時間あたりは町中をくまなく探し回る確認作業で、中心となったロキファミリアの団長のフィンが、殲滅完了の号令が終了時刻となった次第である。

夜半から朝方までのこの戦いは多くの冒険者を疲弊させたが、それ以上に派閥と言う垣根を越えた連帯感が、冒険者同士の笑い会う光景へと繋がっていた。

そして街の外の防衛に回っていた者や、〝お姫様〟と〝ナイト〟の凱旋がこの悲劇を僅かに明るいものに変えていた。

だからこそ光もあれば闇もある。

街の中へと運び込まれる布が掛けられた担架は、この日の悲劇を物語っていた。

わかりきっていたことだった。あの巨体オブジェクトを足止めするということは、それなりに過酷で命の危険が多大にあることを。

泣き崩れる者達の中には幼い子供もおり、それを目撃したクウェンサーは顔をうつ

向かせる。
「胸を張れよナイト。お前は救ったんだ
「ああ。でもこの作戦を考えたのは俺でもある。責任は感じるよ」
　通りを歩く凱旋組を眺めながら、楓は傍らに立つモードレッドに視線を向けた。
「助けられなかったな」
「あぁ。逃げられちまったが、必ず父上を助け出す」
　拳を打ち鳴らすモードレッドは、悔しそうな態度から一変し既に気分を切り替えていた。ヴェルサス化したアルトリアがタイミングを見計らい、モードレッドの戦いから撤退した際、楓はモードレッドが追っていこうとしたのを無理に止めた。
　本当であれば追いたかったであろう気持ちが理解できるだけに、楓は小さく呟く。
「すまない」
「謝んな。お前は俺の相棒（マスター）だろ。もしあのまま追撃したら、もしかしたら罠にはまって俺も父上のようになっていたかも知れねぇ。お前は俺の身を案じてくれたんだ。感謝すれど文句なんかあるわけねぇ」
　そう言って楓の肩を軽く小突いたモードレッドは、清々しさの混じる笑みを浮かべる。
「ちょっくら酒を呑んでくるぜ」

「余もいこうかの！　あの店のワインは美味じゃ」

あれだけ戦った後にも関わらず、元気な二人を見た楓は自然と笑みがこぼれるのだった。

最も、この後に待ち受ける悲劇について、二人は知るよしもない。

※

スラッダー＝ハニーサックルが仕掛けた戦いにより、街は結構な破壊に見舞われたものの、こう言った破壊に関しては慣れているのか、あちこちでは手慣れたように復旧工事が行われていた。

「ゴブリンか？」

「俺がガネーシャだ！」

どこかで見たようなやりとりを前に、うんざりしたような顔を浮かべるヘイヴィアと、これまた土木工事なんてやったこともなく、力仕事でヘトヘトになるクウェンサーは、オラリオの街の入り口で外壁工事を行っていた。

なぜゴブリンスレイヤーがここにいるかと言えば、彼自ら進んで名乗り出たからに他ならないのだが、その理由が、

『ゴブリン対策の一環だ』

という、実に彼らしいものであったことは言うまでもない。
「はぁ。何で俺達まで駆り出されるかねぇ」
「人手が足りないんだとさ」
　これまた外壁工事に手慣れた様子のカズマが、意思運びに精を出しながらヘイヴィアに説明するも、それ以上に違和感ある光景に口を出さずにはいられなかった。
「それにしてもお前のところの自称女神様は芸達者すぎやしませんかねぇ！　なんなのあのモルタル塗りの手際のよさ！　いっそ冒険者やめて土木工事で食って行けるだろ！」
「そうなんだよ。どういうわけか、アイツはこの手に関しては器用さを発揮するんだよな」
　アクセルの町から惨状を聞き付けた職人連中と共に、仲良く汗を流し、時には手伝いに来た男達にテキパキと指示を出すアクア。
　最早アークプリーストの面影は見る影もない。
「ところでミリンダさんは？　さっきまでオブジェクトのサブアームで手伝ってくれてたみたいだけど」
　カズマは額に手を充てて周囲を探ると、クウェンサーが肩を竦めて見せた。

「我らの癒しであるお姫様は、豊穣の女主人の猫耳さん達につれてかれたよ。理由は聞いてないけど」
「あっちこっち大変なんだな。って！　あの人まで何やってんの!?」
意外な人物が防壁工事の手伝いをしていることに驚くヘイヴィア。
その視線の先では、先の戦いで活躍したアーチャーが、手際よく作業を行っていた。
「人は見かけによらないと言うけどね」
「よらなすぎだろ」
こうして防壁補修工事は、アクアの神業とアーチャーのトレースにより、予想外のスピードで進んで行くこととなる。

※

「何で余が・・・・・」
「くそ！　こんなの動きづらいだろうが！」
「クウェンサー喜んでくれるかな」
「くうううう。何でこの私がウェイトレスなんてぇ」
「くううううう。なんたる羞恥プレイ・・・・」

「何だかワクワクしてきますね！」

豊穣の女主人へと連行され、ウェイトレスの格好に着替えさせられた面々。

主な理由として、ネロとモードレッドは、店の側で暴れまくり外壁を壊し、民家を破壊しまくった弁償の補てんが理由。

ミリンダに関しては今回の一件はお咎め無しにされているが、人手が足りないという理由と、滞在中はミア母さんが面倒見てやるという半ば強制的な申し出から。

さしてダクネスとめぐみんに関しては、アクセルの町で追った借金返済の為に、ミア母さんに差し出された生け贄である。

「さあお前達！　チャキチャキ働いて貰うよ！」

この街の母と評される皆のママは、容赦なく少女達へ命令すると、自分も店の仕込みへと入る。

こうして新しく入った新人ウェイトレス達は、先輩の指導のもと、店の開店準備に追われることとなった。

モードレッドやネロが豊穣の女主人で働いている頃、楓はというと。

「へいらっしゃい！　ウィズ魔道具店オラリオ支店へようこそ！」
「ようこそ」
　アクセルの町からわざわざ出向いたバニルに取っ捕まり、どういうわけか店を手伝わされていた。
「なんで俺が」
「良いではないかふはははは！　どういうわけかうちのポンコツ店主は使えないものを仕入れることに関してはスバ抜けた才能を発揮してな！　我が仕入れを行っている間に見張りがどうしても必要なのだ。その店貴様は打ってつけ！　さあ気張って売るが良いわ。故郷を失い変える場所もないが仲間には恵まれた哀れなバイトよ！」
「ちなみにこれ、何を売ってるんだ？」
　店の前で店頭販売している中、楓は商品の一部を摘まんでみる。
「よくぞ聞いてくれた！　それはポンコツ店主が仕入れた旅の灯り事情を解決する優れもののパート2！メリットは内蔵魔力の循環によって灯りを永遠に灯してくれるもの！」
「・・・・・デメリットは？」
「一作目と同じで徐々に高熱を発して火傷するのと最終的に爆発するのは一緒だが、爆発の有効射程が広がったことか」

「悪意しか感じねえだろ！」
　思わず楓は木箱にそれらを戻していく。
「ふむ。アクセルの町での売れ残りでな。そこで貴様には言葉巧みに売り飛ばして貰いたいのよ。なあに、ヴァリスでもエリスでもどっちでもかまわん。チャキチャキ売るがよい！」
　そんな悪徳店員の足元に転がる黒焦げの女性を眺めながら、楓はそっと息をはいた。
（この店駄目だ・・・・）

※

　オラリオの街から南東へと向かった先の小さな森。
　鬱蒼と生い茂るその場所に、一人の猪獣人を従えた人物が足を運んでいた。
「わざわざ貴女がこの場所に足を運ぶなんてな」
「意外？」
「いいえ」
　森の中でも切り開かれた場所の中で、横倒しになっている巨木に背中を預けていた

スラッダーは、ローブを羽織り顔を隠した人物に視線を向けることなく話を続けた。
「ご依頼通りにベル＝クラネルとクウェンサー＝バーボタージュを共闘させてみたが、ご期待にそえましたかね」
「上場よ。で、貴方はこれからどうするのかしら？」
「このまま南下して次の準備に移りますよ。何せかなり消耗してしまった」
鬼の手を周囲に彷徨かせるスラッダーに、フードの人物は猪獣人にアイコンタクトを送る。
すると猪獣人は持っていた大きな革袋をスラッダーに投げ渡した。
「報酬よ」
「これはこれは。それではご用命の際には街に潜ませた草にでも言いつけてください」
そう告げて森の中へと消えていくスラッダーの背中を見送り、猪獣人は主へと尋ねる。
「宜しいのですか？」
「いいのよ。あの男はまだ使える。あの子にはまだまだ強くなって貰わなくてはいけないし、オラリオの街もこれでわかったはずよ。この世界に危機が迫っていることに。それには強い敵が必要。少なくともあの男はまだ使える。それに今から帰ってヘルメスにお仕置きしなきゃいけないもの」

くるりと踵を返すフレイアは、
「もっとも、目移りしそうな魂の輝きを持つ子供を見つけちゃった。あの子私のファミリアに入れたいわ」
「・・・・・お戯れを」
「私はいつだって本気よオッタル。嵯峨楓。あの子の輝きはまだまだ弱いけど、ベル＝クラネルとは違う美しさがあるわ。さあて忙しくなるわよ」
上機嫌に森の中を歩く主人について歩きながら、オッタルは気ままな主のせいで頭を悩ませるのだった。

第一章　幕間

先の戦いにて若干街の雰囲気が変わったものの、それは別な場所でも見られていた。
「ラストオーダーちゃん、お菓子食べる？」
「ラストオーダーちゃん、新しいお洋服用意したわよ」
ロキファミリアの屋敷の中、一人の少女を中心に和やかな空気が広がっていた。
「ぐへへへ。ラストオーダーちゃん、うちと一緒にお風呂に入らへいだだだだだだ」
下心全開でラストオーダーに迫る主神ロキを、力業でねじ伏せるアイズ。
ラストオーダーがこの屋敷に来てからアイズに増えた新しい日課であった。
「ミサカはミサカはお子様ではなく一人前のレディですと、大人っぽく主張してみたり！　でも可愛いお洋服とお菓子は欲しいかなと呟いてみたり」
「「可愛いいいいいいいいい!!」」
最早ロキファミリアのマスコット的存在となったラストオーダーは、このように皆に愛されているのだが。
「ち。うっせー。少しは静かにしろってんだ」
ただ一人ベートだけはラストオーダーを特別扱いすることもなく、距離を置くよう

に接していた。
のだが。
　ベートが寝室から出てくると、決まってラストオーダーはベートにべっとりとなってしまうからして、女性陣が皆ベートに対して嫉妬の視線をぶつけてくる。
　それはアイズも同じであった。
「ベート、どうやってこの子を懐柔したの？」
　無表情に迫るアイズの気迫に、普段アイズを口説いていたベートもたじたじになる。
「ふざけんな！　俺は何もしてねぇし、このガキが勝手にくっついて来るんだよ！」
「照れなくてもいいのにと、ちょっと小突いてみたりとミサカはミサカは仲良しアピールしてみたり」
「ベート」
「ああくそ！」
　小難しい言い訳も説明も苦手なベートは、その場からラストオーダーを連れて逃げるように屋敷を出たのだった。

※

「改めて明るい時に歩いてみると、素敵な街だねと、ミサカはミサカは心踊らせてみたり！」

「ああん？　どこがだよ。子供が喜ぶようなもんは何処にもねぇよ」

「子供扱いしないで欲しいなあと、ミサカはミサカはおとなぶってみたり！　でもミサカがいないと〝あの人〟は心配するだろうなぁってミサカはミサカはしょぼんとなってみたり」

何かを思いだし、どこか寂しそうにするラストオーダーに、ベートは面倒くさそうにため息をつく。

「ガキがいっぱしに大人の心配なんかすんじゃねえ。弱者ってのは弱者だ。強者になれねぇ。子供がいきなり大人になれるかよ。子供は子供らしくしてればいいんだよ」

「もしかしてミサカのことを慰めてくれてるのって、ミサカはミサカは心ときめかせて感動してみたり！」

「あぁ？　なんで俺がお前を心配しなきゃならねぇんだよ」

そう言ってそっぽ向いたとき、

ぐ～～～～～っ

ラストオーダーの腹から可愛らしい音が響き渡る。

「ミサカは何も食べないで出てきたわけだけど、お肉食べたいだなんて贅沢いわないよ？ってミサカはミサカはちょっと遠回しにアピールしてみたり！」

「ち！」

これまた愛想の無い返事ながらも、ベートはラストオーダーに歩くスピードを合わせ、この辺りで昼間からやっている店へと向かうのだった。

「いらっしゃいませにゃ・・・・ベートがとうとう子供を誘拐したにゃ」

「いら・・・・・本当にゃあ！」

ベートがラストオーダーを連れてきたことで、ちょっとした騒ぎになったものの、ミア母さんの一喝で静まりかえるという、いつもながらの豊穣の女主人。

「つうか、この店は趣味変えたのか？　店も心なしか広くなってるじゃねえか」

入り口側の壁が取っ払われ風通しが良くなったところに、照らす席が設けられていることに、元凶の二人がそっと顔を背ける。

「で、あんたのことだ。そこの可愛らしい嬢ちゃんに飯を食わせに来たんだろ。勝手に作っちまうけどいいね？」

「どうせ勝手につくんだろうが。好きにしろよ。あと、ラストオーダー。このハバアは怒らせるとこえぇから怒らせんなよ」
「あんた早速私を怒らせたいのかい？」
「・・・・・何でもねぇ」
夜に向けた店の準備が行われているなか、特別に食事を用意して貰ったラストオーダーは、ご機嫌な様子でミアの用意した食事を平らげると、眠くなったのかそのままテーブルに突っ伏して眠ってしまう。
「ったく。どこでもお構い無く寝やがって」
心底面倒そうにしながらも、ベートは会計を済ませて立ち上がった。
「この子を置いてくのかい？」
「あん？　ちょっくら調べものがあんだよ。少し出てくる」
そう告げたベートに対し、ミアは呆れたようにリューへ告げる。
「空いてる部屋のベッドに寝かせてやりな」
「わかりました」
もうじきで夕方にでもなるかという頃、オラリオの街の闘技場付近を歩いていたベートは、一人の情報屋と会っていた。
「子供の情報ねぇ。あんたが欲しがってるような情報に繋がるかどうかは」

「いいから教えろ。些細なことでもいい」
　いつになく真剣な顔のベートに、情報屋の男は自信なさげな顔を浮かべながらポツリポツリと話し始める。
「ここ一ヶ月前からだ。オラリオの街の外で異変が確認されたのは。交易に訪れる連中が極端に減ってんだが、そのうちの幾つかの行商人が言うのさ。地形が変化してるとか、見たこともない建物をみたが、蜃気楼のように消えたとか。そんでその目撃情報が出始めた頃から、外の世界から来たという連中と出会ったって話もちらほら聞こえるようになったんだ」

　ここ最近ベートの周囲でもそれらしい人物はベート自信も見かけていた。加護無しでダンジョンに挑んで難なく生きて帰ってきた連中。
　スラッダー＝ハニーサックルの存在や、そいつが話していた内容から情報屋の言っている情報に信憑性はあった。
　だが、ベートの欲しかった情報はラストオーダーが現れた最初の地点に関する情報である。
　そこに彼女の元の世界に繋がる何かがある筈。
「やっぱりスラッダーの野郎を捕まえるしかねえのか」

出会った時からラストオーダーについて知っていて、彼女を手に入れようとしていた。

ならばその驚異を排除するついでにもなるというもの。

「礼だ」

情報屋は過剰とも思える礼金に驚きつつも、受けとるとそそくさとその場から走り去っていく。

「だが今のままじゃ、駄目だ」

ベートは今一度スラッダーの従える存在との戦いを思いだし、今の自分ではスラッダーを捕らえるどころか、鬼の手やヴェルサスと言った存在に負けると自覚していた。

確かに仲間と共に挑めば勝てる相手であるが、スラッダーは恐らく更に強化してくることは間違いないとベートは確信している。

「さて。どうすっか」

普段考えることが苦手なベートは、頭を悩ませながらもときた道を戻るのだった。

※

ベートがラストオーダーを迎えに豊穣の女主人へやって来ると、ラストオーダーは

ブカブカのウェイトレス制服に身を包み、愛くるしい笑顔を振り撒いて客から次々と注文を取っていた。

　その光景に一体何が起こっているのか、ベート自身困惑するのだが、戻ってきたベートにミアが笑って説明する。

「実にいい子を拾ってきたじゃないかベート。お客に大人気過ぎて注文に厨房が追い付かないくらいだ。それに比べ他は」

「なにおー！　頭がおかしいとはなんだ！　今この場で私が頭がおかしいことを証明して欲しいならその喧嘩買いますよ！　黒より黒くいだい！」

　まさしくミア母さんの拳骨で黙らされ店の奥に引きずり込まれるめぐみんに、

「お前はそれでも客か！　もっと下卑た視線を向け、卑猥な注文の仕方があるだろ！　冒険者の矜持を見せてみろ！　むしろやって見せろ！」

　多くの男冒険者をドン引きさせるダクネス。

「あん？　お前ら肉が足りてねぇんだよ肉食え肉」

　オラオラ営業するモードレッド。

「余のお勧めはこのサラダじゃな。もっとも魚も良いがこの料理の良いところは彼の」

　説明がやたらと回りくどくなったらしいネロ。

「すみませんすみません！」

皿を割ったり注文を間違える凛という、中々に濃い面子が揃っている。

その中でラストオーダーは、

「あまり飲み過ぎたら駄目だよ？　ってミサカは奥さま風に心配してみたりして。でもお給金がないとミサカは今日もスープ一口の味しか幸せ噛み締められなかったりと哀願してみたり」

「「「可愛いいいいいいいいい!!!」」」

そんな荒くれ冒険者の癒しポジションに収まっていたラストオーダーを見て、ベートは嘆息するとカウンターに座った。

「あ！　お帰りと新妻風に色仕掛けで出迎えてみたりとミサカは上目遣いにみてみたり」

「馬鹿が。・・・・・・・いつもの酒だ」

「いつものお酒かしこまり〜ってミサカはミサカは笑顔で承ったたり」

そんなラストオーダーの楽しげな姿を横目でみたベート。

（ま、焦ることはねぇか）

もう少し彼女が、この街の住人と楽しく過ごす時間に、柄にもなく思いを馳せるのだった。

※

「え？　装備品や道具を買いそろえて起きたいって？」
「ああ。生憎この街について俺は詳しくない。知っているところがあるなら紹介してほしい」
　防壁補修工事が佳境に近づき、ゴブリンスレイヤーはこの街の職人に冒険者御用達の店を尋ねていた。
「うーん。となると、装備品に関してはゴブニュファミリアか、ヘファイストスかぁ。だが、どっちも値が張るもんばっかだ。まぁヘスティアファミリアにも腕のいい鍛冶士はいる。尋ねて見るのもいいんじゃないか？」
「わかった」
　職人の情報を頼りに街の仲を歩き回っていると、言われた場所にヘスティアファミリアのホームは存在していた。
「でかいな」
　そんな簡単な感想を口にしながら、呼び鈴を鳴らすと狐獣人の少女をがメイド服姿で出迎える。

「いらっしゃいませ。えーと、どなたかとお約束でも？」
「約束はない。人伝にここに腕のいい鍛冶士がいると来て尋ねた。もし約束が必要なら日を改める」
「ヴェルフさんですね。そう言えばこの間の戦いに参加されてましたよね」
「ああ」
　小さく首を縦に振るなか、春姫がゴブリンスレイヤーを中に通して応接間に案内する。
「ただいまヴェルフ様をお呼びするのでお待ちくださいね」
　そう告げて春姫が姿を消してから、暫くしてヴェルフがやって来る。
「待たせたな。俺に仕事を依頼したいって？　悪いが魔剣は打たないぞ」
「そんなものはいらん。ゴブリンに奪われでもしてら厄介だからな。俺が頼みたいのは装備の修繕と予備の製造だ。金ならある」
　そう言って今装備しているものと同等の型の装備品を袋から出して見せた。
「大分使い込まれている。てかすげーよアンタ。これまでずっと同じ装備で戦い続けてんだろ。これは年季が入ってる。何だか心が踊るぜ」
「やれるか？」
「誰にきいてんだよ。むしろやらせてくれ。最高のものに仕上げる！」

「頼む」
　そんなゴブリンスレイヤーの様子をいたく気に入ったヴェルフは、思わず尋ねていた。
「でも、こんな装備じゃ深層は大変だぞ。こういう装備でやりあえるのはゴブリンクラスじゃないか」
「俺はゴブリンスレイヤーだ。深層とやらが何か知らんがそこにゴブリンがいるなら俺は行く」
「そ、そうか」
　返す言葉が出なかったヴェルフであった。
　そして装備の修理とオーダーメイドを頼んだ次に向かったのは、オラリオの道具店だった。

「へいらっしゃい。そこの小鬼の尻ばかり追いかけてる実に執念深き男よ。道具の入り用なのだろう？　是非見ていくが良い」
　バニルに取っ捕まったゴブリンスレイヤーを見て、本日もしぶしぶバイトに出てきていた楓は、二人のやりとりを黙って見ていることにした。
「これはなんだ？」

「お目が高いな客人。それはうちのポンコツ店主が仕入れた珍しい逸品でな。魔力エネルギーを循環させて点灯するカンテラだ。半永久的に点灯するがデメリットは、放熱機構がイカれていてな。徐々に熱くなって持てなくなるのと、最後に爆発する自爆機能付きだ」

「買おう」

「即答かよ。本当にかうのか？」

「無論だ。爆発の威力と有効射程を聞いておきたい」

真剣に尋ねるゴブリンスレイヤーを前に、楓は一応確認した。

「こんなもの買って一体何に使うんだ？」

「無論決まっている。ゴブリン退治だ」

「そんな客人にはもうひとつ素晴らしい商品をお店しよう！」

「是非見せて貰おう」

楓はこの時悟った。この世界に危機が訪れてはいるが、それはこの世界のゴブリンにとっても同じなのだと。

通常は売り物になら無い凶悪な魔道具も、ゴブリンスレイヤーかかれば立派なゴブリン殺しの道具になる。

いわばこの二人はゴブリンにとって出会わせてはいけない存在なのだと。

「故郷なきバイト少年よ。我輩は人間の悪感情が好物である。故に人間に害しかないゴブリンが滅んでくれた方が好都合なのである」

　楓の心を見透かしたように答えたバニルに、ゴブリンスレイヤーは一枚の仮面を手に取った。

「それは我輩の仮面を模造したものでな。それをつけると滋養強壮にきき気分が高揚する効果が得られる優れもの。お一つサービスしてしんぜよう」

「貰おう」

　余談だが、バニルの仮面を被った謎の冒険者が、

「ふはははははは！　絶好調！　絶好調過ぎるぞ！」

　と、高笑いを浮かべゴブリンを虐殺して回っている目撃情報があったとか。

　その正体は未だ謎であるが、唯一一人だけ知っていたのは楓だけである。

※

「何だか窮屈な思いをさせてごめんね姫様」

「ううん。クウェンサーが謝ることじゃないよ。クウェンサーは私のことを助けてくれたんたよ？」

　スラッダーによるオブジェクトでの襲撃事件。一応ミリンダ＝ブランティーニは

お咎め無しとされたが、スラッダーの細工を警戒し、ギルドは彼女を幽閉する方向で動いていた。

しかし神々の会議デナトゥスで、彼女の幽閉に反対したのはヘスティア筆頭に、タケミカズチ、ミアハ、ヘファイストス、フレイア、ヘルメス達。

過半数に満たないまでも、先頃活躍が目覚ましいファミリアとそれに、フレイアとヘルメスが反対したことで、妥協点で豊穣の女主人で預かるという形で落ち着いたのだ。

本来であれば自由の身になれたのに、戦いが終わって助け出されてから幽閉では、功労者のクウェンサーも納得いかないだろうし、それに付随して嵯峨楓が仮に反乱に手を貸した場合、オラリオは間違いなく打撃を受ける。

もっとも豊穣の女主人に預けておいた方がミリンダにとっても安全であることは、クウェンサーも知っていたので、後になって報告を受けても揉めることはなかった。

「へいお待ち」

「って、アンタ今度はここで働いてるのかよ」

「悲しいかな。我が主が皿を割りすぎてクビなり、俺が皿の弁償ついでに生活費を稼いでいる。もっとも都合がいいことであるのは否定せん」

普段の霊装と違い、凛によって用意された白のワイシャツと黒のズボンとサロン姿は、オラリオの婦女子達に大人気で、豊穣の女主人は昼間からアーチャー目当ての女性

の客で盛り上がっていた。
「都合がいいって監視のことか？」
　若干険のある言葉で返すクウェンサーだが、アーチャーは苦笑で返す。
「護衛と言って欲しいな。ミリンダ＝ブランティーニとラストオーダー。彼女達二人を狙ってスラッダーの刺客が来るだろう。幸いここにはガサツだが腕の立つセイバーと、サボりぐせがあるが腕の立つセイバーがいる。マスターが苦労する姿が目に浮かぶようだ」
「なんだとこら」「なんじゃと！」
　モードレッドとネロが揃って抗議の声を上げるも、アーチャーはこれを無視。
「何にしても貴様は自分がすべきことに集中しろ。貴様は彼女のナイトなのだろう？　クウェンサー＝バーボタージュ」
　アーチャーの喝ともとれる言葉に若干不貞腐れながらも、店を出るときには、
「クウェンサー、頑張って！」
　いつぞやと同じく、小さな声でクウェンサーにこっそりエールエールを送るミリンダのお陰で、くさくさした気分はどこかへと消えていたのだった。

第二章　迷宮編

第十話　新たな動きと、ときどき大騒動

歪に歪んでしまった世界。

どんなに歪に歪んでしまっても、世界はどうにか存続しているのだから、それが神の力かはたまたこの星の生命力なのかは兎も角として、スラッダー＝ハニーサックルにはそれはそれで興味深いことではあった。

もっともオブジェクト設計士である彼の、オブジェクト設計とオブジェクトを生身で倒す存在以上には興味はわかなかったのだが。

世界が存続しなければスラッダーの野望は叶うこともない。

それはそれで彼にとって非常に困る事態だった。それ故にヘルメスの不確かな〝希望となる英雄の到来〟や、フレイアの〝希望の光の成長〟などというこれまた不確かなものにすがるほど、綿密な計算や公式の存在しないものに頼ることなど、到底考えられないことだった。

自分は自分の道をゆく。

かつて一人の派遣留学生が自分とは違う形で、オブジェクトによるクリーンな戦争の

在り方をひっくり返したように。
「つまり、俺と君は似た者同士というわけだ。学園都市第一位」
「あん？　てめぇと一緒にするんじゃねえよ。俺は俺で俺なりの悪党の美学を持ってる。てめぇのそれと一緒にするんじゃねえ」
　色素が抜けた髪と肌を持つ少年は、薄暗い部屋の中で円卓の前に座り苛立ちの顔を浮かべると、その背後では半透明の存在がニヤニヤとした笑みを浮かべていた。

　クリファパズル５４５。
　その半透明はそのような名を持つ悪魔だ。もっとも少年に付き従うまでは別の悪魔によって産み出された存在だが、そのような〝些末な過去〟はこの場の者達にとってどうでも良いこと。

「成る程。契約上君と俺は対等だ。俺が持てる知識と技術で協力はしよう。それと」
　少年――――アクセラレーターの側に一人の女騎士が歩み寄る。
　ヴェルサスと呼ばれる擬似鬼の力によって洗脳された〝筈〟のアルトリア。
「彼女と契約を結べば彼女は君のサーヴァントとして力を貸すだろう。もっともそうしなければ、彼女は霊的力を食うこともしないために存在はもうじき消えるだろう」

サーヴァントの性質を知り尽くしたスラッダー。
ヴェルサスという力があれば彼女の存在は維持できたが、研究途上であるヴェルサスの力を未だ完全に把握しているわけではない。
それ故にここに来るまでの道中でヴェルサスの力に抵抗してみせたアルトリアはに対し、スラッダーはヴェルサスを解除し、彼女に取引を持ちかけた。
決まったマスターのいない彼女にマスターを与え、聖杯戦争への参加資格を与えること。
かつて衛宮士郎との契約時に見せた真っ直ぐで高潔な精神の彼女であったが、その性格の依り処がない今、優先すべきは聖杯戦争に参加し生き残ることであった。
「魔力何てものは俺にはねぇぞ
「ベクトル操作。それを利用すれば存在する魔力を集めることはできるさ。その貯蔵カートリッジはこれだ」
そう言ってスラッダーは拳銃型の注入器と、マガジン式カートリッジをアクセラレーターに投げ渡す。
「用意周到じゃねぇか。気に食わねぇが利用できるもんは利用してやる。ただし」
突如アクセラレーターの目の前のテーブルがスラッダー目掛けて吹き飛んで行くも、それはスラッダーにぶつかることなく目の前で粉々にくだけ散った。

舌打ちをするアクセラレーターは、静かに立ち上がり背中を向けた。
「〝あのガキ〟に今度変な真似をしてみろ。俺がお前を殺す」
「これは怖いなぁ。ほんの実験さ。二度としないから安心したまえ。ただし君が協力的であるうちはだ。わかって頂けていると思うが、オラリオの町には草を仕込ませている。君と似たお人好しが側にいて守っているみたいだが、下手なことを考えない方が安全性は高いと思うがね」
「何が対等だ笑わせてくれるぜ。人質とっておいて対等なんて抜かしてんじゃねえ」
「対等さ。何せこっちは自分の命を獰猛な奴の前にさらしているんだからな。その気になったら殺せるだろう？　その代わりに道連れを用意してるだけの話だからねぇ」
スラッダーの言葉に耳を傾けることなくアクセラレーターはアルトリアを連れ、薄暗い部屋を出ていくのだった。
「それで今度は誰をオラリオの町に派遣するのさ？」
先程まで存在すら感じさせなかった人物が、待ち遠しそうな様子で円卓の椅子に座っていて。

「嵯峨楓を殺すなら〝同郷の者〟がいいだろ」
スラッダーが目を向けたのは、燃えるような深紅の髪の、左頬まで覆った漆黒の眼帯の女性だった。
「フランチェスカ＝ヴェルズ。君の出番だ」
「ふん」

※

鬼が封印されし地とされる岩手。それが嵯峨楓の故郷だった。
嵯峨家は古くからこの地を守護する家柄として有名で、嵯峨飛燕流装武術と呼ばれる様々な武器を扱う古流武術を開き、さらには世界屈指の金持ちである嵯峨財閥の家としたも有名であった。
その実家が所有する神社の境内を掃除するのが楓の朝の日課だった。
ある日のこと、いつもの日課をこなしていると、西洋のドレスにも似た装束を羽織り、白銀のプレートと籠手を装着する奇妙な出で立ちの少女と出会う。
「ふむ。実に良き神聖な場所じゃの。余の城として使用するのも吝かでない。そこの

者。どうじや？　余と契約せぬか？」

突然の来訪と、意味不明な言葉を口にする少女に対し、楓は半ば可愛そうなものを見る目を浮かべ、朝食として持参したお握りを彼女の手に持たせた。

「コスプレ日本旅もいいが、ちゃんとパンツは穿いた方がいい」

少女の衣装の際どさを率直に指摘して、再び何事も無かったように掃除を始める楓。

「それが余と奏者の初めての出会いじゃ」

豊穣の女主人の昼間の部の開店前の朝、一仕事終えたネロはアーチャーが入れてくれたコーヒーを口にしながら、モードレッドに楓との出会いを話していた。

「あん？　お前痴女だったのか」

「違うわ！」

一日の始まりは決まって平凡で他愛ないもので、二体のサーヴァントが早朝のティータイムに談笑している頃、主は今では日課となるアルバイトに顔を出していた。

かつてとある世界が聖杯戦争で滅び、封印されていた鬼が平行世界へとその魂を分散させた。
その結果、魂が強力な力で互いを引き寄せあい今に至っている。
その鬼の魂の核を有する嵯峨楓は、滅んだ世界から偶然にも別世界に飛ばされていた。
実に様々な世界を渡り歩いた。
およそ十代半ばの年齢で止まってしまった肉体で、肉体以上の年月を経験してきたが、その大半は孤独だった。
時に寂しかったかもしれない。だがそんな感情はとっくに忘れていた。
だが疲れだけは今も感じている。ふと気を抜けば、今すぐにでもこの旅路を終わらせたいとさえ思う。
だが終われない。悪意によって世界が再び破壊されようとしている。
それを止めるために、楓はこの世界に来てから旅をしていた。
「なのになんで俺はこんなことを・・・・・」
「ふはははははは！　何を憂いている。鬼の魂を宿す哀れな宿命を持つ、見た目の割りに更年期を通り越した精神年齢の男よ」
「憂いてない」

「ではあれか。一周回って思春期であるな。ふはははははは！　恋に励んで見るが良い！　そして多いにフラれ我に悪感情を捧げるが吉と出た」

人の心を見透かしているのか、これ以上言葉で返してもバニルに勝てないと悟り、楓は更に口数を減らしていると、ミアハファミリアのナァーザが不機嫌そうな顔で何かを探しすように歩いていた。

「おっと、鈍感系主に好意を寄せるも未だ叶わぬ哀れな犬娘よ。うちのポーションを買っていくのが吉とでた」

売り言葉が三度の飯より大好物なのか？

バニルの度々挑発する言葉に楓は呆れながらも、この場の様子を眺めていると、ナァーザは物凄い剣幕でバニルに突っ掛かってくる。

「あなたの差し金？　営業妨害もいいところ」

感情乏しい声音でも感じられる怒気に、バニルは陽気な笑いで返して見せる。

「ふはははははは！　見えるぞ。そうか。あの性悪女神にポーションを駄目にされたのだな！　なるほど。我輩もあの性悪女神にいずれ一発きつーいやつを食らわせてやろうと思っていたところだ。だが何分奴は見通せんので正確な場所などわからぬが、大方の予想はできるわ。アクセルの街で借金を背負ったあやつらは、この街で一攫千金を

狙うもダンジョンのレベルの高さについていけず、本日もサトウカズマの止まっている馬小屋で内職に精を出している頃だろう。行ってみるがよいわ！」

バニルの情報を元にナァーザは颯爽とその場を走り去っていく。

その１０分後。

「アンタねこの陰険悪魔！　アンタのせいで寝泊まりしてる馬小屋から追い出されたじゃない！」

アクアがバニルの店に早速乗り込んできて、早くも因縁をつけてくるが、

「日頃の行いを棚上げして悪魔のせいにするとは、さすが頭の可笑しい連中で有名な宗教の首魁であるな。普段から女神らしく振る舞っていれば良いものを、貴様の悪感情だけはくそ不味くてかなわん。早々に立ち去るが良い」

「言ってくれたわね！　なら女神らしく振る舞ってあげようじゃない。セイクリッドいだだだだだ」

「この馬鹿！　元はお前が悪いんじゃねえか！　駄目にしたポーション代金だけじゃなく、バニルの店を壊して借金増やすつもりか！」

「ち！」

バニルの舌打ちに横目で見ていた楓は嘆息する。
つまりは、ナァーザをけしかけ、アクアに乗り込ませたところ、この店を破壊させて売れない商品と水増しした店の修理代金と、慰謝料をぶんどるつもりだったか。
見通す力がなくても楓には容易に読めてしまった。
「何でもいいが、俺は上がるぞ」
「そこの日々旨くもない陰鬱な感情を垂れ流すあわれなバイトよ。上がるついでにそこの性悪女神を連れてダンジョンに潜るが吉とでた」
「は？」
仮面ごしに楓を見透かしたように見てくるバニルは、ピンと人差し指を立て、
「行ってくるがよい小僧。冒険というものにな」
※
『そこの日々クルセイダーの熟れた肢体に欲情してる男の世界ではロールプレイングとやらが流行っているらしい。仲間を募り難関突破することで、貴様に欠けていたものが

見えてくるだろう。ついでに店の為になるものを見繕ってくるが良いわ。バイト代を弾むぞ。ふはははははは！』

そんなバニルの胡散臭い送り出しの言葉を思いだしつつ、楓はアクアと一緒に街中を歩いていた。

ちなみにカズマは、アクセルの町から来たダストという友人と共に『ちょ、ちょっと、遊郭・・・・じゃなくこの街を友人に案内してくるよ～』と言われ、半ばアクアを押しつける形で早々といなくなってしまった。

「この街のダンジョンは噂では一攫千金が凄いらしいのよ！　これで一山当てればカズマさんも泣いて羨ましがるに違いないわ！」

「一攫千金が凄いのはこのダンジョンに限ったわけじゃないけどな」

この知性が足りてないアクアに、既に不安しか感じられない楓は、仲間を募るために豊穣の女主人へと足を運ぶと、

「丁度いいところに来たな嵯峨楓。早速だが世界の為に死んでくれ。いや、手短な願いで言えばこの店の為に死んでくれ」

「随分とスケールが途端に小さくなったな」

困り果てたアーチャーの顔から、不機嫌そうなモードレッドへ視線を向ける。

「貴様のサーヴァントが酔っぱらい客を今週だけで５６人ほど【ディアンケヒト・ファミリア】送りにしてくれてな。【戦場の聖女（デア・セイント）】がお冠だ。さすがにミアに昼間を任されている私の給金にも響く。最も貴様が死んでくれればこんな茶番をせずに済むのだがな」

「じゃあ何で殺しにこない」

「我がマスターがどういうけか中途半端な慈悲を拗らせてしまってな。無論以前の私ならそんなものを無視して貴様を殺しに行っていただろう。だが今は〝あの時〟と状況が違う。今はマスターの気まぐれに振り回されるのも悪くないと思ってるわけだ」

アーチャーの言う事情に耳を傾けながら、楓はモードレッドを一度みやり、少しばかり嘆息すると、モードレッドの側に歩み寄った。

まるで子供のように拗ねた所に可愛らしさを感じてしまった楓だが、それを口にするほど楓も野暮ではなかった。

「・・・・・モードレッド。一緒に冒険しよう」

不機嫌そうなに腕を組んで壁に寄りかかっていたモードレッドは、ちらりと楓をみやると盛大にため息をついた。

「お前も少しは誘い文句勉強しろよな。そんなんじゃ一生モテねぇぞ」

「必要があるのか？」
「あるんじゃねぇのか。お前だって大人になったら結婚考えるだろ」
そう言われ楓は考えたこともないと首を傾げる。自分のいた世界が滅び帰るべき世界もなく、この先もどうなるかわからない。
それゆえに自分の将来など思い描いたことなどなかった。
ましてや鬼の力を宿し、日々その侵食と戦う毎日。
それ故に自然とついて出た言葉。
「俺に必要なのはお前だモードレッド」
「は？」
「え？」
「「にゃー!!」」
「あら」
「た、大変！　か、カズマさんに知らせなきゃ！」

買い出しから戻ってきたリューとクロエ、店の掃除を手伝っていたアーニャとクロエ、アーチャーに厨房から追い出されたばかりのシルと、その場で退屈そうに待っていたアクアが、楓の告白に顔を真っ赤にして驚きの反応を示した。

「奏者よ！　余のことも忘れているのか！」
　店の外を掃き掃除していたネロが慌てて楓に詰め寄り、今まさに修羅場が始まりかけたところで、
「ネロ。勿論お前だって俺には必要だ。二人がいてくれないと俺は困る」
　本人は鬼の力を抑制する意味で告げたつもりであったが、モードレッドとネロは柄にもなく顔を真っ赤にして照れを隠すのに必死であった。
「やれやれ。どうでもいいが、準備の邪魔だ。そこのあまり役に立たないサーヴァントを引き取ってダンジョンに行くなりなんなりしてくれ」
　どこか温かな眼差しを向けてくるアーチャーに、楓はコクりと頷いて店を出ようとし、
「人手がへったからアクアを置いて行こうか」
　以前アクアが一度だけ豊穣の女主人を手伝った時の悲劇を思い出してのか、アーチャーは、
「店の酒を駄目にする気かたわけ」
　即答で断ったのだった。

※

「アーチャーの奴すげえ剣幕だったが何をしでかしたんだお前」

新たな仲間を募るために、街中を歩いていた楓達だったが、モードレッドはアクアにふと豊穣の女主人でやらかしたことを尋ねる。

「私はただお酒を運んでいただけなのよ！　そりゃトイレ掃除とかは滅茶苦茶喜ばれたけれど、私の神聖な浄化能力がお酒を水に変えちゃうのは仕方がないじゃない！　それでお酒や料理を運ばせて貰えなくなったから、得意の宴会芸を披露してあげたのよ！　そしたら宴会芸目当てのお客さん達ばかり増えちゃったのよ。でも仕方がないじゃない！　私の宴会芸が料理の魅力を上回ってたんだから！」

「そりゃミアが怒るのは無理無いことじゃな」

アクアが断られた理由に一同は納得。

「しかし仲間を集めると言っても宛はあるかの奏者よ」

ネロの問いかけに、楓は今一度バニルの助言を思い出す。

『攻守に優れたパーティー編成も大事であるが、物資の運搬とそれを守るための適材適所の人材を集めるが吉だぞ小僧。やたらと人数を増やせばその分だけ分け前は減る。

それも考慮仲間を集めるがよい』

その言葉を思いだし楓は今一度三人を見るが、ネロは近接戦闘は得意だが、宝具の特性と本人の資質からして指揮官的な役割が適している。

更にモードレッドは完全に前衛特化型でアクアは魔法に優れた後方支援系。

最もアクアに関しては、カズマがこっそり楓に耳打ちした来た情報から、ステータスは知性と幸運以外カンストしているが、必ず何かしらやらかす問題時。

あまり単独で行動させずに監視役をつけた方がいいとか。

そんな奴を押し付けてくるなよと今更ながらに思う楓だが、既に事態は進んでしまっている以上どうしようもない。

「とりあえず運び屋（ポーター）と、遠距離攻撃を1人、前衛と中衛を一人ずつ加えるか」

最も臨時で仲間になってくれる者がいればの話だが。

楓は1人胸中に不安を抱えながら街を歩くのだった。

第十一話　冒険者

冒険。それは時に未知の秘境に挑むこともある危険な行為。
それ故にそれなりに熟練されたものを仲間に引き入れるべきなのだが、オラリオのダンジョンに挑むにあたり、楓は人選に苦戦していた。

オラリオのダンジョンに挑む冒険者のパーティーでは。ポーターやヒーラーにスミスが組み込まれることが多い。
何せ不測の事態に陥ると予定していた期間よりも長く留まることが考えられるために、それを見越したパーティー編成を組むからだ。
だか悲しいことに、現在楓のパーティーに参加してくれそうな者はいなかった。
何せどこのファミリアにも所属していないためにレベル無しの加護無し。
そして実績すら無いために、彼らを知らないものは敬遠してしまうのだ。
では知り合いに頼むことにいざなっても、ヘスティアファミリア等の親しい者達は、ギルドから召集を受け、前回のオラリオ襲撃の件から対策の為の会議を行っていた。
団長クラスが出席している以上、団長に許可無しに人員の貸し出しなど無論出来るこ

とも無く、結局人が集まらずに途方に暮れることとなる。
「最悪ポーターはアクアに任せるとして」
「なんでよー！　カエデさんちょっと辛辣すぎやしませんか！　もう少し私に優しくしてよ！　敬ってよ！」
　アクアという存在の性格を既に把握してしまったせいか、流石に敬うことが心憚られる楓は、
「さて、野良の冒険者を探すか」
　アクアの言葉を軽くガン無視。

「無視しないでよー！」
　そんな一同の側を一人の人物が通りすぎていく。
　汚れた鉄兜と革鎧の人物は、修繕から戻ってきたばかりの装備を革袋に入れ、それを抱えて歩いていた。

「あ～！　ゴブリンスレイヤーじゃない！　アンタ暇でしょ！　ちょっと私達に付き合いなさいよ！」
「ゴブリンか？」

「違うわ。冒険よ！　泣いて喜ぶがいいわ。このアクア様が冒険に誘ってあげるのよ。世界中のアクシズ教徒も羨ましがる栄誉なことなんだから！」

「そうなのか？」

ゴブリンスレイヤーが楓達に確認するように尋ねると、三人は揃って肩を竦めて見せる。

「そうか。だがゴブリンでないなら断る」

そう告げて歩き始めるゴブリンスレイヤーだが、アクアは突如ゴブリンスレイヤーの体にすがり付く。

「御願いよぉ～！　私ここで借金を減らさないといけないの！　いい加減じゃがまるくんのバイト嫌なのよぉ！　この間なんかロリ巨乳の女神に『宴会芸しか取り柄がないのかい？』なんて馬鹿にされたんだからぁ！」

一体二人の神の間にどのような争いがあったか等、この場の四人にとって至極どうでもいい話であったのだが、共通して言えることは、この水の女神が非常に哀れであったことだ。

「まぁ、ダンジョンにはゴブリンも出るみたいだしいいんじゃねえか？」

「出るのか？」

モードレッドの助け船に反応したゴブリンスレイヤーに、アクアがこくこくと頷く

と、暫くして考え込んでいたゴブリンスレイヤーは、

「分かった。それなら行こう」

こうして野良パーティーにゴブリンスレイヤーが加わったのだった。

「え？　ダンジョン？」

楓が続いて声をかけたのはクウェンサーとヘイヴィアの二人。

防壁工事は既に一段落し、特にやることもなく手持ちぶさたにしていた二人は、今後のことを考えてギルドで自分達でも出来そうな仕事を探していた所であった。

「別にいいけどよ。呑気にダンジョントライしてていいのか？　大体俺達は武器はあるけどオラリオの連中みたいな身体能力無いんだぜ？　武器が通じない相手に出くわしたらそれこそアウトだっつうの。オブジェクト相手ならそりゃ分析官としての能力はいかせるけどよう」

「ポーターを頼みたい。お前達の戦闘力不足は此方で補う」

「いいんじゃないかヘイヴィア。ダンジョンには元の世界に帰るためのヒントが意外にも転がってるかもしれない。お姫様が働いてるのに俺達だけブラブラしてるわけにもいかないだろ」

クウェンサーの最もな意見に頭を掻くヘイヴィア。
「しょうがねえ。相棒が世話になったみたいだしな。それに」
ヘイヴィアはモードレッドに視線を向けて、
「気の強そうな女がパーティーにいるっていいもんだ」
「こんな時に相変わらずだなヘイヴィアは」
呆れるクウェンサーに、ここぞとばかりにヘイヴィアは食って掛かる。
「お前はいいよな！　合流するまでの間に俺がどんな思いしたかわかるか！　出会う女大抵はネタ枠だぞ！　ドMクルセイダーに爆裂中毒の中二病のロリっ子に宴会芸が取り柄の女神様だ！　うぅ・・・・・何だか爆乳上司が恋しくなったぜ」
「ハイハイ。そのうち会えるさ」
ここぞとばかりに不幸な身の上をぶちまけるヘイヴィアに、モードレッドが肩を叩き、
「どうでもいいけどよ、早く準備しろよな」
容赦ない扱いをするのだった。

※

「１２時の方向にコボルト3じゃモードレッド！　ヘイヴィアは集音器を使い索敵、決して発砲するでないぞ。ゴブリンスレイヤーはヘイヴィアとクウェンサーの警護！　クウェンサー、マッピングは出来ておるな？」
「ばっちしだ皇帝様」
　楓の指示によりこの場の指揮を任されたネロにより、パーティーは遺憾なく能力を発揮していた。
「支援魔法の準備出来たわよ！」
「了解じゃ。アクアはゴブリンスレイヤーとモードレッドにそのままブレッシングとパワードをかけい！」
「任されたわ！」
　そんな光景を眺めながら、楓は・・・・・暇していた。
「なぁ、俺は？」
「奏者は黙ってふんぞりかえっておれば良い。仲間を信じて任せるのもリーダーの責務じゃ」
　確かにネロの言うことも一理あることは理解していた。
　現状ではコボルトの数は八体だが、モードレッドの一撃はその斬撃の衝撃だけで周囲のコボルトを巻き込み、あっという間に数を減らし、それに巻き込ませない形でゴブリ

ンスレイヤーを後方に回す。
楓の出番は、モードレッドもしくはゴブリンスレイヤーの漏らした敵が、接近しなければ無い。
例え接近したとしてもそれはそれでネロが片付けてしまうため、やはり暇なことに代わりはない。
これがパーティー。
確かに連携が整っており、それぞれ適材適所というものな合わせた形でネロが指示をだしている。
その指示は多くの戦場で指揮を重ねていたネロだからこそ出来ることで、楓には出来ないことだった。
「どうした奏者？」
「いや。ネロは凄いなと思ってな」
「今頃余の凄さがわかったのか。ふふん。もっと誇るがよい。お主は素晴らしいサーヴァントを従えておるのだぞ」
「おいネロ！　こっちは終わったぞ。」
前方のコボルトの群れを片付けたモードレッドが、どこか不機嫌そうな顔を浮かべて戻ってくる。

「どうだった?」
　ぶっきらぼうに尋ねてくるモードレッドに、ずいっと顔を近付けられ驚きつつも、
「鮮やかな手際だ。流石モードレッド」
「だろ?」
　途端に機嫌を良くする。
「さぁて俺達は魔石回収しますか」
「俺も手伝おう」
　ヘイヴィアとクウェンサー達を手伝い、ドロップアイテムや魔石回収をしていると、その近くをオラリオの冒険者達が通りすぎていく。
「んだ、見ねえ顔ばっかだな。大方ラビットフットの噂に当てられて冒険者になったんだろうが、死にたくなかったら調子に乗るんじゃねえぞ」
　目付きの悪い、額と左頬に傷を持つ中年の冒険者はジロリとクウェンサー達を睨んで歩き去っていく。
「んだよマスター。止めんなよ!」
　今にも殴り掛かりそうなモードレッドを止めた楓。
「悪意のない言葉だ。あの男の目はルーキーを疎んじる目ではなく、心配するような目をしていた」

「んだよ。ツンデレさんかよ。ま、でも全部が全部そんな親切な野郎じゃねえさ」

回収した魔石やドロップアイテムを楓から受け取り、ヘイヴィアは鞄に詰め込んで背負い直す。

そうしてクウェンサーの回収も済んだところで再び歩き出した。

そうして18階層直前で、楓達は階層主の洗礼を受けることとなった。

「おいおいおい！　オブジェクトなら兎も角として、こんなデカイ怪物がいるなんて聞いてねぇぞ！　この間のオーガ以上じゃねえか！」

「うへぇ。ハンドアックスも通じるかわかんないな」

及び腰になるヘイヴィアとクウェンサー。

そんな中、

「くそが！　ルーキーがこんなところまで来やがって！　こっから逃げろ！　コイツは通常の階層主じゃねえ！　レベル4以上相当の亜種だ！」

数刻前に上層で出くわした額と左頬に傷痕を持つ男ことモルド＝ラトローが叫ぶと、ゴライアス亜種が巨大な豪腕で襲いかかってかる。

まともに直撃を受けたら一溜まりもないそれをに、モルドは避けきれずに死を覚悟した時だった。

「てやあああああ！」

頭部まで覆う完全霊装姿のモードレッドが立ちふさがり、その豪腕の勢いを殺しにかかる。

だが、通常のゴライアスであれば抑え込めただろう豪腕の威力は、亜種ということもあってか殺しきれず、途中でモードレッドは判断を切り替えモルドの体を豪腕の軌道上から投げ飛ばして逸らす。

そのまま取り残されたモードレッドは吹き飛ばされ、壁に体を激突させた。

あのレベル6を圧倒した鬼の手を倒せるモードレッドでも、まさかの力負けにネロはこのゴライアスがただの魔物でないことを察知する。

「奏者！」

「わかってる！」

楓が鬼の力でネロとモードレッドを強化しようとした時だった。

「随分とヒヨったんじゃない楓」

頭上から聞こえた声にとっさにネロが跳躍しアエストゥス・エストゥスを構える

と、上空から降りてきた人物の大鎌がネロを霊装ごと吹き飛ばした。
「お前は・・・フラニーなのか?」
「気安くその名前で呼ぶな裏切り者!」
とても重量物を扱っているとは思えない警戒な動きのフランチェスカ＝ヴェルズと、さらにゴライアスによる攻撃で、もはやこの場は乱戦状態に陥っていた。
三つ巴の戦いの中で、モルドはよろよろと立ち上がりクウェンサー達に走りよってくる。
「何ボーッとしてやがる! 今のうちに逃げやがれ」
「そう言われても仲間を見捨てて逃げるほど俺達は人間をやめちゃいない。アンタ冒険者なんだろ? もし仲間が窮地に陥ったら逃げるのか?」
「くそが。優等生ぶりやがって」
吐き捨てるモルドに、クウェンサーはゴライアスを注視して尋ねる。
「あいつは自己再生とかそんな感じの能力は持ってるのか?」
「あると考えた方がいい。だが俺が以前相対した似たような化け物には数秒のタイムラグがあった」
モルドの情報を元にクウェンサーは頭の中で戦略を組み立て始めるなか、ヘイヴィアが顔をひきつらせ始める。

「おいおい相棒、まさかと思うが戦うつもりか？」
「楓達は足止めを食らっているし、ゴライアスもそっちに集中している。なら残った俺達で戦うしかないだろ。アクア！　ハンドアックスに付与魔法をかけて威力を強化できるか！」
「爆発威力、もしくは効果倍増っていう意味ではできるも知れないけど、それでも限界あるわよ？　あのゴライアスを倒すには到底およばないわ」
「別にそこまでの威力は求めてない。だが、できるか？　スピードも腕力も凄まじ過ぎる」

「何か悪巧みあんなら聞かせろよモヤシ」
　モードレッドがクウェンサーの元へとやって来ると、クウェンサーが不敵な笑みを浮かべる。
「ああ。モードレッド、お前にしか頼めない。あいつの注意を惹き付けてくれ！　出来れば出し惜しみせずに大技ぶちかまして欲しい」
「へ！　期待すんなよ。マスターの鬼の力がセット出来ない以上、俺もレベル６〝程度〟しか能力がねえ」
　モードレッドの言葉にモルドは驚きの顔を浮かべる。

「おいおい、レベル6を程度扱いかよ。お前ら一体何もんなんだ」

モルドの問いにクウェンサーとヘイヴィアとモードレッドは、互いに顔を見合せ、そして得意気な笑みを浮かべた。

「「冒険者さ」」

第十二話　強襲

「随分とよわくなったんじゃない楓。嵯峨飛燕流ってそんなもの？」

　くるくると大鎌を振り回すフランチェスカ。その大鎌の重量を軽く扱える腕力からして、彼女がただ者ではないことは、初対面であるネロはすぐに理解する。

　だが崩壊した世界の時からの付き合いであるネロは、彼女のことを知らない。なのに楓とフランチェスカが互いを知っていることに、

「奏者、あやつと奏者はどういう関係じゃ？　余は知らぬぞ」

「そうだ！　マスター俺も初耳だ！　お前俺の知らないところで女作ってたのかよ！」

　ネロとモードレッドが極端に不機嫌な態度を見せたことに、若干の理不尽さを感じる楓。

「何で怒ってるんだ？」

「「別に怒ってない」」

　明らかに怒っているとしか思えない発言なのだが、本人達が認めない以上追求しようがない。

「フランチェスカはヴェルズコーポレーションの令嬢〝だった〟。嵯峨財閥とヴェルズ

コーポレーションは長い付き合いで、彼女は幼馴染みで許嫁でもあった」
「「許嫁!!」」
まるで魂が抜けたように呆ける二体のサーヴァント。
「どうでもいいけとデカブツが襲ってくるわよ?」
空気を読まないことで定評のあるアクアの指摘に、
「「どうでもよくない」」
殺気と怒気の孕んだ声でモードレッドとネロが一喝。
「ちょっとヘイヴィア!　二人が理不尽に怒るの!」
涙ながらにヘイヴィアに鼻水を擦り付けながら喚くアクアに、迷惑そうにヘイヴィアはアクアを引き剥がそうとする。
「うっせぇ!　鼻水押し付けるんじゃねえ!」
そんなアクア達をよそに、楓とネロはゴライアスの攻撃を巧みにかわし、フランチェスカの不意の攻撃に対応を迫られ、危機的状況に陥る。
無論ゴライアスの標的の中にはフランチェスカも含まれているのだが、フランチェスカは巧みにゴライアスの死角を利用し、瞬間的なゴライアスの攻撃タイミングを先読みし、攻撃を誘導しているのである。
天性の戦場把握能力と言っても過言ではないそるに、ネロも敵ながらフランチェス

カを内心で称賛していた。
（余が人間だった頃に戦場で会いたくないやつじゃな）

「奏者！　余に鬼の力を使え！」
「駄目だ。フランチェスカ相手に使えない」
「こんな時に敵に情けをかけるか」
「フランチェスカは敵じゃない！」
　言い切る楓に対し、憤りを覚えたのはモードレッドでもネロでもなく、フランチェスカ本人であった。

「・・・・・敵じゃない？　笑わせないでくれる？　私の両親を殺し、妹を殺し世界まで滅ぼしたあんたが！」
　フランチェスカは大鎌を一回転させ、その刀身に蒼炎を纏わせる。
【絶対焼失の蒼炎刀（ヴァナ・フランヴェルジュ）】
　蒼炎が存在するだけで放つ熱波は、側に迫ったゴライアスに触れることもなく燃やしはじめる。
「あの力・・・・・・宝具に相当するぞ奏者。ただの人間が通常扱える力でない」

ネロの疑問にもとれる言葉に、楓は白の刀である霊刀赤光（しゃっこう）と、黒の刀である霊刀焔影（えんえい）を構え、迫り来る霊気のこもった熱波を切り裂く。

「お前が俺を憎み殺したいのはわかるが、今は殺される訳にはいかない」

「そんなアンタの都合なんか知らないわよ！」

放たれる蒼炎を霊刀で切り払った時だった。

焔にまみれながら拳を振り上げるゴライアスに、ゴブリンスレイヤーが持っていたバニルの店で買ったカンテラをぶつけた。

次の瞬間、その場で大爆発が起こりゴライアスが腕を吹き飛ばされて唸り声を挙げた。

「くそーーーーー！　使うなら前もって言いやがれ！　耳がいてぇじゃねえか！」

文句を言うヘイヴィアに、ゴブリンスレイヤーは、

「使う瞬間を敵の前で教えるものか。ゴブリンの前なら特にな」

「「ゴブリンじゃないから！」」

アクアとヘイヴィアとクウェンサーが涙目で抗議したものの、結局帰って来た言葉は、

「そうか」

素っ気ない言葉であった。

一方、攻撃を無力化されながらも、フランチェスカの攻撃は楓やネロを圧倒していた。

「こやつ化け物か！」

サーヴァントの腕力にも匹敵する衝撃を、なんとか受け流すネロ。

「サーヴァントに言われたくないわよ！　・・・・・・もっとも」

不敵な笑みを浮かべるフランチェスカに、ネロは咄嗟に楓を突き飛ばした瞬間、その胸に深紅の槍が突き刺さる。

「まず一体」

ネロを貫いた大槍が自動的に引き抜かれて持ち主の所へと戻る。

今まで姿を隠していたそれが姿を現すと、フランチェスカの側に降り立った。

「あまり好きじゃないやり方だが、ここは戦場だ。悪く思うなよ」

そう告げるサーヴァント。

「そ・・・・しゃ・・・・・余は・・・・・・これまでじゃ」

そう告げ光の粒子となって消えていくネロに、楓はその頭を優しく撫でる。

「・・・・・・・ネロ。勝手に俺の側から離れることは許さない」

「駄目じゃ・・・・その力は」

楓は意を決した顔を浮かべた時。

《我が内に宿るは鬼の神と十一の楔。十の棺と鎖は己の旅路（あゆみ）と嘆きを表し、その道を理解するものはなく、ただ孤独に闇の中から太陽を恨めしく見上げるだけ》

「やめ・・・・・よ・・・・そう・・・・・・しや」

涙ながらに訴える消えゆくネロを、それでも繋ぎ止めようと楓が力を解放しようとした時、その胸をフランチェスカの刃が貫く。

「させない！　あんたをここで殺す！」

「遅かったな」

不敵な依美を浮かべる楓に、大槍を持つサーヴァントが危機を察知してフランチェスカをその場から抱き上げるように引っ張り出す。
「一体何が起こってんだよ!」
一連の光景を見ていても理解が追い付かないヘイヴィアに、モードレッドが悔しそうな、それでいて悲しみの混じった視線を楓に向け話す。

「マスターはネロを助けるために賭けに出たんだ。本来解き放ってはいけねぇ封印の力を解き放ち、その霊力でネロを繋ぎ止めようとしてる」
「・・・・・その言い種じゃ何か問題あるんだろ?」
クウェンサーの質問にモードレッドは歯噛みする。
「本来鬼神の封印は十の封印を施す神の化身とそれを統括する神で構成される。その一つを目覚めさせるということは封印が弱まる」
「なんだよ封印って!」
「俺も詳しくは知らねぇけどよ。マスターが特殊な力を備えているのだけは知ってる」

モードレッドがそう告げた時、楓の足元を中心に巨大な魔方陣が浮かび上がり、巨大な四本腕の巨神が姿を現した。

その四本腕が握る十本の鎖に繋がれた棺のうち、一つが蓋を開いた瞬間、中から一体の甲冑騎士の姿が現れた。

その甲冑騎士は光の粒子となり消失したと同時に、突如ネロの体が光に包まれ、貫かれた筈の胸は癒えたばかりか、霊装が突如変化しはじめる。

「本当に・・・・・・奏者は馬鹿じゃ」

力の解放で意識を失う楓を愛しそうに眺めたネロは、そっと楓の体を抱き締める。

「やべぇぞ！　ゴライアスが敵に脅威を覚えた！」

かつてゴライアスの亜種と戦ったモルドは覚えていた。

ダンジョンにとって脅威とのる存在に対し、ダンジョンが産み落とした亜種かま敏感になることを。

蒼炎によって受けたダメージを早々に回復させたゴライアスが、豪腕を二人のいる場所に叩き付けた時。

「清浄なる光、意思を持ち大剣、全てを射抜く大槍を持つ万神の加護の前に、我が意志は不屈とならん！　我が意志に応える万神の剣（ファーラグハッ）」

その拳がまるで微塵切りの如く砕かれる。

「今だ！　モードレッド！」

「クラレントオオオオオオブラッドオオオアーサアアア！」
　片腕を破壊され怯んだゴライアス亜種に対し、モードレッドが渾身の宝具の一撃をぶつけた。
　混線を避けるために一時フランチェスカを待避させたサーヴァントは、今一度大槍を構え、狙いを意識のない楓へと定める。
　それはこの戦いにおいて明確な勝利を納める為の最善の手段。
　今ならばマスターが求める結果が得られると考えたサーヴァントの独断であったが、それを許すほど向こう側のサーヴァントは無能ではなかった。
　ネロは明確な敵意を持って次の攻撃の準備をしていたことに、大槍のサーヴァント――ランサーは小さく舌打ちをす。
「随分といい女に恵まれてるじゃねえか。今回は退かせて貰うか」
「ちょ、ランサー！」
「お嬢ちゃん。悪いが今回は退かせて貰うぜ。流石に状況が悪いんでな」
　ランサーはマスターの安全を最優先してその場を立ち去る。
「ったく。逃げ足が速いぜ」

力を出しきったモードレッドがぼやくなか、クウェンサーは走り出していた。
まだ戦いは終わっていない。
モードレッドの宝具の一撃を食らって尚コアを残すゴライアス亜種は、即座に自己再生を始めていた。
「ベルから以前聞いていた。巨大な怪物でもコアを破壊すれば消滅するって。強化されたハンドアックスとコアの強度、どっちが上か確かめてやろうじゃないか」
ブクブクと泡を浮かせて自己再生を始めるゴライアス亜種に近づいたクウェンサーは、その手からハンドアックスを放り投げ、爆発の余波に巻き込まれまいと岩陰に逃れた。
「これが俺達冒険者のチームワークだ！」
コアにへばりついたハンドアックスが、クウェンサーの起爆スイッチによってひび割れを起こし、最終的に砕け散ってゴライアス亜種が消滅する
「ハンドアックスの威力を高めてあげた私のおかげでもあるわね。さぁて今回のドロップアイテムは何かしら！」
「お馬鹿！　何でお前はそうやってフラグを立てるの！」
普段であればカズマの役割であるツッコミを、ヘイヴィアが反射神経の如くツッコんだ矢先だった。

階層に広がる大規模な振動が起こり、その場に地割れが起こる。

「くそ！」

モードレッドは近くにいたヘイヴィアとアクアをの体を掴むと、近くの入り口まで投げ飛ばす。

「ゴブリンスレイヤー！」

「こっちは問題ない」

咄嗟に入り口へと待避したゴブリンスレイヤーはそういうと、持っていた縄をモードレッドへ向けて投げ渡す。

ゴライアスへハンドアックスを投げつける為に離れていたクウェンサーは、ただ一人地割れの中へと飲み込まれそうになっているのを見て、モードレッドはゴブリンスレイヤーに小さく首を横に降って見せた。

「馬鹿を助けに行ってくる」

そう言ってモードレッドはクウェンサーの元へと走り出す。

一方、意識のない楓を抱き抱えていたネロは、地割れを跳躍で交わしながら入り口へ

と向かう。

「奏者だけでも！」

先ほどの力の覚醒で回復はしたものの、大技を使ったせいで残された余力は少なかったネロ。マスターを抱えて走る力は残っていても、地割れのスピードには敵わず、いよいよ飲み込まれそうになり、とっさに楓をゴブリンスレイヤーにめがけて投げようとした時、楓の体がずり落ちた。

いや、すり落ちたのではなく、楓自らネロから離れ、その体を抱き上げていた。

「奏者！」

気づいた時にはネロを浮遊感が包み、楓の姿が遠ざかっていく。

ゴブリンスレイヤーがネロの体を抱き止めた時、楓の姿は地割れの中へと飲み込まれ、クウェンサーやモードレッドの姿さえも見えなくなっていたのだった。

第十三話　少年は冒険する

１７階層で盛大な地割れが起こる少し前。

ギルドの地下最奥で祈祷を捧げるウラノスに、ローブを纏った人物が現れる。そのフードの下から僅かに覗く白色の造形染みたものは、生物らしさが削げ落ちた、いわば残滓と言えるもの。

「フェルズか。良いタイミングきたものだ」

「そう言うということは、私が耳にしたダンジョンの〝変質〟の噂もやはり本当だったわけか。ならこれにも納得というもの」

薄暗い灯火に浮かぶ神とその手駒は、部屋に広がる湿り気を帯びた空気の中で、水晶に映し出される光景に、ただ無機質な反応を浮かべる。

１７階層手前の階層主の広間にて現れたゴライアス亜種。

以前１８階層に産み落とされた亜種とは別のものは、明らかに異質であることは理解できた。

前回はレベル６相当の冒険者がおらず、冒険者達はかなりの苦戦を強いられたが、今回はレベル６相当のサーヴァントがいて苦戦を強いられた。

ダンジョンに異変が起きているのは目に見えて明らかだった。
「〝外からの来訪者〟が明らかに原因か、もしくは」
フェルズの無機質な言葉に、ウラノスはそっと瞳を閉じる。
「嘆く不死の鬼神（ヴァナ・ラー）・・・・・の力をうちに宿した少年か」
「変質したダンジョンにて少年は呑み込まれた。いよいよ救援が必要かと思うがどうするウラノス」
フェルズの意見に耳を傾けていたウラノスは、暫くの沈黙の後に、瞼を上げそっと天井を見上げた。
「まかせる」
ウラノスの言葉を聞き届けたフェルズは、気配を消すかのうようにその場から音もなく立ち消えるのだった。

神社の境内。
枯れ葉の絨毯がいよいよ紅葉の季節を知らせる節目の時期になると、祖母は実に精力的な活動を始めていた。
春の温かな季節には、春の陽気に当てられて変態が現れるなんて言葉を耳にするが、

嵯峨家では決まって、秋になれば祖父の集めた春画（エロ本）を燃やす祖母の一大イベントが始まる。

もっともこれが例年として毎年続くようになってから、ご近所の主婦達はこぞって旦那の集めたコレクション（ガソリン）を提供するようになったこともあり、地元の妻子持ちの男性にとって悪夢の儀式と評されている。

『芋煮会のお知らせ』『秋刀魚祭り』『焼き芋祭り』『資源回収』

どれも回覧が回った次の日からは、男達はゴールDロジャーに変貌し、

『おれの財宝か？　欲しけりゃくれてやるぜ…　探してみろ　この世のすべてをそこに置いてきた』

と、挑戦状を叩き付けては子供達の前で公開処刑されてきた。

楓の祖父は伝説の春画蒐集家（ビブリオマニア）として有名であったが、よく境内で楓に語っていたことがある。

『この世には様々な神秘が存在し、それら全てを見て回ることは不可能じゃろう。それは世界中の様々な美女（おなご）と出逢うことと同じくらい大変なことじゃ』

『冒険とはすなわち美女と出逢うこと他ならない』

『出逢いとはすなわち男のロマン』

『探せ楓。ワシは嵯峨財閥の経済力を駆使し、春画の眠る神秘に宝を置いてきた。（グランドライン）　欲

しけりゃくれてやる…　探してみよ。　この世のすべてをそこに置いてきた』
『そして授けよう。嵯峨飛燕流装武術の秘奥義、無限の春画精製（アンリミテッドビブリオワークス）をな』
『いらない』
幼子ながら祖父の変態さ加減に辟易するほど、祖父がアホであることを理解していた楓は、祖父の悪趣味に染まることなく成長していた。
少なくとも祖母の行う秋の一大イベントを楽しみだった。
境内で集めた枯れ葉に投下されるエロ本（ガソリン）が燃えるのが好きだった。
幼馴染みの女の子と焚き火を一緒に囲むのが好きだった。
そんな細やかな日常が幸せだった。

※

「起きたみたいね」
うっすらと目を開けると、薄暗い空洞の中を照す焚き火に、退屈そうに薪をくべるフランチェスカだった。
「なんで」
「助けたわけじゃないわ。そこの馬鹿サーヴァントが落ちた先で勝手にあんたを拾った

のよ」

　空洞の入り口で番をしていたランサーが、まるで困ったように頭を掻いている。

「ったく。そう言うことにしておくぜマスター。本当、俺って毎度こんなんばっかだな」

「何よ？」

「何でもございませんよマスター殿」

　諦めにもにた自棄っぱちな返答を返し、ランサーは姿を消す。

「ありがとう」

「は？　馬鹿じゃないの。それより自分の心配したら？　アンタの仲間も落ちたみたいじゃない」

　フランチェスカにそう言われ、モードレッドとクウェンサーも地割れに巻き込まれたことを思い出す。

「今はまだ大丈夫だ。リンクは切れていない」

　霊的な繋がりがまだある以上、モードレッドは生きている。

　そう感じた楓はゆっくりと起き上がろうとしてふらついた。

「あんた霊力が空よ。あのサーヴァントを助ける為に過剰放出（オーバーロード）したのよ。だから今現在アンタのサーヴァントは魔力霊力共に供給を受けられないわ。そして」

　フランチェスカは楓に近づくと、楓の着ている上着のタートルネックを捲って、そ

の部位を鏡で楓に見せる。
　薄気味悪い漆黒の紋様が楓の首筋にまで及んでいるのが見えた。
「私はあんたを助けたわけじゃない。あんたが今の状態で死ねば封印は解放される。今死なれたら困るのよ。だからその封印を私に移しなさい」
　フランチェスカは端的にそう告げる。
「断る」
　即答する楓に、フランチェスカは勢いよく馬乗りになり、その胸ぐらを掴んだ。
「そう言うと思ったわ。別にこっちはお願いしてるわけじゃない。封印の依り代だって誰にでもなれるわけじゃない。私がアンタの許嫁だった理由も、私がいざというときの代替であることは理解してた筈よ」
　フランチェスカの強気な姿勢に、それでも楓は首を縦に振ることはなかった。暫くの間みつめあう二人。
「どうでもいいが、おっ始めるなら俺は席を外そうか？」
　ランサーが二人の側に姿を現しそう告げると、フランチェスカはふと自分の今の状況を改めて見直す。
　馬乗りになって楓の胸ぐらを掴んだせいで、楓の上着が捲れて腹筋の割れた腹が見えているのと、楓のズボンのベルトが落下の際に壊れたのか外れていること、ズボンがそ

のせいで半脱ぎ状態になっていることなど、客観的にみれば、確かに情事に見えなくもない。

「・・・・なんでズボンが脱げそうになってんのよ！　馬鹿！　変態！」

理不尽なビンタが楓の顔面に襲いかかるのだった。

※

クリーンな戦争に様変わりした時代で、数々のオブジェクトと戦ってきたクウェンサーにとって、地割れに巻き込まれて落ちると言う体験は初めてだった。

幸運なことは、落ちる際にモードレッドがクウェンサーのかばってくれたことと、世界一運が無い女神様が側にいなかったことだろう。

「これでアクアが側にいたら助かってないだろうな」

自嘲気味に笑いながら、自分の前を歩くモードレッドの背中を眺める。

ミリンダと同じくらいの身長である彼女を見て、パッと見では力強さは感じられない。

こんな小さな体の何処に怪物と戦う力があるのか？

「不思議だ」
「あん？」
「ちょっと鎧を脱いでよく見せてくれないか？」
「今お前が怪我人じゃなかったら容赦なくそこの崖から落としてる所だ」
「それ怪我してなくても止めて！　ピンピンしてても絶対死ぬから！」
　上層を目指して歩く迷宮のような通路。登り道であるものの、必ずしもこの道が上層へと続いてるかどうかなんてわからない。
　それでも歩かなければわからない。
　かろうじて無事だった端末でマッピングしながら、クウェンサーは必死になってモードレッドについて歩く。
「くそ。魔物がうじゃうじゃいやがる」
　幾つかのアップダウンを経験してそろそろ息が上がりかけてきた頃、非情にもモードレッドの口から絶望的な言葉を告げられ、クウェンサーはその場にしゃがみこんで頭を抱えた。
「ここまで来て魔物の群れかよ！」
　円形に広がった岩場の大地には、そこかしこにミノタウロスを始め、上層では見られなかった魔物達がひしめいていた。

「クウェンサー。ハンドアックスはどれくらいある」
「え～と、1日に15キロほどまでなら使えるみたい。あくまで体感の重さだけど。まああれだけの魔物を吹き飛ばせるかわかんないけど」
「吹き飛ばせなくていい。さぁてこのど真ん中を突っ切る。俺が指定した場所に設置して指示通り起爆しろ」
「ＯＫ」
　クラレントを片手に構えたモードレッドが、クウェンサーを担いで走り出す。
　驚異的な跳躍力で魔物の頭上を飛び越え、時にはその頭部を踏みつけてはクラレントではね飛ばす。
　そうして橋のように繋がった一本道に差し掛かり、
「ここを破壊する設置しろ！」
「了解だ」
　追いすがる魔物達を斬り払い、クウェンサーがハンドアックスを設置するまでの時間を稼いでいると、前方からも魔物達が現れ始める。
「マジかよ！　モードレッド！　急げ！　前方からも迫ってきたぞ」
「クウェンサー！　射線をあけろおおお」
　モードレッドの叫びに咄嗟に脇に逸れると、

「クラレントオオオオオオブラッドアーサアアアアアア!!」

膨大な光が前方の魔物達を呑み込んで消し飛ばし、設置されたハンドアックスを起爆させる。

「モードレッド！　急いで掴まれ！」

崩れる地面の中でクウェンサーが咄嗟に手を差しのべるも、モードレッドはその手を掴むことなく跳躍して魔物達が集まる反対側へと飛び移る。

「嘘だろ」

「ここで食い止めねえと、ダンジョンが再生した時にこいつらが追い付いてくる。いけクウェンサー！」

「ふざけんな！　お前を置いていけるかよ！　楓に会わせる顔がないだろ！」

半泣きの声で叫ぶクウェンサーに、モードレッドほ肩にクラレントを担いで笑みを浮かべる。

「生き残れクウェンサー！　俺はとっくに過去の存在なんだ。でもお前は違う！　英雄（ヒーロー）

になれ。そんで」

モードレッドは魔物の群れの中へと突っ込む。

――てめぇが一端の英雄になった時、また会おうぜ――

「う、モードレッドの」

その背中が魔物群れによって見えなくなった時、クウェンサーは走り出す。

自分の無力さをバネに、それでも自分の出来ることを探しながら。

かつてベル＝クラネルという友人の〝冒険譚〟を聞いたとき、自分にはどこか遠い国の話に思えていた。

だが今まさに迫られた選択肢を前に、クウェンサーは決めたのだ。

臆病さも慎重さも捨て、今まで数々の強大な運命（オブジェクト）に抗ってきたことを思いだし、

「モードレッドの馬鹿やろおおおおおお！」

クウェンサーは冒険する。

ひたすら駆け抜け、極限の中で研ぎ澄まされたクウェンサーの神経は、すり減ることを忘れたかのように頭をさえさせた。

「まともにぶつけたんじゃ倒せない。でも指向性ならどうだ！」

グラム単価がプラチナより高い爆薬を、手の中で捏ねながら信管を差すと同時に、強化種であろう巨大な岩鎧を纏ったミノタウロスの股ぐらをスライディングし、その脚へと取り付け潜り抜けると、クウェンサーは振り替えることなく走り出す。

スイッチを押すと、後方ではを起点に群がるデッドリーホーネット等の魔物を巻き込んで、盛大な爆発が起こっていた。

これがクウェンサーの冒険で、クウェンサーらしい決断だった。

「待ってろよモーちゃん。今すぐそっちに行ってその尻を叩いてやる！　脇の下であれこれしてもらうだけじゃすまないからな！」

カッコいいシチュエーションを台無しにするのは、相棒共々クウェンサーの十八番である。

それ故に、5体の岩鎧を纏ったミノタウロスが隊列組んで前に現れた時には、

「ちょっと調子にのり過ぎましたかね？」

なんておどけて許しを乞うなんてみっともないこともやってしまう。

もっともそれで見逃して貰ったことなど、人生において一つもない。
「マジでどうする。考えろ」
頭の中でハンドアックスの残量を計算しながら、今だモードレッドまでの距離があるであろう回り道の距離を計算しながら、さらに視線で周囲を確認する。
そして導き出された答え。
「ヤバいどうしよう！　俺絶対絶命じゃないか！」

背後に迫るデッドリーホーネット。一般的な冒険者でも一人では突破不可能な布陣を前に、クウェンサーは片膝を付く。
「それでもヘイヴィアなら考えるよな」
今だ消えない心の炎に薪をくべ、もう一度立ち上がる。
「どうやら生きてるようね」

背後に群がり始めたデッドリーホーネット達が突如、蒼炎に呑まれ灰となる。
「ただの人間の割りに中々やるじゃねえか小僧。気に入ったぜ」
岩鎧を纏ったミノタウロスの装甲を、軽々と大槍が貫いてコアを破壊し、その素早

い突きがいとも容易く強化種のミノタウロスの群を殲滅する。
「お前達は」
「故あって一時休戦中さ」
そう言って大槍を構えるランサーに、クウェンサーが慌てて掴み掛かる。
「急がないと！　モードレッドが！」
焦るクウェンサーに対し、フランチェスカがその後頭部を叩く。
「落ち着きな。あのセイバーなら大丈夫」

そう告げてフランチェスカは、モードレッドのいるであろう方角にそっと視線を向けた。
（私の時は間に合わなかった・・・・・・今度こそまにあいなさいよ馬鹿）

※

本来中層前半の界で起こることの無い異変。殺戮の闘技場（アリーナ）が出現したことは、後にギルドにもたらされた情報によって冒険者達は知ることとなる。
３７階層のコロシアムのように、強化種が無限に涌き出るそれは、霊力が殆ど残っ

ていないモードレッドにとって、ある意味過酷な戦いと言えた。
身体能力が高いと言っても、それはマスターから供給される魔力や霊力があって維持されるもの。
「くそがｰ」
もはや負った傷の修復もままならず、クラレントをひたすら振り回すことも難しくなってきた所で、強化種ミノタウロスの豪腕がモードレッドの霊装鎧へ叩き付けられる。
（しまらねぇなあ・・・・・・マスター・・・）
「お前ともっと旅したかったぜ・・・・」
先が見えない天井に向け、そっと手を伸ばす。
「モードレッドオオオオオオオオ」
聞こえる筈のない声を耳にして、モードレッドは僅かに首を傾けると、視線の先ではバッタバッタと斬り払われていく魔物達の姿が見えた。
「マスター・・・―なのか?」
魔物達が向かってくる敵に対し反応し、迎撃体制に移行するも、数の暴力を圧倒的

に無視した勢いに次第に魔物達の勢いは押されていく。

かつて戦国乱世にしれ渡った嵯峨飛燕流は、数々の戦場で多くの兵士達を想定した多対戦闘の技術。

それ故に一対百のキルレシオという驚異的な殺しの技術は、近代化が進むと更に海外から戦闘技術と知識が積極的に取り入れられ、その技単体では対人戦闘で最強とまでされてあた。

例えそれが魔物相手だとしても、戦いの中で瞬時に相手の特徴を瞬時に把握し、最適化された戦闘をこなす嵯峨飛燕流の前に敵ではない。

例え頑強な体を持っていようが、目や口の中は鍛えられないように、必ず存在する弱い部分を積極的に狙い、動きを封じた所で筋力が弛緩した一瞬を狙って首の骨や腕、足などを壊しに行く。

「迎えに来た」

「随分と遅かったじゃねぇか・・・って何で顔腫れてんだよ」

「時に理不尽なこともある」

意味不明だと苦笑するモードレッドは、歩み寄ろうとしてバランスを崩して楓に抱

き抱えられるように倒れた。
　強く抱き締められたことに、
「こんな時に不謹慎かもしんねえけど・・・・・・これも悪くねぇな」
　ふと無意識にそんな言葉を口にしていた。